

世界讀本





巴里凱旋門の圖

巴里凱旋門の圖

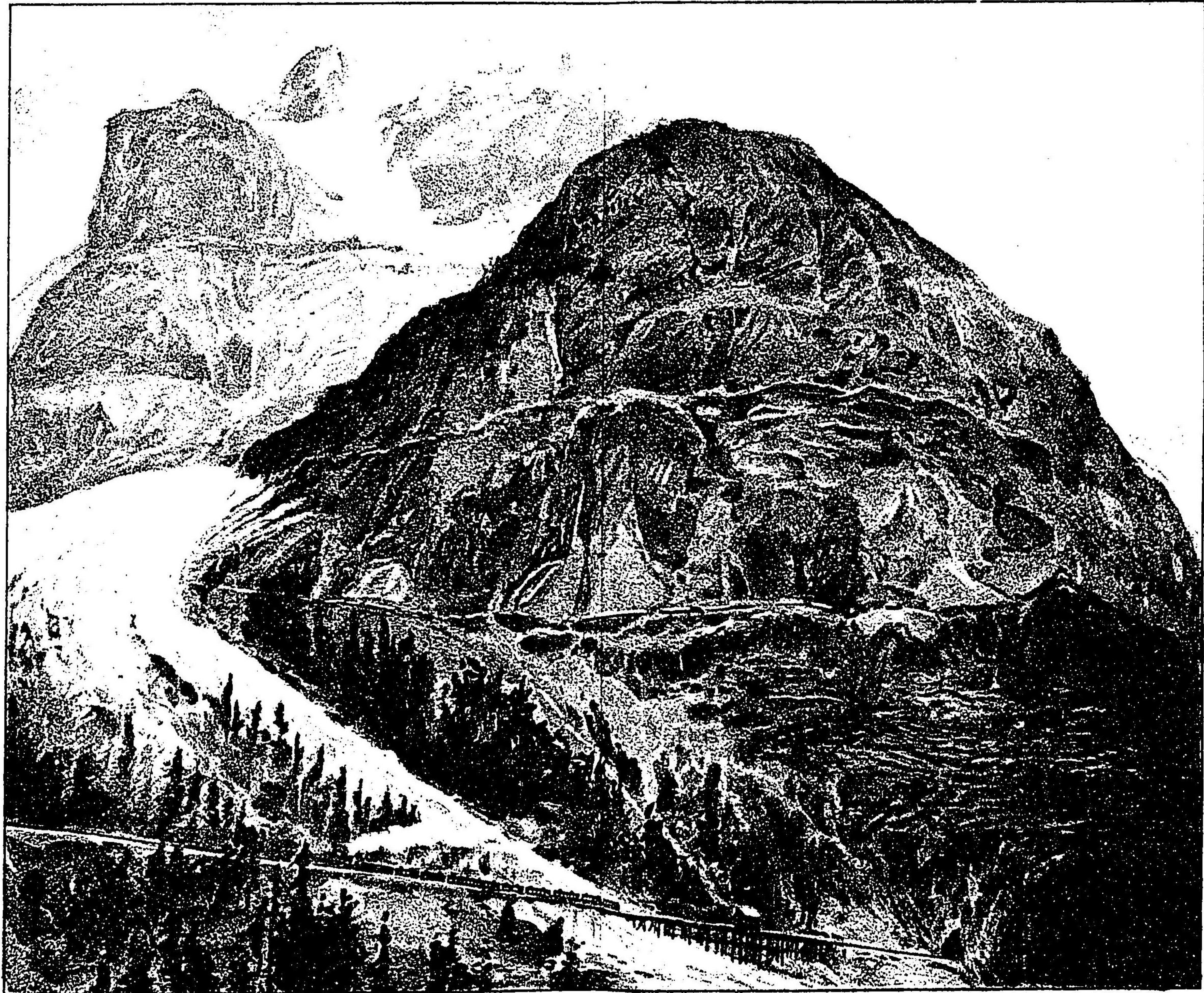
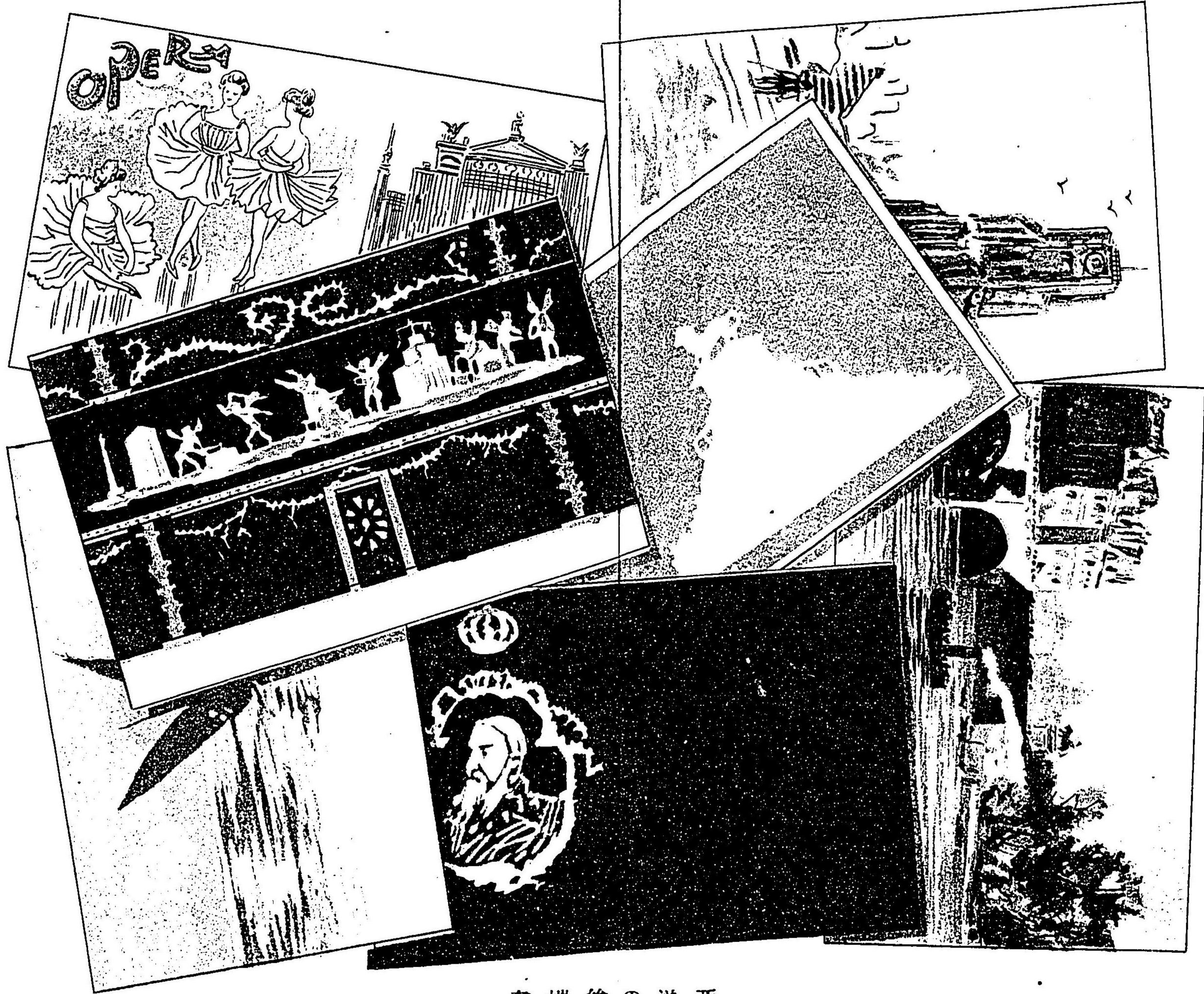


圖 の 山 機 落



-水湖のアヴェエジ



西 洋 繪 端 書



巴里第一大公園

448



Guido RENI 1575-1642 (Scuola Bolognese)
La Madelaine.

ヌーレドマ
畫ニルドーギ
蔵館物博ルブール

世界讀本を著はしたわけ

萬國の人々と交際せねばならぬ今の世にては、萬國の社會のありさまを知ること、最も急用な事である。昔なれば我は我だといつてすんで居つたが、今は成るべく博く世界の事情に通じ、深く考へ、遠く慮つて、我は我の分を立てゆかねばならぬといふ世中になつて來た。

就てはその歴史も知らねばならぬ、その地理にも通ぜねばならぬ、その言語文章も學ばねばならぬ。だから

小學中學より是等の事を教ふることになつてゐるのは、國の進歩上自然の結果である。併し學校で學ぶことは大變に有益なるだけに、むづかしくかたすぎて、動もすれば退屈することなどのないとも限らぬ。だからその間には是非柔らかな、そんなに頭の痛まない讀みものがあつて、正課を助けることがなくてはならぬ。西洋諸國には、夫等の爲に出來てゐる讀本があまたあつて、公園の散歩がてら、または睦まじき家庭の中、避暑避寒の友などに玩ばれてゐるのである。

この世界讀本は、即ちあまり堅くなく、頭が痛まずに、家庭またはその他にあつて、青年の人たちに讀んで貰ひたいために著はしたのである。その主旨は、今の世に最も知らねばならぬ、世界萬國の社會のありさまの一旦なりとも、せめて明にせしめたいと思ふに外ならぬ。必しも西洋の讀本の眞似するではない、學校にての正課を助ける爲に、こんな本は澤山なからねばならぬと思ふからのことである。表紙から口繪及び挿畫は、自分と一所に巴里倫敦などを歩いた小山正太郎君の筆である。文の足らず意の

達せぬ處は、この畫をよく見られたならば大に悟らるであらう。

明治三十四年七月

藤園主人

世界讀本

目錄

西洋各國の衣食住

家屋……共同生活……家の内の仕掛け……昇降機……二階三階の庭……火と水との便
 飲食物……各國人の好む酒……肉店……麵麩の種類……食事の度数……薬味の用ひ
 方……物買ひ……衣服……男女青年の服……男子の正服装服……贅澤を避け清潔を尙
 ぶ……女子の服……その格好……日本との比較及び評論

巴里の凱旋門

奈破翁一世……凱旋門の建立……その構造形式及び装置……國民の元氣を鼓舞す
 る教科門……上から見おろす景色……帝政時代の元氣……日本との比較及び評論

目錄

倫敦の繁華

三二

巴里と倫敦との比較 倫敦の位置 テームス川 倫敦市 蚤取眼血眼 市長の邸 地下鐵道 その昇降 乗合馬車 高架鐵道 車室は圖書館の如し 運漕車 市中の行列 日没後の景 市場のありさま 大公園 喫茶店 酒舖 クリストマス 前の賑ひ 新聞賣及び花賣 引札配り 日本との比較及び評論

伯林市

五二

獨逸流 道路 凱旋門以下諸建物 公園 彫像 皇帝の御像 交通機關 スブレ川 故老帝墳墓 珈琲店の装置 麥酒飲 質朴の風 男女服裝 軍人 帝王將 學事 日本との比較及び評論

歐米の市街交通

七一

紐育市の高架鐵道 電氣鐵道 駟け足にて歩く 倫敦の交通機關 巴里の

交通機關 汽車汽船 地下鐵道 乗合馬車 電氣車 伯林の交通機關 馬車の種類 露國及びバルカン半島 伊國 ジエニスの船 アルプス山の汽車 日本との比較及び評論

西洋人の公共道德

八三

一般道德 公共道德の守らる、所以 家に居り人を訪問する時の用意 家を出入する時の用意 食事の時の用意 道を歩く時の用意 乗合車乗合船に昇降の時の用意 勸工場新聞雜誌店に於る一般人の用意 料理屋の勘定 公園に遊ぶ人の用意 腰掛料 墓所の風 芝居寄席観る人の用意 日本との比較及び評論

西洋の畫端書

九九

畫端書の効用 地理歴史風俗を知る 美術の奨励をなす 畫端書通 畫端書帖 畫端書の最も行はる、國 大博覽會に於る畫端書 クリストマスカルト 日本との比較及び評論

露西亞の風俗 一一四

聖彼得堡の位置 その道路 家屋 馬車 その馭者 荷車 飲食物 茶を嗜む風 宗教熱 彼得帝の守り神 田舎の家屋 莫斯科市 キエフ邊の風俗 天秤棒 寒を防ぐ法 奈翁と彼得 全體の評論

瑞西の山水 一二七

瑞西の位置 世界の避暑地 瑞西の都府 時計商 諸旅館 アルプス山湖上の船 田舎の景 男女の服装 言語 神仙界 世界の共樂園

博物館及び動物園 一四〇

博物館の効用 巴里のルーブル館 リュクサンブル館 ヴエルサイユ館 外諸館 大英國博物館 サウスケンシントン館 美術博物館 外諸館 倫敦伯林巴里の諸動物館 博物館動物館に於る研究 陳列方法 博物館は古道具屋にあらず

西洋の宿屋 一六四

宿屋の種類 その投宿の時の心得 宿屋の取扱ひ 食堂 運動場 庭園 下等の宿屋

土耳其の風俗 一七五

コンスタンチノールの位置及び景色 土國皇帝 宗教熱 町の体裁 臭氣鼻を撲つ 犬の横行 鳩 料理 珈琲 衣服 一夫多妻 男女別居 蹴坐の風 獨裁政治 評論

加奈陀鐵道 一九四

カナダの位置 鐵道 晚香坡 モントリール 汽車中の装置 寢室 飲食室 喫煙室 見物車 黒奴のボーイ 落機山の絶景 その大工事 アメリカンインデアン その家 牧場 ナイアガラーの瀧 山川原野の景

蘇士運河 二二二

地峽開鑿の計畫 レセツプ氏の熱心大功 運河の長さ 英國人 通航税

富士艦の通過……運河のステーション……兩岸の眺望……隊商……黒奴の家……地獄の餓鬼……物をねだる……夜の沙漠……レセツプ氏の像

西洋各國の公園……………二二七

西洋諸國……公園の數の多き理由……各公園のありさま……その遊戯……その教育……その音樂……日本との比較及び評論

航海……………二四二

航海の必要……我が海國……航海中の娛樂……波……日……月……雲……魚……鳥……波上の自由國……日本人は蚤といはれん

芝居及び寄席……………二五六

オペラの仕掛……音樂と歌……テアートルの仕掛……音樂無し……芝居見物者の舉動……オペラ拜見……サラベルナル座……寄席の仕掛……運動場飲食席と見物場との區別……動物の藝……曲馬……大博覽會に於ける諸國の芝居類……日本との比較及び評論

巴里の花いくさ……………二七二

カルナバル祭……五色小紙片……全市狂す……滑稽なる風……花戦の禮……萬人共樂……日本との比較及び評論

西洋の商店……………二八九

裁縫店及び反物店……花屋及び菓子店……時計金銀寶石及び文房具遊戯店……書肆及び骨董店……肉店……湯屋及び散髪店……掛直……釣銭……商店の信用……賣子の敏捷

世界讀本目錄終

世界讀本

西洋各國の衣食住

藤園池邊義象述

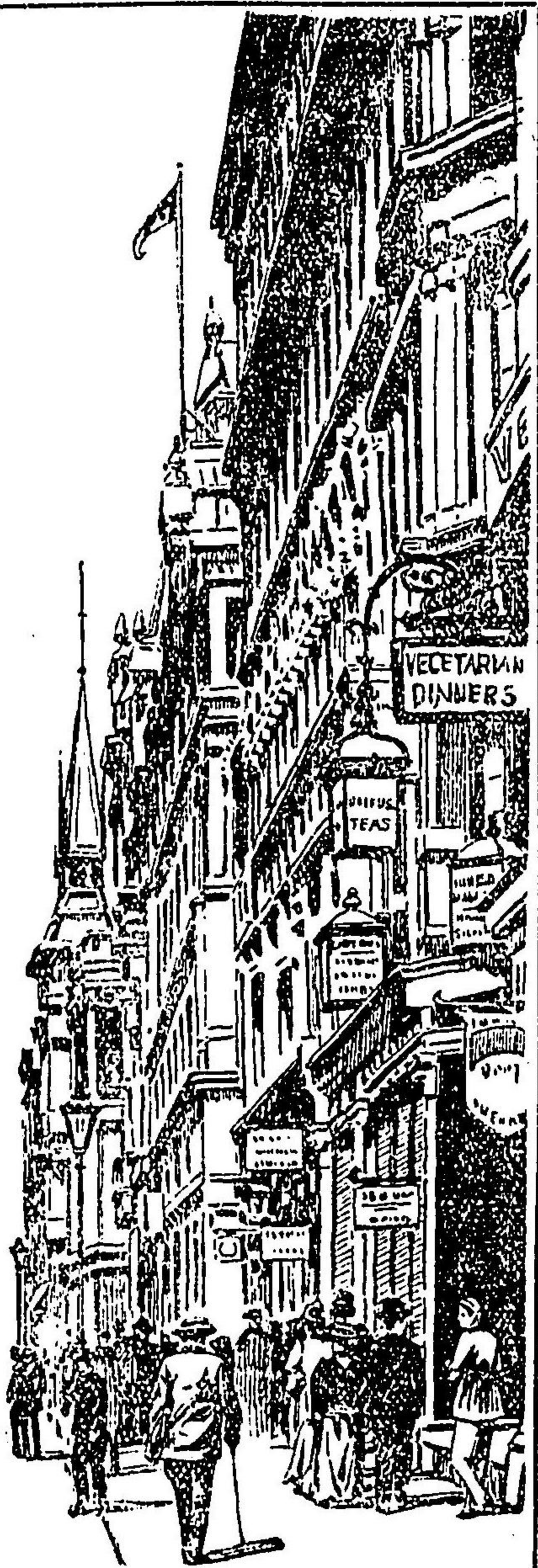
住んで居る家、食物、着物とは、同じ日本國でも處處で違ひがあるといふ譯だから、西洋と我が國と大がはりしてをるのは、寧ろ當りまへである。併し段々と交際も開けて、昔は西洋といへば、まるで海の底にでもあるやうに思つてをつたが、今は三才の童兒でも、英語の一つ位は話すやうになつたから、その衣食住の事も、大抵は知れわたつて來た。けれども實際を見てくるに、横濱や神戸の居留地などは、大分趣がかはつて面白いところが澤山ある。家屋は、十に九までは、共同居住で、丁度東京の諸官省のやうな、大

西洋各國の衣食住

な石造りや煉瓦造りのものか、軒を並べてひし〜こ建つて居る。その建築の工合は國によつてすこしづゝの違ひはあるが、まづ大方は似かよつてをる。高さは七八階より以上に及ぶものもあつて、一軒には何百といふほど室がある。その室には、大中小さまざまあるが、借る人の都合によつて、一室、二室、又は三室以上をもつてをる者もあれば、小さい一室ですまして居るものもある。餘つばご大金持か何か、でなければ、一軒の家を専有してをるものは少ない。まして土地ぐるめものは、曉の星よりも稀である。共同住居の大きな家には、百家族も住んで居る。大旅館のごときは、二三千人の客がこまつてをるのは、敢て珍らしくない。貧乏者ごとも、日本のやうなマツナ箱流の家にはをらぬ。必ずこの共同居住の一番高い天にちかい處にかゝまつてをるので、その住むも

の、得失は日本といつれがよいか分らぬけれども、外からの見えはごもかくも立派である。されば全体に通じて家の中の室々は、ごんな風かごいふに、隣室ごのしきりは、最も堅く厚く出来て居り、天井も床も嚴重であるから、餘つばご大聲でも擧げねば隣室には聞えず、非常な足踏みでもしなければ、下階には響かぬ。こんな譯だから、たま〜火事などがあつても、一階の火事は三階の人は知らず、三階の火事は一階ではまるで夢中でをるなごは、そんなに珍らしい話でない。家の中はぐる〜と梯子がついてをるが、大きな構へになるご、それをごん〜上り下りするばかりでも、半道位は歩いたやうにくたびれるから、昇降機ごいふもの、仕掛が必ず備つてをる。これには五六人は一度に乗らるゝやうになりたるが多く、又大きな家

には三處にも四處にも備へてあれば、いかに出入の人が多くても、待ちくたびれるやうなことはない。その昇降機は箱の大きいやうなもので、中には椅子も備へてある。だから例へば一階から四階に上らんとする時には、その旨をいつて、その入口の戸をあけて、中の椅子に腰かけをれば、ズラ／＼と獨りて持上りて、そのこゝまる處にて戸をあくれば、早く



自分の望んだ場所に来てをるのである。下る時もやはり同じ方法で、少しも面倒くさい事はない。こんな譯だから素より自分々々で庭をもつて住んでをるこいふ日本流義とは大に違ふ。ざつと下宿住居と思つてをれば近いので、共同庭園や共同遊戯場などは、其家についてをるものもあるけれども、地所の狭くて家の建て込んで居る處には、庭も何もない。たゞ室の工合によつて、椽側がついてをる處に、植木鉢でも並べたて、おく位に止まる。但大金持などは二階にも三階にも庭を造つて芝などを植ゑて居る物もある。日本では、三階にでも上りて見るこ大變に高い處に居るやうな心持がするけれども、あららではさうでない。例ひ七八階に居つても、向ふの家も隣りの家もさうであるから、窓をあくれば、すぐにそれ等こむき合になる。譯は無い、東京の路次を、その儘に十階も廿

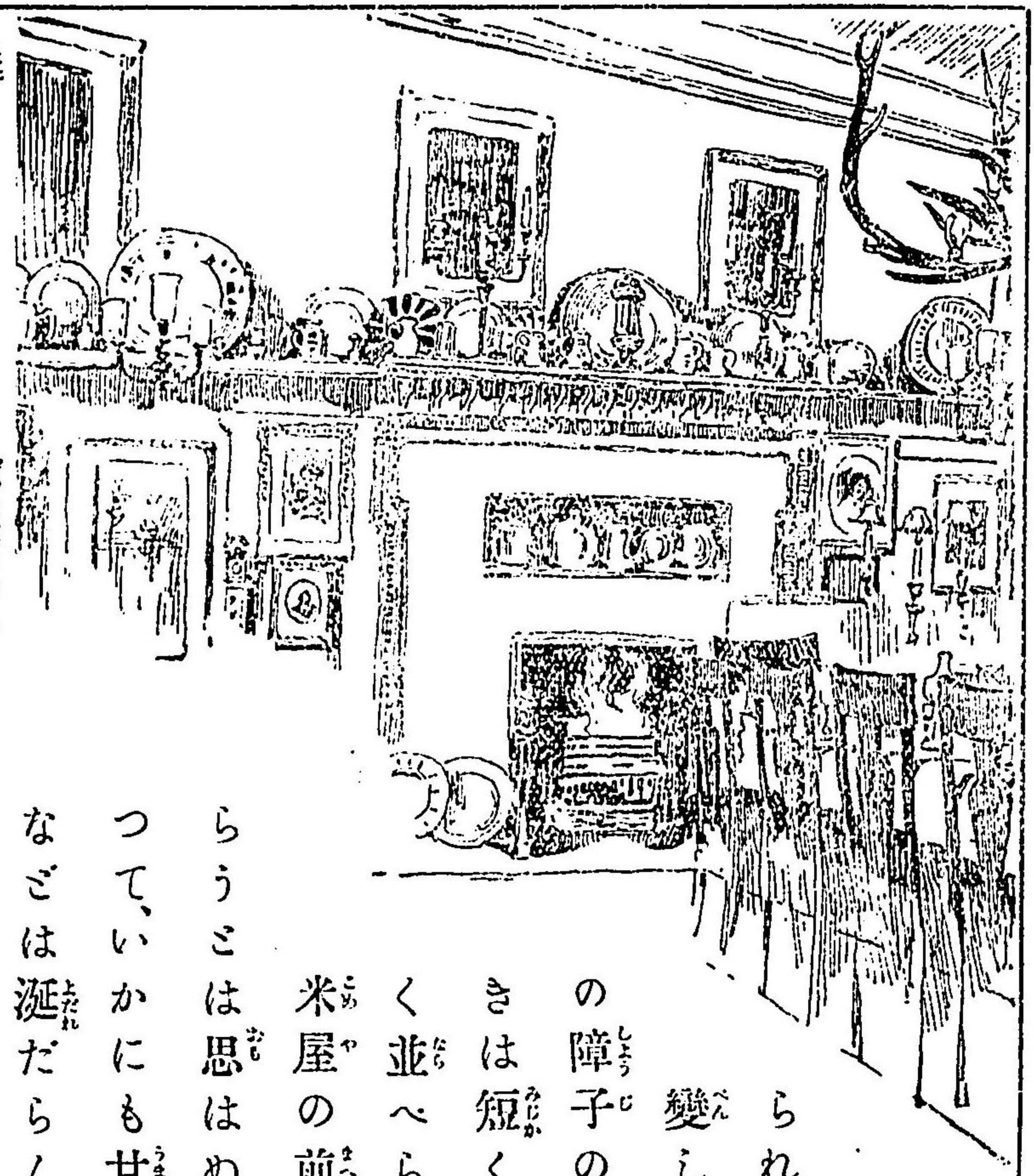
階も上に積みあげたやうなものだ。だから上る時は高いと思ふ
けれども、入つて見れば、一階に居るのと同じ心持になる。水道は
ごんなに高い處までも引いてあり、瓦斯も同じやうな譯だから、水
火の不自由も何にもない。キーツと水管をひねれば、水はザアザ
アと流れ出で、スーッと瓦斯口をねちて火を點すれば見るまにポ
ツポと燃えたつ、總て機械仕掛で、手術のやうな鹽梅。
飲食物はごうだごいふと、佛國人は葡萄酒をガブ／＼と呑み、獨逸
人は麥酒をグウ／＼と呑み、露西亞人はウォーツカ／＼と呑み、獨逸
ヤダラに呑み、英國人は、ウ井スキーをサツサと呑んで居る。其の
他いろ／＼な酒もあるが、食事の時に、上下押並べて用ふるのは、ま
づ概して右のやうなものである。食物の主たるものは肉と麵包
とで、その肉には羊牛牘豚鶏が最も多く、總ての禽獸魚肉及び野菜

にわたつてをる。肉店は大方は鐵柵然たる窓の中に、牛や羊の丸
むきをぶら下げて、其下の俎の上に、一斤二斤なごつ／＼切分けて、正
札附になつて居る。兎や鳥は八百屋の方に屬して居るが多く、魚は
氷詰にして賣つて居る。貝類もあれば海老もあり、又バター、罐詰な
ごの所謂食料品屋も町ごごにいくつもある。店は大かたガラス
張の中にあるが、肉屋と八百屋とはさうでないのが普通だ。その
麵包の原質は、ごごでも同じ事であるが、國々によつて製造法また
はその形については頗る相違が多い。獨逸や露西亞では、白麵包
と黒麵包と二通りある。その形に至つては、萬國勝手であるが、日
本に博く行はれてをる風は、米國流かとおもふ。最も奇なのは巾
の五六寸もあるのが、長さの三四尺もあるのである。これらを持
ちゆくものを遠くから見ると、棒でもかついでるかのやうにおも



はれ、下女なごが大急ぎに血相かへて提げゆく工合は、薙刀小脇に、

いざ敵陣へこい
ふありさまであ
る。すこし朝早
く通りを見わた
すこ、大きな馬車
に、この麵包をこ
たく、こ積んで
曳いてゆくが、職
人なごのきたな
い手で、攫んだり
握つたりするの



又おしならして、牛乳珈琲ヲヨコレト紅茶等を用ふる。菓子こ

は、餘り心持のよく
は無。各店に配
られて後は、そのさま一
變して、綺麗なガラス張
の障子の中に、長さは長く、短
きは短く、圓きは圓く、行儀よ
く並べられて居る。日本の
米屋の前を通りても、うまか
らうとは思はぬが、これはそれと違
つて、いかにも甘さうに見えて、小僧
なごは涎だらく、覗いて居る。



英米流のやうである。佛國などでは、たゞカラシと鹽と位がおい

菓物とは必ず食事ごとに欠くべからざるものとして居る。麵包にバターを添へて食ふことは、英米では普通のやうに見えるが、大陸諸國では必しも添へぬ。

ここに佛國の如きは、一向に用ひぬといつてもよろしい。食卓の上には、酢だの、醤油だの、カラシだの、胡椒だの、いふ色々なものを、こたく並べておいて、銘々のすきぐくに用ふるやうにすることも、

あるのが普通である。食事の度数は、一日に二度の國も、三度の國も、四度にするものもある。そうしてその中一度は、ヂンチーといつて、重なる事にする。例へば佛國は夕飯を重んじ、獨國は晝飯を重んずるさいふやうな譯で、それぐ慣習が違ふ。そのヂンチーの時には、その家相應に馳走があるけれども、ヂンチーといつて之に次ぐ食事には、例へば佛國の晝飯、獨國の夕飯、全く腹をふくらかす丈に止めておく。随分ヂンチーの殘物位で、すまして居る家もある。一體に歐羅巴人は、節儉だから、思つたよりつまらぬ物を食つて居るので、いつも我々が旅館の食堂や、又東京の精養軒、富士見軒などでやつてをると、同じやうに思つて





一尺ばかりの網袋をさげてゆくの成るべく無用な人は使はぬ。

居るご大間違である。又大概の家には料理の爲に別にコックを雇うて居るごおもふ人もあらうが、そうでない。妻君が主となり、娘や下女などがやつてるのが多い。牛肉買ひにでも、野菜買ひにでも、妻君みづからが、

市場なごにいつて見るご立派な妻君が、大きな尻打ふつて、あちらこちら安くてよい品を求めて居り、高帽子の威丈高の紳士が、山のように積んである兎や羊の前に立つて、彼是ご批評して居る。日本では役所がへりの官員が、牛肉の竹皮包などさげてをるのは、をかしいやうだが、西洋では平氣である。平氣處でない、寧ろ氣の利いた仕方である。

夫婦に一人の小供位の處ならば日本では必ず下女ご猫ご位は附屬してるのが當りまへで、又そうでなければ、行はれねのであるが、西洋では家屋の構造から、食物などの工合が簡便に成つてをるか、その位の家では、妻君が中働もやり、臺所もするごいふので、水入らずに暮してをる。衣服は、人々の好によつてさまざまであるごは、西も東も同じ事

であるが、普通に見わたすと、格好や地質の上から矢張西洋流の方が、簡単で、働き安くて、丈夫で、面倒でない。

男でも女でも、筒つばうなるは云ふまでもないが、若い中は、裾を短くして、殆ど膝から下は出して居る。氣候はまづ日本より寒い國が多いが、雪でも降る時には、たまらぬだらうと思ふに、平氣なものだ。例の編み上げ履をからみつけて、兎のやうにはねて歩く工合は、中々活潑である。十六七になつて女は段々女らしく、男もそろ／＼髻などが見えてくると、着物の寸も延び、足の歩きつきなごも大人びる。そうなるに女は例の長裾で、どこでも構はずにぞろぞろと曳いてゆく。道路が奇麗とはいへ、雨でも降れば、随分困る。

又馬の糞は、交通の烈しい丈に、拂ひきれぬ事が多い。そんな處は、日本ならば前褌さるこもいふべきを、彼等はお尻の上をひつつま

んで所謂後褌で高歩きをするのである。その早いこと、中々日本人などでは、おつつかぬ。

男子の服は普通がフロックコート又はモーニングコートで、散歩か何かの時には、セビロを用ふ。帽子は高帽子が紳士の常用で、所謂釜形も、中びくも用ふ。烏打帽子は散歩用で、人を訪問する時や何かには決して用ひぬ。たゞセビロに高帽子の人のあまたあるのは、ちよつと奇躰に感ぜられる。

是等も中等社會を比較して見たら、日本の着物の方が餘程贅澤かとおもふ。又日本では相當の家の婦人は、下着から上衣まで絹物を用ふるが、西洋では、下着は大抵木綿で、容易に絹などは用ひぬ。たゞ品物はそんなに良くななくても、彼等は決して垢のついたむさくるしいものは身につけぬ。たゞへば男の襟こか手首こかいふ

ものが日本人の洋服には随分垢づいて中には殆ど灰色になつて龜の甲のやうにひびのあるのも見ゆるが向ふではそんな事は無い。いかに古びてをつても能く掃除



し能く洗濯して用ひて居るから奇麗である。履や帽子なども流行をはづれてをる處ではな



い随分いかゞしいのも見ゆるが必ず塵埃をはき清めておくから一寸穢くない。

又婦人は殆ど衣服を命のやうに思うてをるが、それとても身分不相应な贅澤を避けてをる。親のものを子が譲り受るといふ風もある。その自宅用など、來ては變な見ばのわるい、上下打つゝきの寝まきやうのものをぞろ／＼こぞろつかせて居るが、さすがに外出する時は帽子をかぶり衣紋をつくろい、コルセットで下腹をしめ、尻をふくらし肩をいからしてゆくから、ざつと見ると大方の人が頗る格好がよい。そんな場合にはいかに下賤のやつでも汗臭い垢のつめたいものは用ひぬ。必ずそれ相當に洗張やなんかしたものだから、内部はいかゞしく穢いが外部は割合に奇麗に見える。殊に髪は例の垂髪(小供束髪)大人であるから、毎日自分で結ひ

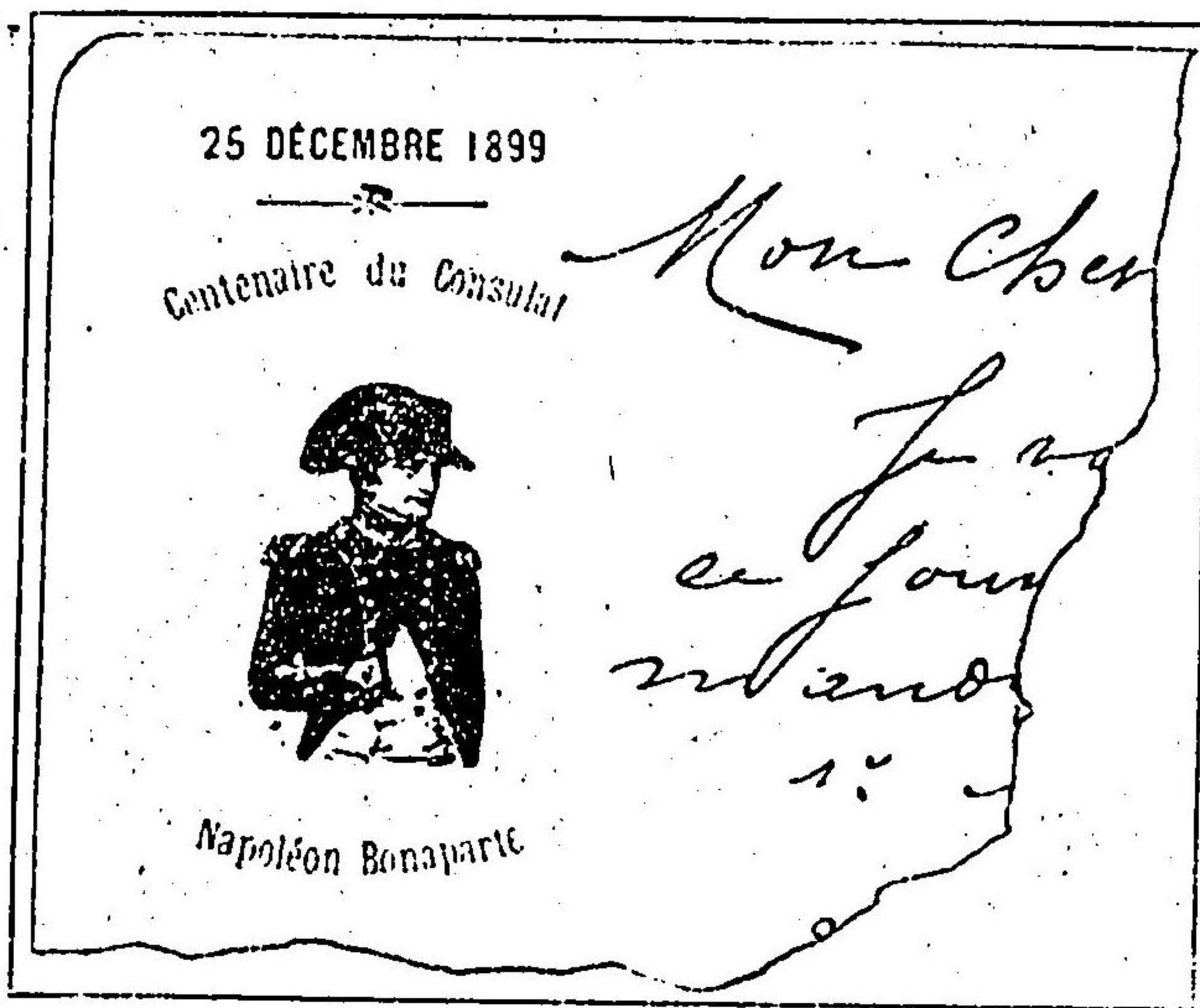
かへる。その上に好きな帽子をかぶると云ふ風だから、島田や丸
鬚の日數経て油くさくてたまらぬやうな事はない。その代りに
脇香は彼等の着物にまで染み透りて臭を放てば、乗合の汽車馬車
の中などで、鼻の苦くなるほごよわるこごもある。
要するに衣食住の完全な方からいへば、日本よりも西洋の方がず
つこまきつて居る。家は前言つた通り、鬼の窟のやうで、中々堅固
だから、盗賊も容易に覗かれない。雨や風の力で毀たれるこいふこ
ごも少ない。火事も燃え廣がらぬ。飲食物も滋養を主にして居
るから、自然菜色の民も少ない。衣服とても成るべく躰にかなつ
た、働の自由につく、道を歩くにも、汽車や汽船に乗るにも、便利な事
に出来て居る。
風致がよかつたり、ちよつこしやれたり、味ひがおつてあつたり、寝

ころぶに都合のよかつたりするその點には、日本の衣食住が長所
もあるが、段々人口は殖る、生存の競争は烈しくなる、萬國は互
に往き違ふと云ふ現世紀のありさまに向つてゆくには、實利實益
を主とする西洋風の衣食住にならねばなるまい。
右言つたのは先づ中等社會の上であるが、其の上の上と下の下と
は、西も東も別物で、一食に何千圓と費やす族と、麵包の切れはしば
かりを嚙つてる奴だから、國の全躰に通じては論にならぬ。併し
文明といふは人道を全うして高尚なる樂みを得て、富貴なる衣食
住を得て、愉快に平和に一生をおくるが、目的であらうから、苟も此
の世に生れ出た以上は、正道によつてこの方針に進まねばなるま
い。即ち天下萬人共に樂境に向はねばならぬが、それにはまづ自
分より一家に及び一家より一郷に及び、一郷より一國一天下とい

ふ風に走るより外仕方が無い。今の世は各この道行をやつて居るので、誰もよく目的は最も遠く高い處に求めたいものである。

巴里の凱旋門

佛蘭西の巴里には、名高い珍しいもの、おもしろいものが澤山あるが、凱旋門ほど目について、大なるものは少ない。これは世界の大豪傑であつた奈破翁一世が、諸方の戦に勝つた記念物である。奈破翁一世といふは誰も知つてゐるごとく、地中海中のコルシカの島のアシアクシオーといふ處に、一千七百六十九年に生れた人だが、丁度大革命に際して、段々武功を建て、終には自分が佛蘭西の帝王となつた人です。この人は日本の太閤様のやうに、非常な抱負があつて、全世界を一統しやうとまで考へて居つたそうだが、そ



の通りにはならなかつたけれども、歐洲大陸は草も木も靡け伏せたのである。

その戦の數多き中に、一千八百五年、澳太利のオーステルリッツといふ處の戦の大捷の紀念として、この凱旋門の建築は始めたのである。けれども大變な宏大な建物であるから、急には出來ず、その中に奈破翁一世は死んで、一千八百三十六年、ルイ

出来上つた。三十年間の建築だから立派も立派な筈だが、一千万法といふ大金が費されたさうだ。

この大門の形は希臘や羅馬に昔からある建築式で、日本や支那でいふ門とは大に趣が異つて居る。四角に突立つて、頭は魚板のやうに平くて、その下は穹窿になつて居る。入口は四方について居るが、遠くから臨むと隊道を見るやうである。又大なる竈を据ゑたやうにも見える。構造の堅固で、見への美麗な事は、いふまでもないが、その高さは實に五十メートルもある。又その幅は四十五メートルを算へ、厚さは二十二メートルに達してをる。凱旋門は歐羅巴中外の國々にもあるが、この門のごとく大きく盛んなのは二つこない。

この石造の大門は、たゞニューゴ立つてをるばかりか、いふに、さうでない。その壁や柱には、いろく彫刻が施してあるから、それを見るばかりでも、一日や二日はかゝる。その畫は悉く歴史的

戦争圖で、すばらしいものである。その一つ二つをいはずなら、大路に向つて右のかたの柱壁には、一千七百九十二年、佛國大革命の時、四軍隊出陣の状で、その上には、その時の勇將であつたマルソーといふ大將の葬式の處が彫られてをる。又左のかたには、澳大利どの戦争後、凱旋して引上げた處で、これは千八百年の事である。その上には、千七百九十九年、アプキールの戦に、奈破翁がたの勇將ミラーといふ人が、ミスタハバアシヤを生捕るいさましい圖である。その他アレキサンドリアの攻略の處だの、又オーステルリツの戦だの、ジャンマップの戦だの、巴里進入軍に抵抗する處だの、媾和の處だのといふさまじいものがある。かゝる圖畫ばかりでない、裏に入つて見上ると、帝政時代から共和政時代にかゝつたる戦捷地の名、また重なる將帥及び戦死せし人

々の名などを彫り付けてある。だからこの門一つを研究しても、重なる佛國戦史は分る譯になつてをる。加之、その畫はいづれも時の有名な畫師に畫かせ、有名な彫刻師に彫らせたものだから、丁度上手のかいたパノラマを見るやうに、眞に逼つて思はず肉が躍り出すやうな心ちがする。我々外國人ですらかうだから、佛國人は之を見たらいかばかり感をおこすか知らぬ。或は齒くひしばつて當時をおもひやる人もあらうし、腕さすりして時に逢はざりしを悔むものもあらうし、或は涙をながして英雄の死を惜しみ、或は手を拍つて奈破翁の大企圖を賛成するものもあるだらう。そうして見ると、たゞの紀念となる處でない、この大門は、言はず語らずの中に、萬世の後まで佛國人を教育する磐石である。國民の元氣を鼓舞する教科門である。

かゝる名譽の大門、教科の大門は、いかなる處に建つてをるかといふに、巴里の眞中にもいふべき、シャンゼリゼーといふ第一等道路を経て、ポアーといふ第一等の大公園にゆく道の中央にある。此は土地が自然と高くなつて居る上に、高さが五十メートルもある大門が建つてあるから、どこからでも大かた見える。又この處を星の座といつて、大門の處から十二筋に道がついてをる。それはいづれもく、大道で、並木のふさく、と生ひ繁つてをる東京の上野の廣小路ごでもいふやうな町ばかりだ。この大門は四方に鐵繩が張つてあつて、馬車は通りぬけることは成らぬ。人は素より勝手次第である。又この大門には裏の方から上ることも出来る。薄暗い石階をぐるり、と昇つてゆけば、終に門の頂にゆきつく。そこは例の長方形になつて居るから、あ

ちらこちら勝手に遊び廻はるころが自由だ。店も二三軒あるが、これは奈破翁の寫真だの、またはこゝから見わたした寫真だのといふのである。昇つた人は紀念に一つや二つは買つて來ると見えて、賣子の顔つきもにこやかに、店の工合も随分繁盛のやうにおもはれる。

高い處から下を見ればおもしろい事の多いものだが、この大門に上つて見わたすこゝさまぐの感じがおこつて來る。道路の並木が幾筋もく、何十丁も打つゝいて青々としてをるのに、兩側の白壁の家々は、一定の高さに幾軒もなく聯なつてをる。オブリスクといふ埃及から來た二十間もあらうこ云ふ尖塔は、シヤンゼリゼ川の道を経てコンコルドの廣場に突つ立つてをり、それよりおくにルーブル宮は聳え、又遙に舊教の本山であるノートルダムこ

いふゴナツク式の大寺は見え、さては雲を凌ぐエツフェルの塔、大ポアの森實に愉快ごも何ごもいへない。世界の大都を一目で見おろす心持といふものは、ちよつこや、そつこの面白さではない。馬車は百も千もつゝいて、東西南北に馳せ違つてをる。鐵道馬車や、電氣車は、人間を山のやうに積んで、あちこち運んでをる。汽車は走る、地下鐵道にはもぐりこむ。自轉車は八方にはねまはる、自動車は、風を切つて飛ぶ。その間々を縫ひながら右より左、左より右、歩を運ぶ老若男女、能く惟我も出來ぬこゝ、思ふ。又一方には噴水が上つてをる、小供が遊んでをる、巡查がニヨキついてをる、騎兵が威張てをる、乞食が寝てをる、さては男女手を執つて、ふざけながらゆくもあれば、高帽子を風にさらはれて、ステッキで罪もな

い道を叩きながら、追かけつゝゆくのも見える。實に千差萬別で、

人間世界のくだくしいところが、一瞬間の間に胸にひく。

いやとおもへばすぐに山にでも入り

たくなり、おもしろいとおもへば、是

等を我が手の中に玩んで見たい

と云ふ氣にもなる。この大門

の上の見物

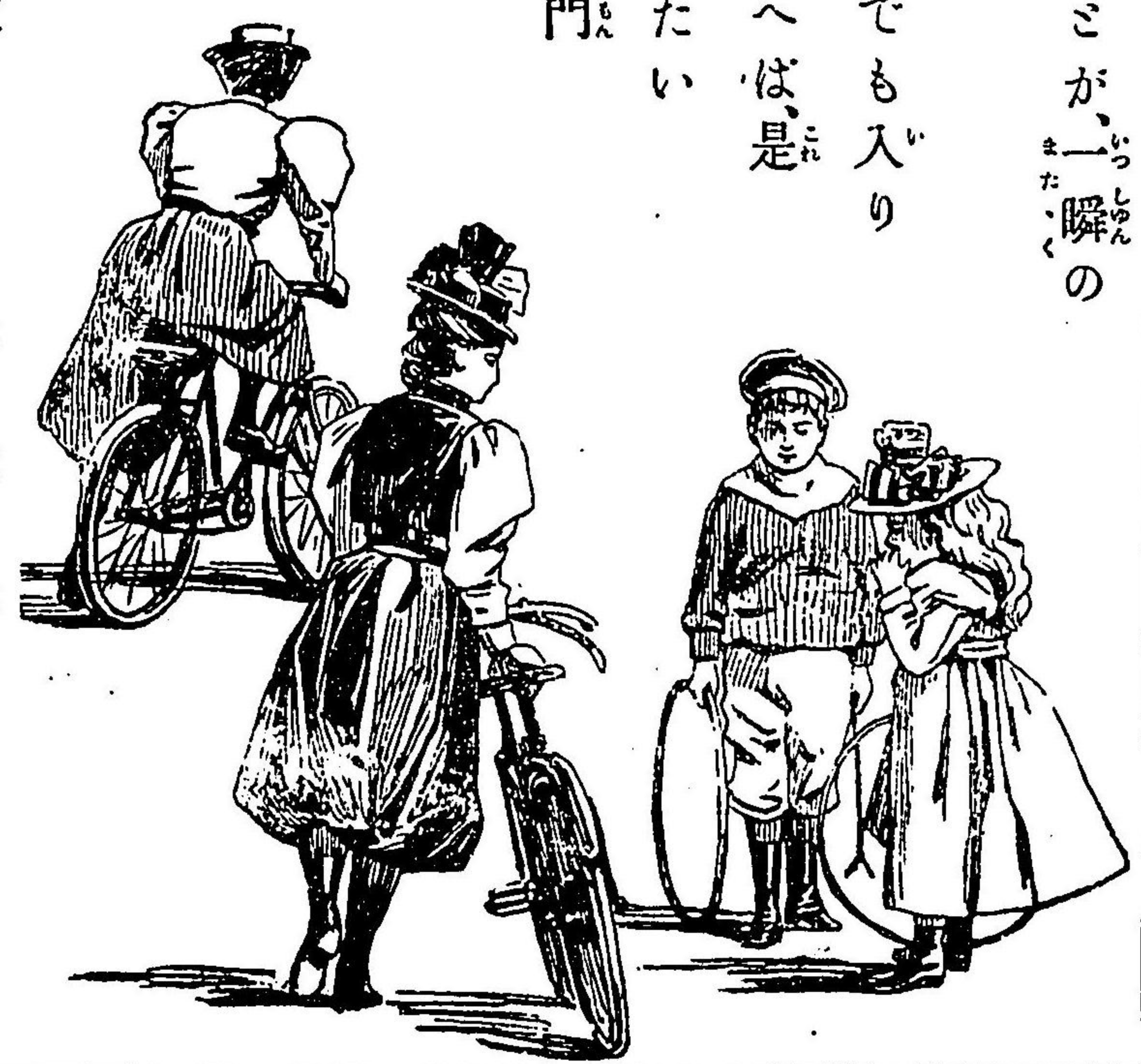
は實に厭世

と樂世との

わかれめで

ある。奈破

翁一世は、この蟻のごとき人間ごもを小指の爪の垢ごもおもはな



いで、あんな大仕事をやつたのである。

彼の墓は、この大門より南にあたりて、遙に相對して居る。その王

冠形の塔の金光は、巴里全市を照らして居る。彼の住居としてを

つたルーブル宮は、コンユルドの大廣ばのあなたに見やられる。

彼の建てた小凱旋門も、そのわたりに屹立して居る。

佛蘭西あるといふここを世界に紹介した、この大英雄の没してか

ら、僅に百年ばかり、それが紀念物はかくのごとく残つてゐるのに、

今の佛蘭西はごうであるか、セダンの一戦に奈破翁三世が敗れ

てからは、世は殆どボナパルト家を忘れたやうだ。それ處でない、

内國はさまざまの政變を経て、遂に帝政を厭ひ共和國となつたの

である。帝政と共和政との利害は、彼の國人の好み次第だから、構

て見たら、どんな感じがするだらう。それも國民の元氣が溢れて、
 世界を併呑するやうな工合ならば瞑目してもをらうが、獨逸に負



墓の帝ノオレボ+

れほごに揚つてをるごも思はれぬ。内部はそろく腐敗しをる
 ごも云ひ、殖民地の政は一向に振はぬ。露西亞にはおじきする

けて以來
 は土地も
 さかれ、金
 も取られ、
 今日の繁
 華はある
 けれど、
 武威はそ

是を彼の奈破翁帝政時代に比べて見たら、その優劣は論ずるにも
 及ばぬことであらう。

金光燦爛ごも云ふべき巴里の市中でありながら、こんな事を考へ
 て見るご歴史の跡を吊問する處ばかり多いやうで、巴里萬歳ご云
 ふ聲も遠慮したくなる。王黨ごいふものが、今にも政治社會に、や
 かましく議論してをるもの無理も無いご思はれ、奈破翁ごいへば、
 兒童走卒に至るまで、神のやうに崇敬して居るのも當りまへごお
 もはれる。

是等から考へて見ても、我が日本のごごとく、めでたく結構な國はな
 い。開國以來、外國にはづかしめられたご云ふごもなく、帝統は
 一系綿々ごあそばして、萬民を撫育したまへば、下の上を恨むるも
 のもない。國こそ小さいけれども、大和魂のかたまりだから、隅か

ら、隅まで、元氣が充ち満ちて、恰かも龍の鱗の張つてるやうなものだ。

こんな譯だから、將來は巴里の凱旋門位のものはいくらでも建つだらうし、拿破翁位の大英雄は、何人でも生れるだらう。花の散るのを見て悲しんだり、月の曇るのを眺めて泣いたりばかりして居らずに、太平洋を埋め立て、日本國の出張所でも造るやうな大事業を考へるやうにしたいものである。眞理の光のかゞやく處はいかなる暗黒でも透徹する譯だから、ぐすく、引込思案にのみ日を暮さずに、大凱旋門建築の本源でも考究したいものである。

倫敦の繁華

佛國の巴里が天下の公園で、花やかで、きらびやかであると共に、英

國の倫敦は、世界の最も繁華で、最も賑やかな都である。譬へば巴里は花の咲いたやうで、倫敦は木の繁つてをるやうな工合である。花のあたりには蝶も舞ひ、蜂も飛び、人も酔ふ。木の繁つてをる處は何ごなく薄暗くて、奥底が知られぬやうな心持がする。氣候の點からいつても巴里はカラーツごして明るく、倫敦はドンヨリごして薄暗い。同じ春夏のいゝ氣候の時でも、大分趣が違ふ。況て秋の末から冬にかけては、倫敦は三寸先も見えぬやうに、毎日毎夜霧が立つて居る。雨はビシヨク降る。道はわるくなる。それは巴里の方が、ごのくらの住ひ安く愉快か知れぬ。その倫敦が天下第一の繁華な處ごは變なやうだが、ぞうでない。地圖を見ても著しいが、英國は實に世界の中心に位し、世界中最も多くの良い港をもつて居り、最も鐵、石炭等の産出に富んで居り、最も

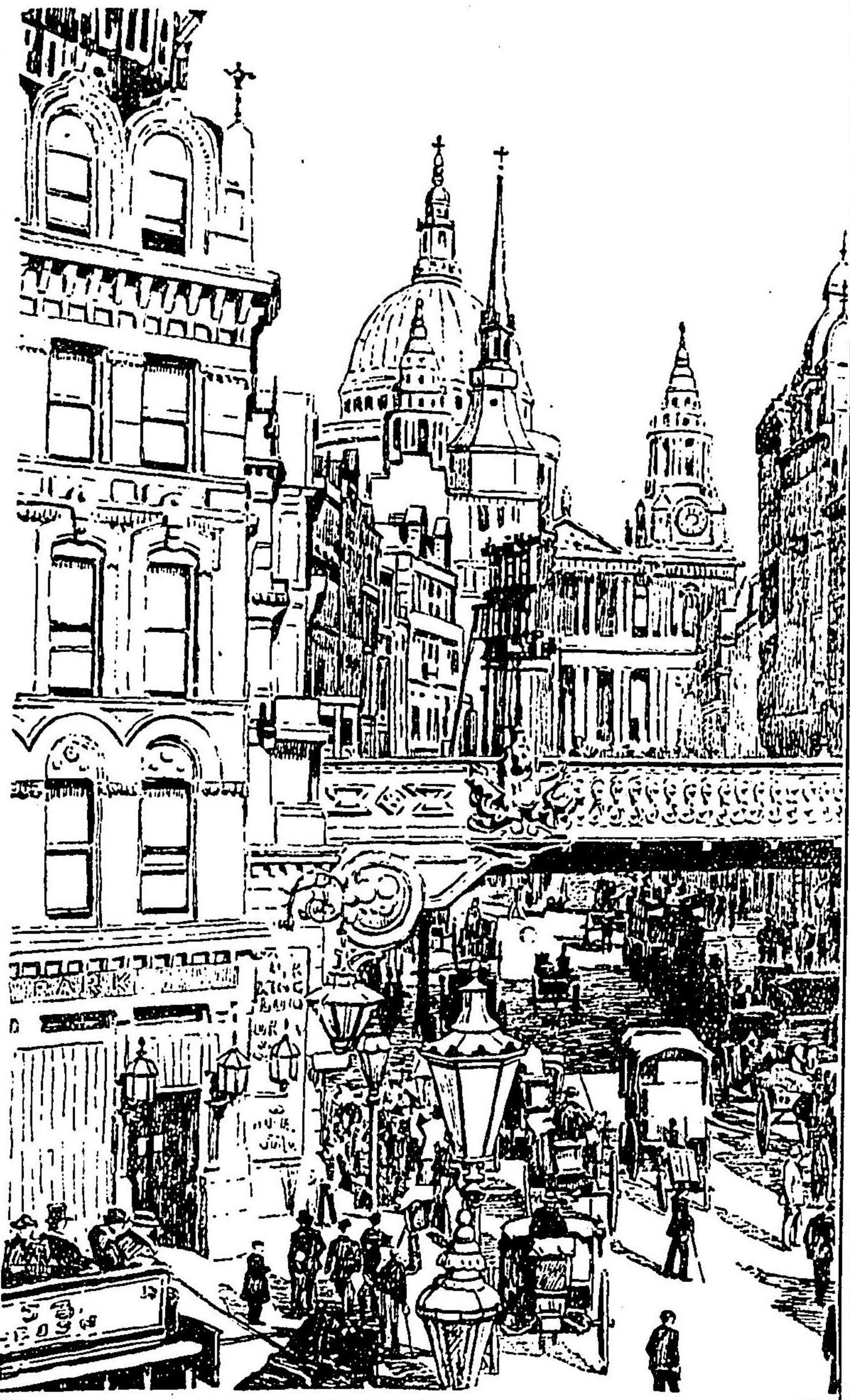
耐忍ある人種にて住まはれて居る。だから自然商工業の中心點となり、世界の大都市場となり、従つて航海運輸の術にも長じて、今では天下中の産物を北より南に、東より西にするには、大方彼れ一國で引受けて居るやうな姿である。倫敦は即ちその英國の首府であるから、天下中の繁華になつたのも無理はない。

この府は北緯五十一度三十分四十八秒に位して居るから、日本の北部よりは一層寒い譯になる。人口は六百萬ばかりある。テムス川といふ隅田川の大きいやうなのが、府の中央を流れて居る。總ての船舶は皆この河口に這入る。日本からゆく郵船會社の蒸汽船も、この川のドックに着く。その他世界各国の船がやつて來るから、その賑やかさはかりでも大したもの、一ヶ年出入の船舶の總計が、一千四百萬噸だと聞いてをる。

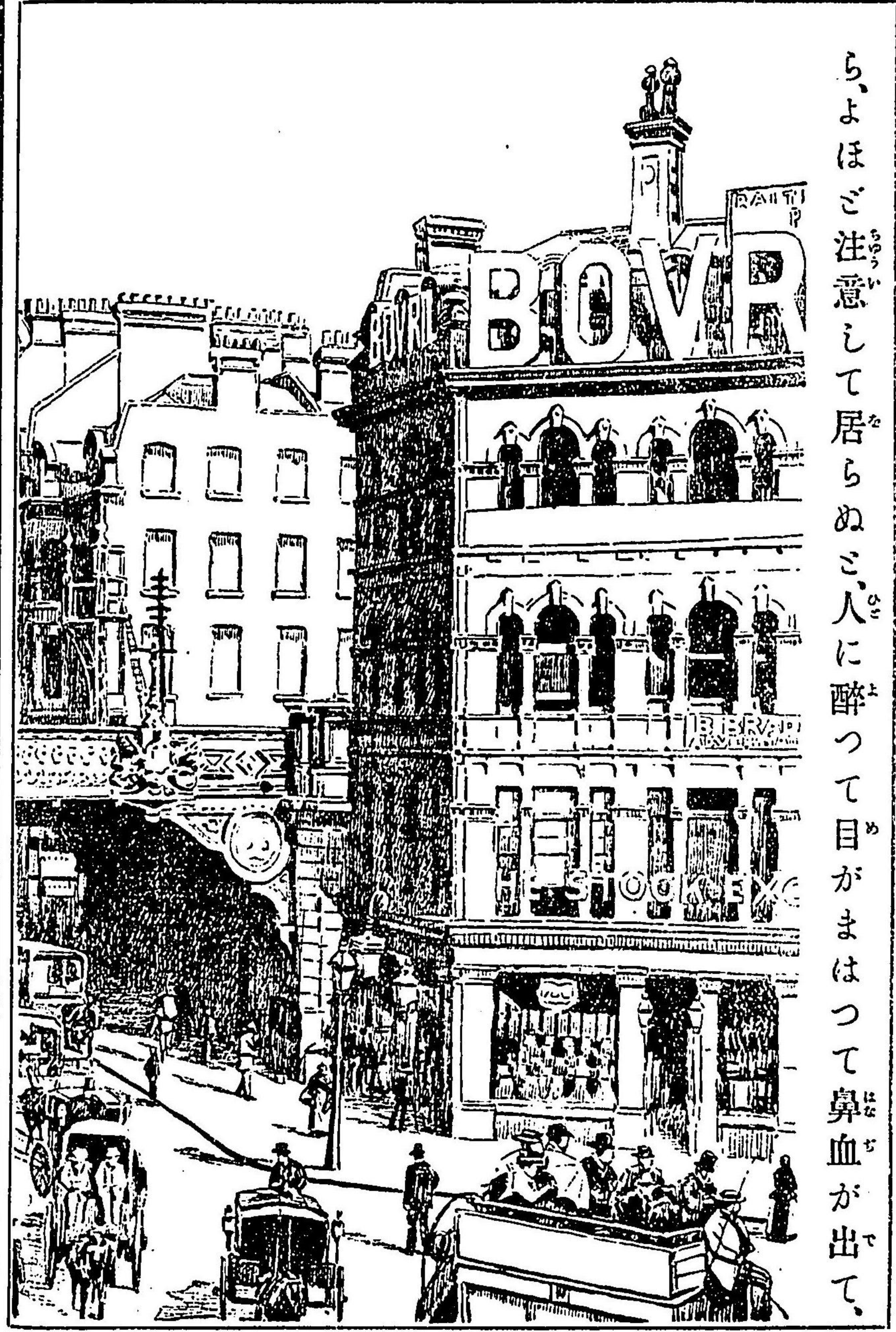
所謂テムス川は、西より東に流れて、市の中央を横ぎつてをる。その市は東西に各中心點があつて、東南、東北、西南、西北と區別し、更に十區に分れて居る。そのテムス川の左は最も繁華で、右はやや劣つてをる。一体に東の方は工業商業に關する建物が多くて、西の方は宮殿や官衙や俱樂部などがあつて、紳士の住居は多くは此の方にある。そうして最も商賣繁盛なのは北部の方だ。南の方は川に遠ざかる程、愈々淋しくて、工場や職工などが多く、人間の風も穢なく、町もさびれて、よほど田舎じみて居る。

就中その最も盛んであるのは、舊倫敦市の一廓で、今でもこゝを特別にシテ、ゴ唱へてをる。それはセントポールといふ大寺の在る處から、英蘭銀行などの在る邊である。倫敦橋からその邊をかけて、オックスフォードの大通りあたり、散歩でもしやうものな

跡へも先へも行かれぬやうになる。馬車や自転車は左右十文字



らよほど注意して居らぬ人に酔つて目がまはつて鼻血が出て



に馳せ違つて居り、乗合馬車は百も千も重なりかゝつて来る。やれ地下鐵道の停車場からは千も萬も人が押し上つて来る、やれ自動車は飛ぶ、犬は走る。その間を縫つて歩く男女老幼は、蜈蚣の行列のごとく、蜂の嫁入のやうである。紳士は高帽子、フロツクコートが多く、女は例の大尻小腰であるが、雨が降つても傘さすことも出来ぬ。たゞがあく／＼ざはく／＼として、蚤取眼、血眼で歩いて居る。突き當つても御免の言ひずて、勝手に走り、立て込んだ處では、自分の口と間違つて、半巾で他人の頬をふく位は寧ろ當然である。若し人道車道の別でもなかつたなら、一瞬間に何萬人怪我するか知られぬほどで、それは／＼歌舞伎座のはね時位の事ではない。左がはの道を歩いてる人が、右がはに移らうとするには、容易な事でない。馬車の流るゝやうに来るのを見つめて、ちよつとこの

すきを走るののであるが、それも六かしい時には、じつとたゞずんで居る。大凡、巡査が見はからつて、道の真中に立つて棍棒を振り上げる。するゝ今までその流るゝやうに重なり來れる馬車も、一度に止まる。その間を山潮のやうな勢ひで、待てる多人數が、向ふに横きる。この間は僅に一分か二分ばかりだが、馬車の止められてをるのが、一町位はつゞく。彼の小供を寝かしてゆく乳母車も、この間は安々と通り、海馬のやうに肥えふとつて居る。婆さんも、尻をふり／＼此の間にわたるのである。このシテは昔の倫敦市で、市長の官邸は今もこゝに在る。その入口には一つの紀念碑が建つて居る。これは古への關門の跡だ。それで、今でも英國皇帝がセントポールに御寺詣せらるゝ時は、市長がこゝまで出迎へて、鍵をわたし申すこの事で、昔關門を開いて

入れまつた儀式の一旦を存する譯である。また毎年十一月九日には、市の祭があつて、その時は市長の古裝行列があるそうだ。こんな譯で、倫敦の市長といふは、非常な名譽職で、その貴きこと内閣大臣と同じやうである。年俸は拾萬圓だそうだが、なかく、それ處では足りない。二十萬や三十萬圓は持出さねば務まらぬ。已に前の市長は一ヶ年に、三百四十回、夜會を開いたこの事、これで大抵金の入り工合が分る。時これ金といふありさまは、この倫敦市を一見すれば、すぐに感ぜられる。人間といふものゝ生活の困難の工合も、こゝを見れば、直ちに悟られる。實にこの市人は寸分もぐづくして居らぬ。蛋がくつてもかいてをる隙もない。まるで賭事して競争でもやつてをるかのやうである。こんな工合だから交通機關は十分に備

はつてをる。地下鐵道といつて、町の下を掘つて汽車をかけてある。これはテムス川の底をくゞつて南北にも通じてあれば、東西には無論の事である。これには舊式のまゝ、石炭でやつて居るの、新式の電氣の二通りある。舊式の方は烟が烈しいから一度乗ると、耳の孔も鼻の孔も煤だらけて、停車場におるれば、半巾の二枚位は損する覺悟でなくてはならぬ。土地の人は之を穴といつてをる。改良したらよからうと思ふけれども、英國流の保守論で、なかく、易へない。新式の方は電氣だから、烟もなく、明るくて、眞に心持がいゝ。この地下鐵道に乗る時には、昇降機で何間もなく地の底に降る。するところ、そこに汽車が來て居る。すぐに乗る。すぐに走る。停車場は處々にあるから、自分のゆきたい處にて車を降りて、例の昇降機に入ると、瞬く間にブーツと高い處に持ち上

げられる。戸を開けるごチャーンご人道に出て居る。この昇降機には百人位は一所に乗込むが、その速かさ何の苦もない。またこの汽車は晝でも夜でも常に走つて居るから、便利な事はこの上も無い。地下といつても大きな隧道で、電気燈は輝いて居り、停車場には、矢張地上と同じやうに雑誌小間物店や茶店位はあるから、氣味の悪いことも恐しいこともない。乗合馬車は、その數が一萬一千餘といへば、恐くは歐羅巴中、倫敦が第一盛んであるだらう。これは二頭曳きが多くて、その車は割合に小さい。但し二階つきで、上も下も十二人詰である。倫敦市中、東西南北隅から隅まで、この馬車の通はぬ處は無いから、ちよつと、そこまで行かうといふにも、皆この車を利用する事になる。素よりいそがしい處だから、大抵飛乗り飛降りであつて、一々止めてゆ

つくり／＼と乗降するやうな優長な事は出来ぬ。人も多いが車も多いから、ごんな處にても二三分間待て居れば、我が用のある方にこの車の來らぬことはない。これも晝夜の別なくかけて居る。又鐵道馬車、電氣鐵道車なども、あまたある。矢張飛乗り飛降りにて、人は常に山の如くに積まれてをる。その他普通の馬車は、日本的人力車のやうに、處々に客待を爲て居つて、ちよつと手を舉ぐれば飛んで來る。高架鐵道といふは、家の三四階と同等位の處を走つて居るが、これも停車場が處々にあつて、頗る便利に出來て居る。又テムス川には、乗合舟があつて、常に上下の客を乗せ運んで居る。是等交通の諸機關は、賃錢が非常に安くしてあるから、下女でも丁稚でも遠慮なく乗ることが出来る。日本では髯のはえたかたなど

が少々上等である。乗合馬車などには、あまり乗らぬ人が多いやうだが、向ふでは貴賤打こみで、大臣でも、金持の奥様でも、酒屋の小僧でも、同席に乗込で同權で話して居る。二人以上のものは必しもさうでないが、一人のものは、乗るごすぐに新聞を讀む。又は小説をよむ。何の事はない、汽車や乗合馬車の中は、丁度圖書館にでも入つたやうだ。是等から考へても、平生彼等はいかにいそがしいか、分るであらう。

又商賣繁盛の大市だけに、運漕車の多い事は、殆ど乗合馬車を壓倒する位だ。これも荷車に馬をつけて、人はその口をこつてゆくといふ優長な風ではなくて、矢張人の乗る馬車風になつて、馬の二匹もつけて、荷主は御者臺に乗つて大黒様のやうな頬をして、鞭うちながら、走らせて居る。右からも左からもこんなものがやつて來

るから、是等をよけるばかりでも、注意に注意を要せねば、曳き殺されぬとも言へない。

官員商賣人學校生徒職工などが、朝飯後おの／＼其向ふ處にゆくありさま、こいふは、まるで兵隊の行列のやうで、馬車も舟も道路も、人をもつて造つたやうである。晝になるご、また各その近處の料理店に出かけるもの、何丁もく／＼續いてをる。夕方はまた蟻の砂糖につくがごとく、諸方から集つた人間ごも、各々が家にご急ぐから、再び市中は行列がはじまる。

日が全く暮れるご、光景一變して、電燈瓦斯は太陽の代りを務める。するご、そこ／＼に芝居がはじまる。寄席があく。酒舗が賑ふ。意氣な紳士の數がふえる。香水臭い女がたゞずむ。ピカトリ

川こいふ町から、ニユーオックス、フオーールドこいふ邊は、さながら

不夜城

のさま

である。

すこ

し高い

處に上

つて見るに、火の中に市中があるやうで、その美しい盛んな事は、球燈の二三千萬をつるした處の景氣ぢやない。テムス川は、まるで火の流るゝやうで、到底兩國の川開きなごが逆立しても、おつつく處でない。



こんな人が多いから、飲食物の需用も非常に大市場といふが、十五ばかりある。これはいづれも堂々たる建物で、肉類野菜類など、それぞれ分れて居る。この爲には、わざと汽車も數條引いてある。買出人は皆大馬車でゆく。余はメートルポリタン、ミートマーケットといふ肉類を賣捌く市場を見たが、それは盛であつた。家の長さ六百二十五尺、廣さ二百四十尺、高さ三十尺ある。この市場には停車場が六ヶ處あつて、汽車が常に出入して居る。その外にも大抵之に準じて繁盛なここが知られる。家禽の市場は最も建築に念を入れて、その費用ばかりが四十萬磅といふことである。こんな處に入るに、丸で博物館にでもあるやうだ。かやうに始終あくせくして居る代りに、時々公園に遊びにゆく。その公園は長さが十二町餘といふハイドパークをはじめとして、

大きなものが市中に二十ばかりある。それらの公園は老木が枝を垂れて居り、萬花が咲みだれて居り、芝が青々としたるに、鹿や羊が遊んで居り、小兒が飛んで居り、噴水が上り、鳥が囀つり、魚がはねる。こいふ風で、優雅で風流で、目と鼻と衝き合ふやうな町から、こゝに入るこゝまるで別天地、それはくゝ氣も心も伸びくゝする。だから、すこし隙があるこ諸方から集まり来て、馬で運動する人があり、車で飛びまはる人があり、緩歩して風月を樂しむ人があり、寢ころんで新聞讀む人があるこいふ鹽梅で、いかにも樂しさうにやつてをる。公園は實に彼等の命で、これがなくては、こても歐羅巴の生活は出来ぬ。

又喫茶店、飲食店は、何十萬軒あるか知らぬが、こにいつて見ても、八九分通り客の居らぬこはなない。是等はいづれも寸時の隙を窺つて、息つきに来るもの、又はちよつと朋友なご、相談がてら来るものが多いから、用がすめばさつさこ出てゆけば、又入り交はりて来る。その頻繁さを見れば、かりても、人の多さ加減が分る。勸工場、商品陳列場のやうな所は、處々にあるが、これもいつ見ても、いづれに入つても、人ばかりで、殆ど押し押されて、やつこの事で、物を買ふやうな始末である。殊に女物の處なごにゆくこ、品物もきらびやかである上に、見る女も能く批評し、能く考慮するから、容易に通るこは出来ぬ。英國の婦人は、割合に背が高いから、日本人なごは、大方それが肩や胸のあたりに顔打つけつゝ、ゆかせられる。彼等は外國人だらうが、男だらうが、平氣に特有の脇香をかゝするから、寶丹でも持參せぬこ、目が眩むほごにならぬこもいへない。彼の十二月廿五日のクリストマスの前になるこ、かゝる處は、

一層の盛繁で、その雜沓はお祭りか何かのやうだ。たゞ例の公共道徳が守られてをるばかりに、喧嘩も少なく、品物の紛失等もないが、若し一朝是れが敗れたら、ごんな大騒ぎになるかも知れぬ。

倫敦タイムス新聞を初として、何にくれの新聞雑誌は、町の瓦斯燈の數よりも多いやうであるが、各々筆の光をかゝやかにして、世界の事の評論をやり合つてをる。是等を賣捌く爲の丁稚小僧の徒、至る處の辻々に陣取り、客を見こめて、己れ一番鎗の賣付けの功名せんとて、アングロ音のサキソソ聲ふりあげ居る工合、また年少の賤の女等が、時の花を數多携へて、群がりゆく人々に、その一ふさ二ふさを賣らんとして、愛嬌ぶるありさま、又乞食が音楽器械を弾き歩いて、客のポケットをねらふ様子なども、また賑ひを助けるものとなる。

諸商店の廣告や、芝居や寄の引札配りなどは、四辻くゝに立つて、木の葉でも棄てるやうに、行く人ごこにやつて居るも、珍らしいが大きな額などに仕立て、立派に装束して、所々に立てたり、家の上層に活動寫眞で、その賣捌く品物の工合を見せたり、或は瓦斯の火にて、その品名家名をあらはしたりする手際、こいふものは一通りでない。實にごこまで繁華で、ごこまで盛大で、ごこまで金をかけてをるか、奥の知られぬほど、おそろしいほどの遣りかたである。

ごんなに雨が降らうが、ごんなに霧が深からうが、ごんなに寒からうが、ごんなに暑からうが、この繁華は寸時もやまない。實に能く働き、能く遊ぶ人民は、倫敦市民である。世界商工業大繁盛の地は、實に倫敦が第一等である。我が日本國が東洋に於る位置は、丁度英國が歐洲大陸に於る位置に似て居る。されば國民の奮發次第

には、その繁華が英國を凌ぐことの出来ないとも限るまい。能く彼が爲てゆく工合をも考へて、善きは取り、わるきは捨て、世界一の富強の國とせなければならぬ。

伯林市

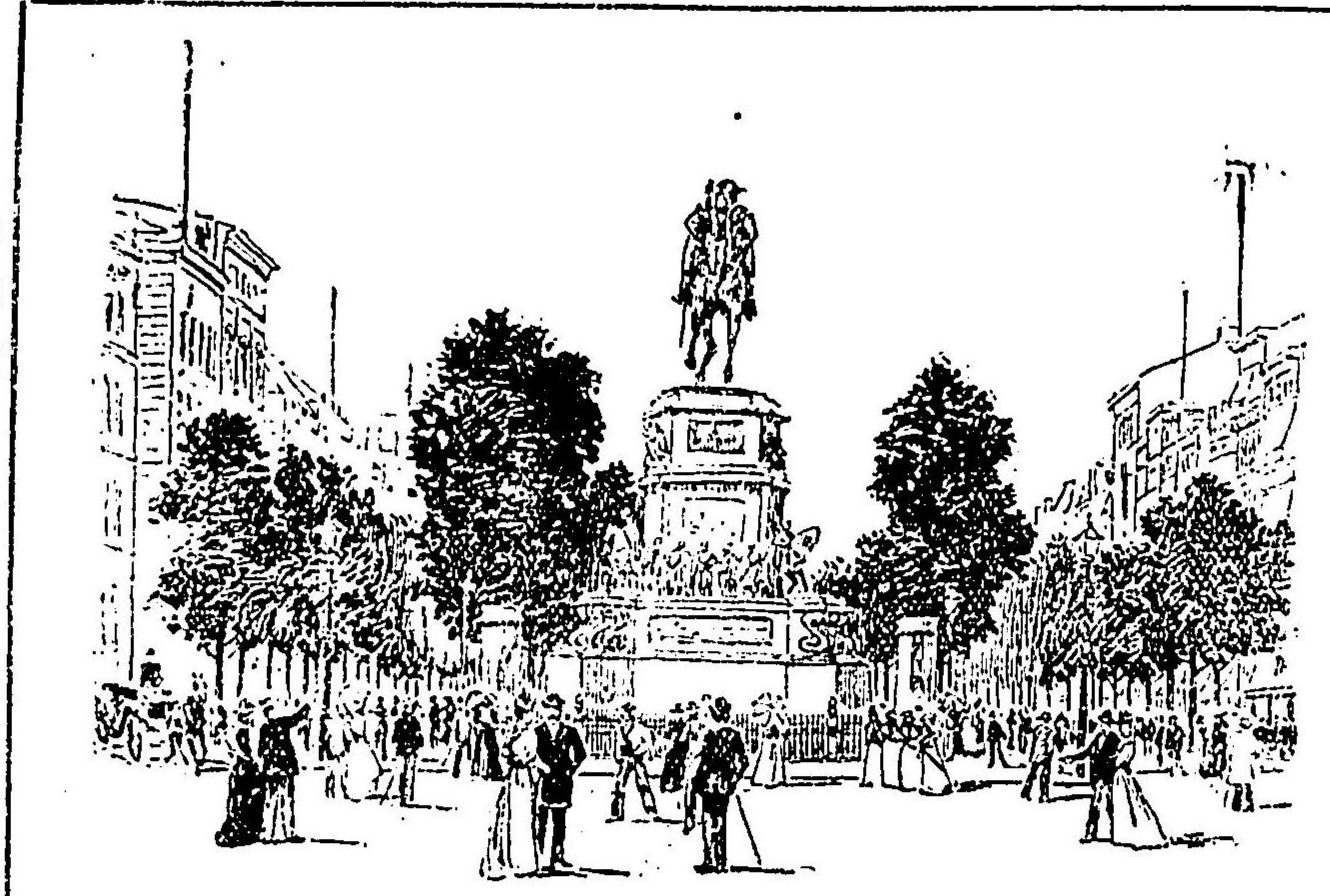
獨逸といふ名のいかめしく世界に響いたのは、近二三十年來の事であるが、今ではいよく文明の猛威を逞うして、優に天下の強國となつた。この國は歐羅巴の中央に在つてアルプス山系と、バルチック海、北海との間に横はつて居つて、面積は我が日本國よりすこしく大きい。

英吉利や佛蘭西と違つて、この國は數多の聯邦より成立つて、普魯西國王が、それ等を代表して、獨逸皇帝と稱し、政治を總裁して居ら

れる。伯林市は即ちその普魯西の首府で、また獨逸帝國の都府である。人口凡そ百六十七萬七千餘、その繁華は倫敦巴里に次ぎて、商業工業の大中心で、學術の大淵藪である。奈破翁一世が、歐洲を踏みにじつた時には、こゝも佛蘭西人に占領せられたが、彼の復讐の軍をおこし、散々に佛國人をいちめた後は、何事も日を逐うて進歩し、巴里に負けまいといふ決心で、市の事を計畫したから、今では總ての點が、彼に劣らず、彼に習はず、一種の獨逸流で見事に仕上げたのである。

道路は歐洲最新式の木道であるが、巴里のやうに、中通り以上は必ず兩側に並木があるといふ譯ではない。大方は木も何も植ゑず、たゞ清潔に拭き上げてある。最も彼のウンテルデンリンデンなどは、名のごとく菩提樹の並木があつて、伽陵頻伽の聲も聞ゆるこ

おもふほど奇麗で、みづ／＼しい。その他並木の町も多いが、巴里
 ごは、すこしづゝ趣をかへてある。凱旋門も、凱旋塔も、英雄豪傑の
 記念像も、英佛におこらず、ごこにもこゝにも立つてをるが、いつれ
 も一風をなしてをる。又帝宮をはじめ議事堂、諸官省、寺院、銀行、學校、
 さては某々の會議所、俱樂部、劇場、博物館等のごときも、皆獨逸流の
 建築で、巴里よりも莊嚴に明劃に出来て居る。最も新らしいから
 でもあらうが、家屋道路も一體に甚だ清潔ではつきりしてをる。
 その代りに巴里のごこく古雅で優美で、ぼんやりとした處は乏し
 い。言はば伯林は秋の空のごこく、巴里は春の空のやうだ。
 併しナパールガルデンの公園のごときは、老木かゝまり榮え、水清
 く鳥囀つて、古國の趣がある。こゝには帝王將相文武の英傑など
 の彫像があつて立去りがたい思ひがする。又是よりつゝいた所
 謂凱旋塔の前通りには、現皇帝が伯林市に寄附せられたといふ普

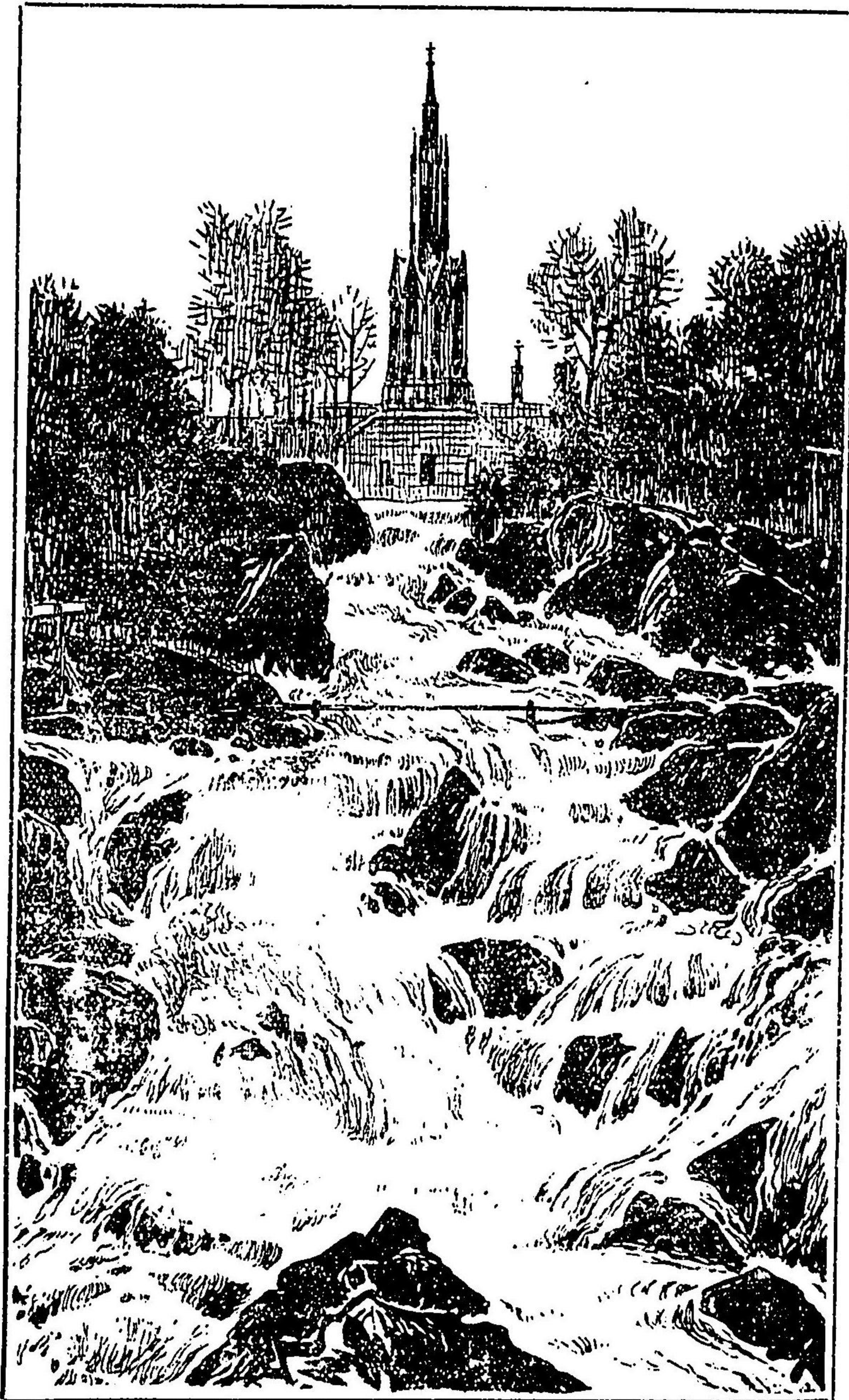


伯林市大通

魯西歷代の帝王の彫像及びその
 時の名將相の像が、ズーツと並び
 立つてをる。こんな風のやりか
 たは、英國にも佛國にもないので、
 獨逸の帝王主義をいよく、つき
 固むる爲の策とおもはれる。人
 の話によれば、皇帝はこの彫刻に
 ついては、親ら監督せられ、日々こ
 の前を通りて打眺めらるゝを樂
 しみにして居られるこの事。一
 體同國はこの主義からして、到る
 處に帝王の肖像彫像が敬はれて
 ある。公共の建物の中には、言ふ

までもないが、烟草屋でも、珈琲店でも、理髮店でも、湯屋でも、大方現
 皇帝の肖像を掲げてない處はない。畫端書などには、最も澤山あ
 つて、中には御一家族をあつめて寫し出したのものもある。
 市の交通機關は、最も整うて、たゞの馬車や汽車はいふにも及ばぬ
 が、例の電氣鐵道、馬車鐵道など、頗る敏速で、巴里のごとく停車場ご
 ごとに待合せる暇もない位だ。但し一頭曳の乗合馬車は、倫敦や巴
 里で見ないものである。
 市中の小公園は、甚麗末で、彫像がニユーンと立つて、立木が生い茂
 つて居るまで、別に花壇築山といふほどの仕掛は無。休み場
 腰掛臺なども、極めて少なく、すこしも風流じみて居らぬ。共同便
 所は、大方この小公園の森の中にあつて、普通の道の邊には無い。
 これ等も、倫敦、巴里とは趣を異にして居る。

ピクトリア公園の人造の瀧は、頗る目ざましいもので、恐くは世界
 の第二は下るまい。我が招魂社の庭の瀧などが、逆立して競争
 してもおつつく處の話で、かい、巴里のボアール大公園にも、人造の大
 瀧があるけれども、伯林の方が花々しく、すすしく見える。
 スプレ川といふは、市の中央を流れて居るが、ごても倫敦のテム
 スや巴里のセーヌのやうに、大きくもなければ、奇麗でもない。こ
 れに比すれば、東京の隅田川の方がよほごまごまごである。併しこれ
 も市の風景を添ふる一つの見えごは、慥になつてをる。
 プラテンブルヒの凱旋門は、堂々ごはしてをるが、ごても巴里の
 には及ばぬ。たゞ樓上の彫刻物は、千八百七十年の戦争に、佛國か
 ら持ちかへつて來たもので、獨人の大威張に威張るものである。
 兩國の人が見たなら、この大彫刻物は、互に慷慨の種になるであらう。



帝王の宮殿は實に莊嚴なる建物で、雲に聳えて獨居るが僅の逸見料を出せば何人でも帝奥の奥まで拜見するところが出来。この内部の裝飾は外面



から思つたよりも一層
 美を盡して居るが、その
 壁天井等には歴代帝王
 の御事跡を畫にかきな
 老したのが多い。又文武
 帝功臣の彫像もあまた立
 墳つて居る。一體宮殿の
 墓内を見料とつて見せる
 のは、いかがいやうだ
 が、これは歐羅巴流で、決
 してこの國ばかりでな
 く、いつこの國でも同じ



伯林市

墳墓入口

ここである。議事堂その他
 公けの建物の内部を見るに
 は、大抵その料を拂ふことで、
 これらはその案内人の給料
 また見物についての雑費に
 あてるこの事だ。
 先々帝維廉一世の墳墓はシ
 ヤルロツテンブルヒといふ
 處にあつて、矢張市の中であ
 るが、老樹生ひ茂り、緑草深う
 して、いかにも神々しい。席
 はその神聖なる森の中にあ

るが、何人でも勝手に入つて参詣することが出来る。帝の肖像は御石棺の上に大理石に彫刻せられて居る。こゝは緑紫のガラスの天井から明りを取るやうになつてをるから、異様の光彩が満ち／＼して、身心ともにぞつとするやうである。この廊内は大變に廣くて、植物園さへ附いて居るから、人々は参詣がてら遊びに集まるものも頗る多い。

歐羅巴の人集め所もいふべき例の珈琲店は、この市にも非常に多いが、その仕掛は巴里のごとく向き出してなく、倫敦のごとく奥まりでない。これも獨逸流で、表と奥との中央ごでもいはうか、半は外を見、半は奥に在るごいふ風になつてをる。飲ものは珈琲銘酒惣てないものはないが、最も流行ものは彼のビールである。これは一リートル入、若くは二リートル、三リートル入の蓋つき柄つ

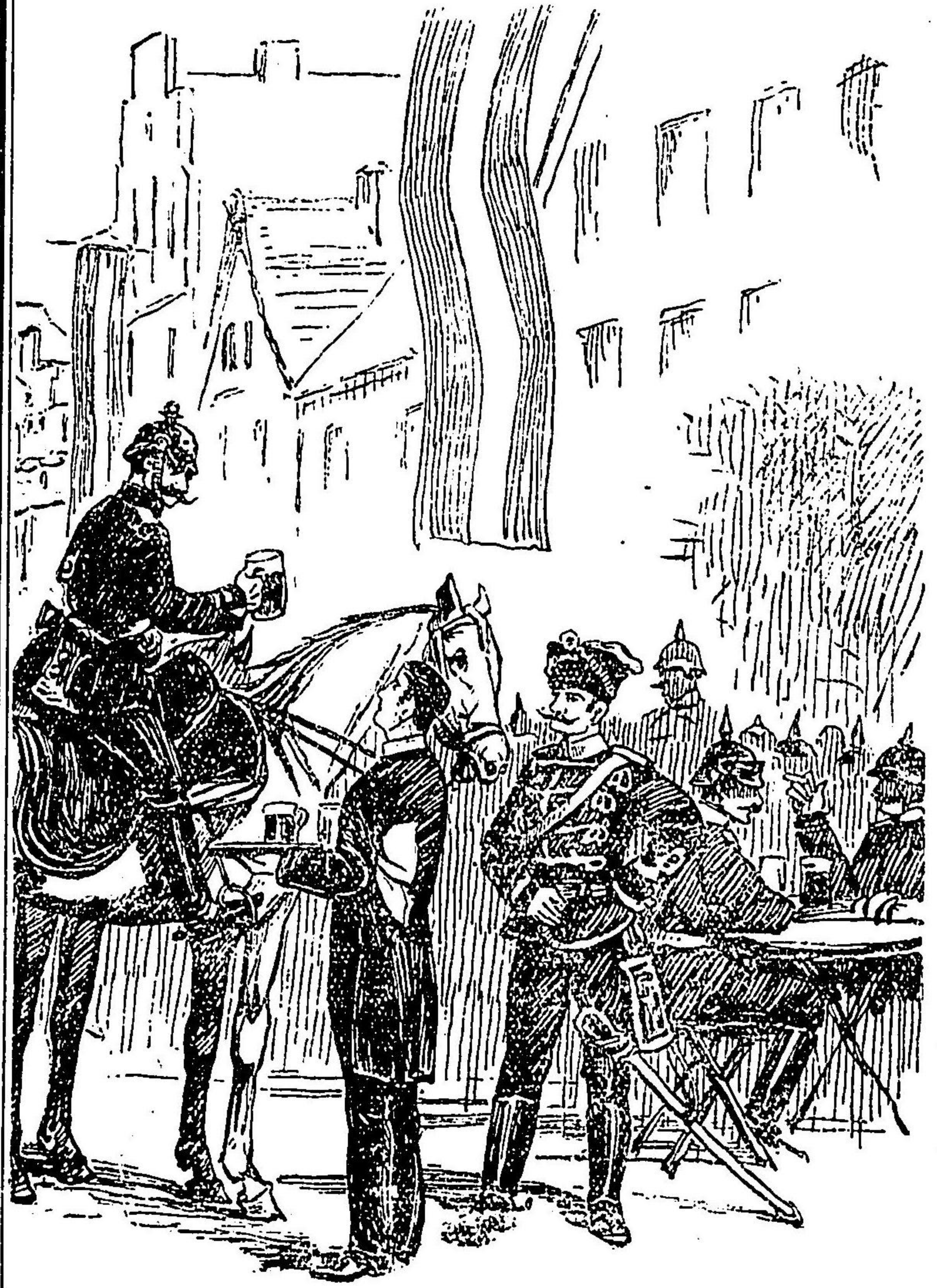
きの大コップに並み／＼とつぎて、グーウご一口に呑む。その飲み方の甚しいのは實におごろくほどで、一人で十七八杯位は、やりつくるものがあるそうだ。女でも小供でも、丁度我々が茶か水かを用るやうに、平氣でやる。學生の麥酒會なご、いつたら、ごても話しになつたものでない。ビール吐き所なごがあつて、ごうしても喉に入らぬ時は一度も二度も吐き出して又呑むごにする。このビールはミュンヘンが第一で、伯林のも大抵そこから持込むごいふごである。この珈琲店にては無論料理も出來、音樂もある、猥女も來るごいふごは各國ご同じごで、それは／＼賑やかなごである。日本學生の多き爲にや、ある珈琲店にては、我が東京日々新聞、時事新報なごを取りよせて、遠來日本人を慰むる料にしてをるものもある。彼等がその商賣に務める工合は、その一事に

ても分る。

食物は押並べて質素である。黒麵包の黒砂糖のやうな匂ひがするを常食としてをる。最も白麵包もあるけれども佛國のやうに甘くはないと云ふは一般の評だ。肉の切れても、ソップでも澤山にはあるが、その味は田舎風を脱せぬ。土地の人は非常に儉約で大方は豚の鹽漬とビール位ですまして居る。佛國では夕食をデネーと云つて大事にするが、こゝでは中食をデネーとして之を貴び、夕食はほんの残物でやりとほすといふ風である。衣服に至つては更に質朴で女でさへ殆ど絹物を用ふるものは少い。立派な馬車に乗つてゆく人でも、その衣服は甚麓末で、一向に目立ぬものを着てをる。ましてその格好なごば、頗る無風流で、巴里と比べたら、東京人と田舎ものとのやうだ。たゞ丈夫専門のや

うで、履もふごくこそつき、帽子も大やうに頭の上に乗せて、すこしもきちんとして居らぬ。白粉を施して花やかな衣服を装ふものは、彼の藝妓賣女の外にはあまり見當らぬ。男子に至つては更に甚しい。フロックコート、高帽子を装つてをる人は、數へるほどで、モーニング、セビロ位に、山低帽子、中折帽子位が多い。その服も成るべくじみで、花やかなものを厭ふ風は、どこまでも儉勤主義のあらはれて居る。併し男女ともに穢いといふことはすこしもない、いはゆるさつぱりとして、分相應にさりよそつて、贅澤をせぬといふ事である。この風習は巴里のやうな百事華美を競ふ處とちがつて、甚落付いて慕はしいこと、おもふ。體格はそんなに大きくはない。交際上の愛嬌は、巴里人のやうに利巧で、きはごく洒落ては居らぬが、さりこて倫敦人のやうに、ヌーウ

ツゴしては居らぬ。これも矢張獨逸流と見える。一體に色の白
 いか方だか
 供な
 奇麗
 なこ
 といつ
 たら
 無類



である。
 最も目立つのは
 軍人である。彼
 等の服装は金光
 燦爛で、彼等の足
 は棒のごとく真
 直で、彼等の胸は
 鳩のごとくに出
 て、彼等の腰は蜂
 のごとくにしま
 つて居る。彼等
 は實に交際社會



の大王で、大幣の引手あまたに、神のごとくに敬はれ、花のごとくに慕はれて居る。その髻の先の釣り上つて、殆ど眉の毛にも届くやうなのは、現皇帝にまねたるもので、之を帝王髻といつて、軍人ならぬものまでも成るべくおやかしたてゝ居る。聞きたきものは音樂もてはやされるものは、軍人ごでもいはねばならぬ。彼等は、彌々ますく、増長して、その勢力といつたら、この上も無い。殊に騎兵なごが、太く逞しき馬に、銀甲銀胴をきらめかせて、打乗つたるありさまなごは、遠からんものは音にも聞け、我こそは、獨逸のものゝふさいはんばかりの容躰。小供や女がさわぎたつて、あれ見やしやんせご慕ひ歩くも無理ならぬごおもふ。だから彼等はいよくいゝ氣になつて、コルセットをかけ、薄化粧をするものさへ出來たが、そうなつては日本ならば、平家のさむらひも思ひ合せられて、餘

計な心配するものもあらうが、そんな處でない。帝王のおぼえは日々にめでたいご云ふ譯で、花は櫻、獨逸は武士といふありさまだ。學理の蘊奥を究むる大學も盛んだが、實業教育の盛んな事は、歐洲第一であらう。これは軍人と相並んで、獨逸が最もその勢力の擴張に盡して居る處であるが、いかにもその効は著しくて、昨年の巴里萬國博覽會でも、最も見處があつて、世界の人をおごろかしたの、は、獨逸の實業の發達した事であつた。獨逸が近年世界の強國となつたのは、全くこの實業教育の發達で、國を富まし、軍隊教育の獎勵で兵を強うするごいふ、國是に本いて居る。ごいつて決して形以上の學問を疎にするでは無い、文學でも史學でも法學でも、殆ど英佛を凌いで居るごは、人の知てる通り。劇場もオペラ、テアートルの類、到る處に設立せられて、その進歩繁盛

も、をさく／＼巴里や倫敦におこらぬ。その美術館博物館のごときは實に宏大で、その美術出版物の手際のごときは、決して巴里に歩を譲らぬ。

必竟は奈破翁に散々たゞきつけられた後、眞に臥薪嘗膽の覺悟で、儉勤尙武を事とし、一たび佛國復讐の戦捷つて後も、更に驕らす愈々増々武事を盛んにし、實業を奨励して、今日この大勢力をなしたのである。これは維廉老帝及ヒビスマルク侯の勵精剋苦したの由るは、もごよりであるが、元來國民が誠實で勉強心に富んで、耐力の強い結果に本づく事である。我が國のやうに、萬國交際を開いて日未だ淺き國民は、能く是等の跡を考へ合せて、たゞに東洋第一位で安心せず、世界の強國と爲る決心で、事々奮發せねばなるまい。

歐米の市街交通

世が開けて物事の頻繁になるにつれて、交通機關はいよ／＼整備せねばならぬ。殊に市街に至つては、一層の必用がある譯だから、さまざまな機關が出來てをる。

先づ米國の紐育市に至つて見ると、驚くのは高架鐵道である。かしこは家屋が無暗に縦にのびて、甚しきは三十階もあるものがあるが、高架鐵道は、丁度家の十二三階にも思ふほどの處を通つて居る。これは市を廻はつてをつて、ごこにでも利用が出來る停車場に赴くには、街道より棧橋を上つてゆくので、そこで切符を買つて待てるを、すぐにガ／＼と音して汽車がやつてくる。すぐに飛び乗る。すぐに馳せ出すといふやうな仕掛で、丸で目のまふや

うなあんばい。素より一々戸を開けたりあめたりしてはをらぬ。ごここからでも這入られるやうになつてをるし、車の中は、ごここでも歩かれるやうになつてをる。

停車することは、三分かそこらだから、餘程急がねば乗りそこなひ、又降りそこなふ恐れがある。この車に乗れば、居あがらで、市中の家の上部の方を見てゆくことが出来るが、家ごみの町を通る時などは、ちつとも高い處に居るやうな心地はせぬ。これ左にも右にも家があつて、その窓が互に向ひ合つてをるからで、裁縫店だの洗濯屋などが、ズラリと並び合ひ、向きあつてをるからである。譯はあい、淺草の仲通りを、そのまゝに、二三十丈も押上げて、その中を汽車で通るやうな工合なのです。

又電氣鐵道は、市中を走つてをるが、これなどはすこしも止まるこ

ごは無い。いつもく〜ガ〜く〜ご音して、幾輛もく〜引つゝいて走つてをるのに、人は勝手に飛乗り飛降りしてをる。日本流や西洋流のは、大抵その昇降口は、前か後かに極まつてをるが、米國のは、そうでない。横側からでも、ごここからでも昇降が出来るやうに構造してある。車室の兩側に眞鍮の棒が、いくつも立てゝあつて、それを便りに飛び乗り、飛び降りをする。最も婦人のみは、その昇降の時に、一寸車をこゝめるが、男子には更に頓着せぬ。そのいそがしさ加減ごいつたら、雷様が汽車を追かけるやうで、實に何ごもいへない。人の話に英國倫敦は、いそがしいごはいふものゝ、人ご人ご互に突き當つては、兩方より御免ごいつて、跡もむかずに過ぎゆく。紐育では御免なごゝいふ暇はない。混雜する處で、突當る位は當然の事ごして、互に恠まぬごいふことだが、いかにもさうであ

らう。婆さんも爺さんも、裏になつて飛んで歩いてをるこいふやうな世界で、とても月が出て眺めてもくれず、日が照つてもあつこいこいふひまも無い。

こんな風に、一般交通機關が便利であるから、市街のすみからすみに行くなどは、僅の時間で足りる。その上に手馬車や自動車や自轉車で、道も見えぬほど、縦横無盡に馳せ廻はつて居るこいふ始末で、文明こいふは、こんなに人を忙殺するものか、と當惑するぐらゐである。

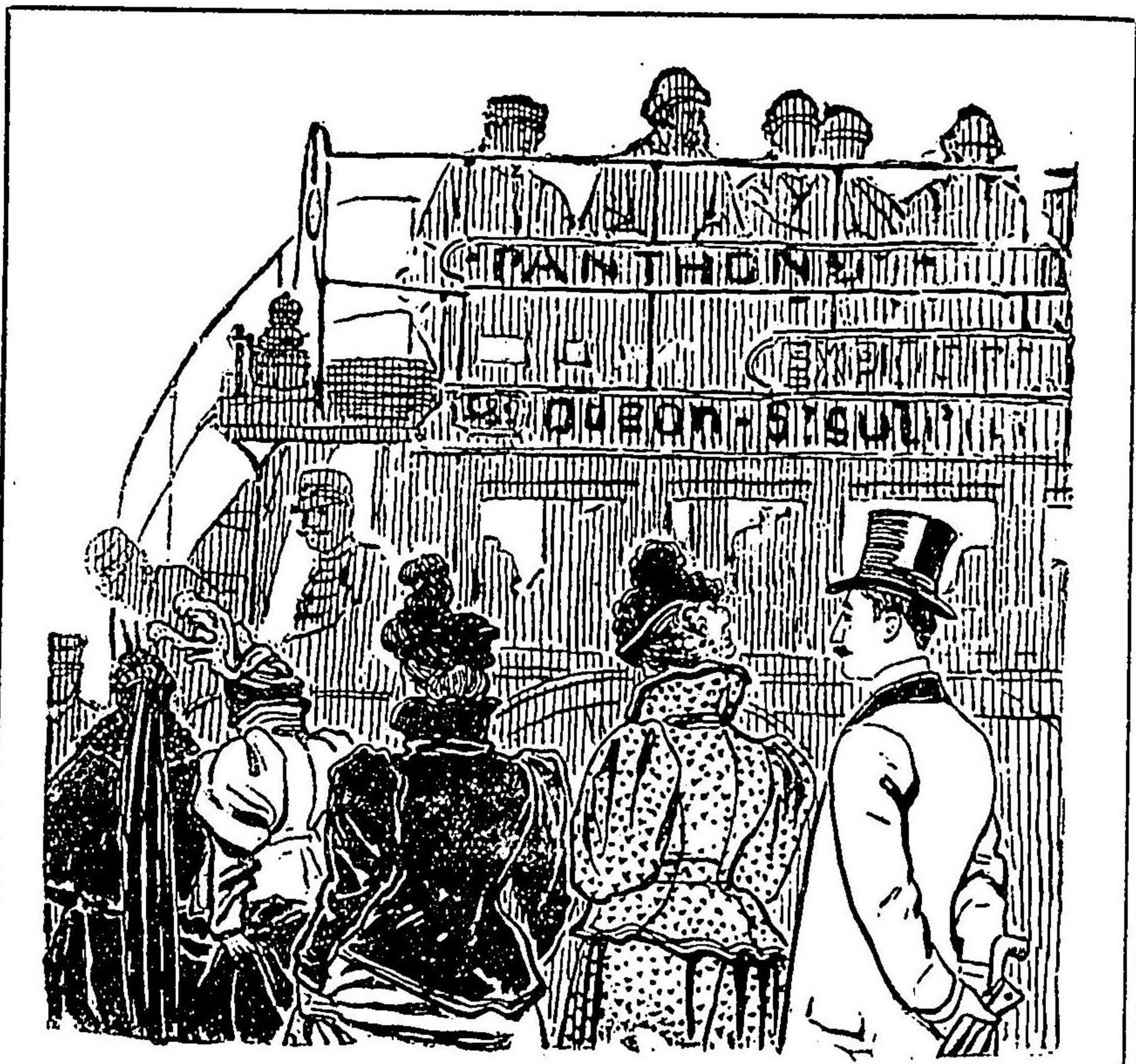
それから西洋にわたると、やゝ落付いてをるが、あかし我が國などとは、くらべものにならぬ。まづ倫敦はごうかこいふと、例の地下鐵道は、テームス川の底をくゞつて、幾筋もひかれてある。この停車場には、昇降機で降つてゆくのので、車から降る時も又昇降機で地

上に押上るやうになつてをる。隧道の中は、無論電燈がついてをるから、非常な深い地下を通つてをることは、おもはれぬ。停車場ごには、雑誌や小説などの小間物店さへ開いてをる。これの便利な事は、丁度紐育の高架鐵道のやうな工合で、倫敦市の旅行は、之を利用せぬものはない。その他乗合馬車の多いことは、恐く世界一であらう。彼の二階付の二頭曳で、それは、盛んなもので、ごんあ處にでも、應用することが出来る。(是等の事は倫敦の繁華の條に言つたから、今は大抵にして置く。)

それから巴里にわたるには、港まで汽車に依り、そこで車を降ると、直に汽船に乗込むやうになつてをる。その間は僅かに數歩で瞬間の仕事だ。さて船に入るとすぐに出帆、おいそれこいふまに、向ふ岸につく。(三時間の處もあり、一時間の處もある)直に佛國の汽

七十六

車に入る。素より代價は船も車も一所に初めに拂ふのである。巴里にも、また倫敦にまけない、地下鐵道がある。その汽車の簡便な事は、降ると停車場に郵便函の大きいやうな箱が口を開いて立つてをるのである。これは切符受函で、客はここへくこの口に汽車の切符を投げ込んでゆくので、一人一人がつて調べるなどいふことは無い。これは頗る時間を省く辨理な話ではあるが、公共の道德の十分行はれる國でなければ、むづかしい事であらう。この乗合馬車は、四頭曳が普通で、車室も、倫敦伯林などのよりも大きい。いづれも二階つきで、市中残る隈なく引まはされてをる。又倫敦や伯林とかはつて、ここでは、市中はここへく同じ價で、東の果から西の果までいつても、僅に一町いつても同じことである。外國の客相手の巴里では、最も妙を得てをること、おもふ。又外



歐米の市街交通

七十七

の國のやうに、車に乗ることすぐに、一々切符などはくれぬ。錢のやりばなし、取りばなしで、その二階は惣て一階の半格である。又プラツト電気鐵道もあれば、自動車もある。又プラツトフォームオホトモビルといふものが、大博覽會中には、架せられた。これは常に電気機關車

の力で運行して居る板葺の線路があつて、その上に乗るさへすれば、獨りで運んでいくやうになつてをる。最もこれは一定の場所のみを巡つてをるもので、電氣車や馬車のやうにはいかぬ。その他市街鐵道もあり、又セーヌ川の蒸汽にも至つて心もちのいゝ乗合船があつて、ごこにゆくにも、すこしも面倒な事はない。伯林なども、その通りで、乗合馬車や電氣鐵道は實に完全して居る。市街鐵道も素より備はつて、ごこへでも勝手に飛んでゆかれる。こゝで一つの感心なのは、辻馬車の中に、二通り種類があつて、一駆けいくらご大凡極りがあつて、その價を拂ふのこ、一つはごこくく時間極めなのこである。その時間極めの方は、馬車の首即ち馱者臺の傍に、さしわたし五寸ばかりの時計が置いてあつて、人が乗るごすぐにこの針を見降ると又その針を見て、最も嚴格に價を拂

ふやうにしてある。この時計は客の方でも見えるやうになつて居るから、決してうそはつけない。だから詞のわからぬ人でも、又は田舎者でも、危険なく安心して乗られる。

巴里では人の多い程に乗合車が間に合はぬ事が多くて、いつまでもく待せられるごがあるが、伯林は能く市人の數を計つて乗合車を設計したものご見えて、すこしも待つてをらずごも乗られぬごは無い。

露西亞の都について見ても、交通機關は形こそ巴里、伯林などに劣つてをれ、いづれも一通りは備はつてをる。バルカン半島の諸都府でも、その通り。奥太利、匈牙利などに至ると、すこしも巴里や伯林ご替らぬ。鐵道もあれは電氣車もあり、地下鐵道もあり、船もあり馬車もある。

世人が動もするご、半亡國のやうにいつてをる伊太利羅馬でも、交通に不便を感じるほどの事は少ない。一体にいへば、この國は山が多ほいからして交通不便の方だが、併しその都府は別に差支は無。ヴェニスはやうな處は、水の中に町の在るやうな工合だから、道路の代りに運河があつて、そこには龍頭形の舟が、東京の人力車のやうに、客待してをるから、ごこにでも、ごこにでも、この小舟を利用する事である。

最もおごろくのは、瑞西の遊山場、即ち避暑地であるが、世界中の人が來るからでもあらうが、交通機關の備はつてをるごこ、實に感心なものである。アルプス山の高い處にでも、ケーブルカーで、ずん／＼と押上るやうになつてをれば、すこしも苦勞なしに、且時間を費やさずに、あんな非常な高山の上に昇るごこも下るごこも自由

に出来る。この勢いでやつたなら、日本の富士山位には直に鐵道をかけて、昇降する位は譯はなからう。

こんな風に河の在る處は、乗合船、高い山にはケーブルカー、その他電氣車、滾車、馬車、高架鐵道、地下鐵道など、世界到る處の都府には、蜘蛛の巢のやうに引かれてある。だから、ごこにゆくにも、すこしも不自由なく、僅の錢貨ご時間ごさへ費せば、苦勞なく事が、ごごげられる。

諸君試に一寸日本を離れて、香港までいつて見たまへ、この形況は直に分かる。峯の公園といふ高い／＼巖山の上まで、例のケーブルカーを仕掛けてあつて、ほんの僅の間に上下することが出来る。是等の點から考へて見るご、文明といふごこは、交通機關發達整備の異名かごおもはれるやうな感じがおこる。

かう書いて見ると我が東京のごときはどうです。鐵道馬車といへば極めて小さい、ちかも、のろいもので、やつと東京市の南北に一筋聯絡してをるごいふありさま、東西の方は、その一筋さへない。だから四谷あたりから、深川邊までゆかうとするには、それはく大變で、殆ど一日の仕事である。市街鐵道も、未だ不十分で、電氣鐵道さへ無いごいふ始末。それに道はわるいし、坂はあるごいふ譯で、實に我々は世界各都府に比較して、恥かしくてたまらぬ、最もおひくごその方針にすゝんで、よくなるには相違無いが、決してこの現在のありさままで、世界強國の都府だなど、うぬぼれてはなりません。上下共に勤勉して、むだな事をせず、公共事業を大におこなねば、世界に對して面目を失ふ事になるのです。二三富豪の輩が、馬車に乗つて歩いたごて、交通機關が出来たごい

ふわけではない、一般人民が不自由なく用ふる處の物が整はぬ中は、決して安心することはならぬ。交通機關が整つたごはいはれぬ。なんご御互に奮勵せねばならぬ時期ではありませぬか。

西洋人の公共道德

一人で居るものは一人だけの快樂、一人だけの道德があり、二人で居るものは、二人だけの愉快、二人だけの徳義が行はれてある。西洋人は、共同生活で、居る家も共同、食ふものも共同、遊ぶ處も共同、いふ風だから、何事も公共的に出来て居るご共に、公共的道德が、その必要の上から、大に備はつて居る。家内に在る時、食事をする時、道路を歩く時、公園に遊ぶ時、さては喜ばしい時、悲しい時、争ひ騒ぐ時など、一般にわたつて、おのづから守

られて居る道徳といふものがある。我が國に於ても道徳は素より大に備はつてあるのみならず、西洋諸國の上に出て居ることが多いが、今いはうにおもふ公共道徳などの事は、國のありさまが違ふから、我になくて彼にあることが少からぬ。

まづ家は例の公同住居で、數家族各室に集つてをる。だから出入するには、或は昇降機で上下したり、或は螺旋形の階子を、ゴツゴツ昇りたり降りたり、長廊をサツサツと通行したりするわけである。それ故に互に守るべき徳義がなくてはならぬ。例へば降る人は必ず右がはによつて歩くとか、昇るものは左がはを傳ふとかいふことが極つてをつて、決してぶつかつたり、衝き當つたりはせぬ。

又階子の道中や長廊の眞中で、男と男と逢へば互に帽子を取つて禮してゆき、女と男と逢へば、まづ女を通して男は跡に従ふと云ふ

風である。大きな家になれば、階子の數も多く、廊も非常に廻つて居るから、處々に休み場がこしらへてある。そこには長椅子を並べたり、またはちよつとした床几をおいたり、花をかざつたりしてあるが、若しそんな處に人が休んで居つて、その前を通るやうな場合には、御免といひつゝ、ゆけば、休んでる人は、失禮と答へて帽子をさるこいふ始末。この階子や廊の中では、烟草くはへながらゆくこいふこどもせねば、高話、高足音して通るやうな事もせぬ。況や絨毯の上に唾きするやうなことは夢にも無い。その家に入る時には、必ず丁寧に履の埃を拭き、ズボンの塵を拂つて、おこなしく上つてゆく。廊の左右は即ち人々の住んで居る室であつて、一戸々に呼鈴があるが、いたづらにチーンと鳴してうれしがつて遁げてゆくやうなふざけものは無い。最も西洋では、一戸一戸に姓名

も何も書いてないのが多いから、誤つて呼鈴をおして、ごんでもない人を探ねるやうなところもあるが、そんな時には、誤つた人は丁寧に出れば、受付に出たものは、いやをりくあるところで御最です、御尋ねの方はお隣りですなご、柔らかにあひしらうので、決して、この間抜け野郎間違へめなご、つぶやくやうなところは、ない。

夜の十時頃を過ると、寝る人もあるから、殊更に長廊や階子を歩くには、注意して、成るべく履の音のせぬやうにする。そのさまは、殆ど忍び足のすがたで、まるで爪先で歩いて居る。こんな場合には、素より聲も立てぬ。せきばらひもせぬ。大の男でも、かよい小さい供でも、この時には一致して、その殊勝さは、感心の外は無。

中以下の家になるご、その共同階子や廊の中に、夜中電燈のかゝやいて居るごもなければ、瓦斯も消えてをる。そういふ時には、兼

ねて階子の昇り口、即ち門番の居る處に、その戸数だけ、蠟燭立があつて、いつでも火を點して持ちゆくやうになつて居る。それにマツチから火をうつして、そろそろ持ち上り、例の拔足さし足で、自分の室の戸を、鍵の音も成るべくあづかに開けて入るのである。

食事の時は、殊に嚴重で、すこし儀式立つた御馳走でもある時には、それはく大さわぎ。まづ化粧部屋に入つて、頸から以上を丁寧

に洗ふ。髻をそる。髪をかく。爪の垢をこる。それから用意の服を着る。さて静々と食卓に向ふ、拭巾を膝にかけ、ソップを吸ふ

ここから了つて楊枝をつかひ、口そぐに至るまで、チャーンと順序があり、法則があつて、初めから酒を飲んだり、途中で水菓子をつまんだりなどはせぬ。そのソップを吸ふ時などは、舌でまいて呑み込むので、豚のやうに、ギューく、チューく、と音させるやうな

仕打はせぬ。また庖丁をつかひ物を食ふにも、ガチノゝ音させたり、途中でおくびを出すやうな事をすれば、大變な无禮としてある。

毎日、家族同志が食ふ卓上にて、決して手も洗はずに出るやうなことはせぬ。況や馬鹿聲舉げて、人の話を邪魔するやうなことは更に無い。成るべくはおこなしい、優しい胸につかへぬやうな話をして、共に愉快に、共に楽しんで、食事を了るのである。椅子に憑りかゝつて、我が足を前にニユーンと出して、大きな口して楊枝をつかふなどは、紳士たるものは、最も厭ふことで、途中で立ちたり、笑つたりすることは、不埒な事になつてをる。是等は人に不快を與へぬやうに、互に甘く喜んで食ふと云ふ主旨から來てをるだらう。道路を歩くにも、またおのづから定れる禮があつて、左で

も右でもかまはず心の赴く所にゆくやうな事はせぬ。又杖や傘を打ふつて、人の邪魔になるやうなことは、最も愼み、罪も無い草木や石などを叩きながらゆくが如きは、野蠻の風としてある。馬車でも、自轉車でも、一定の法があつて飛びゆくので、無暗に出し抜に來て、通行人をおごるかすやうなことは無い。

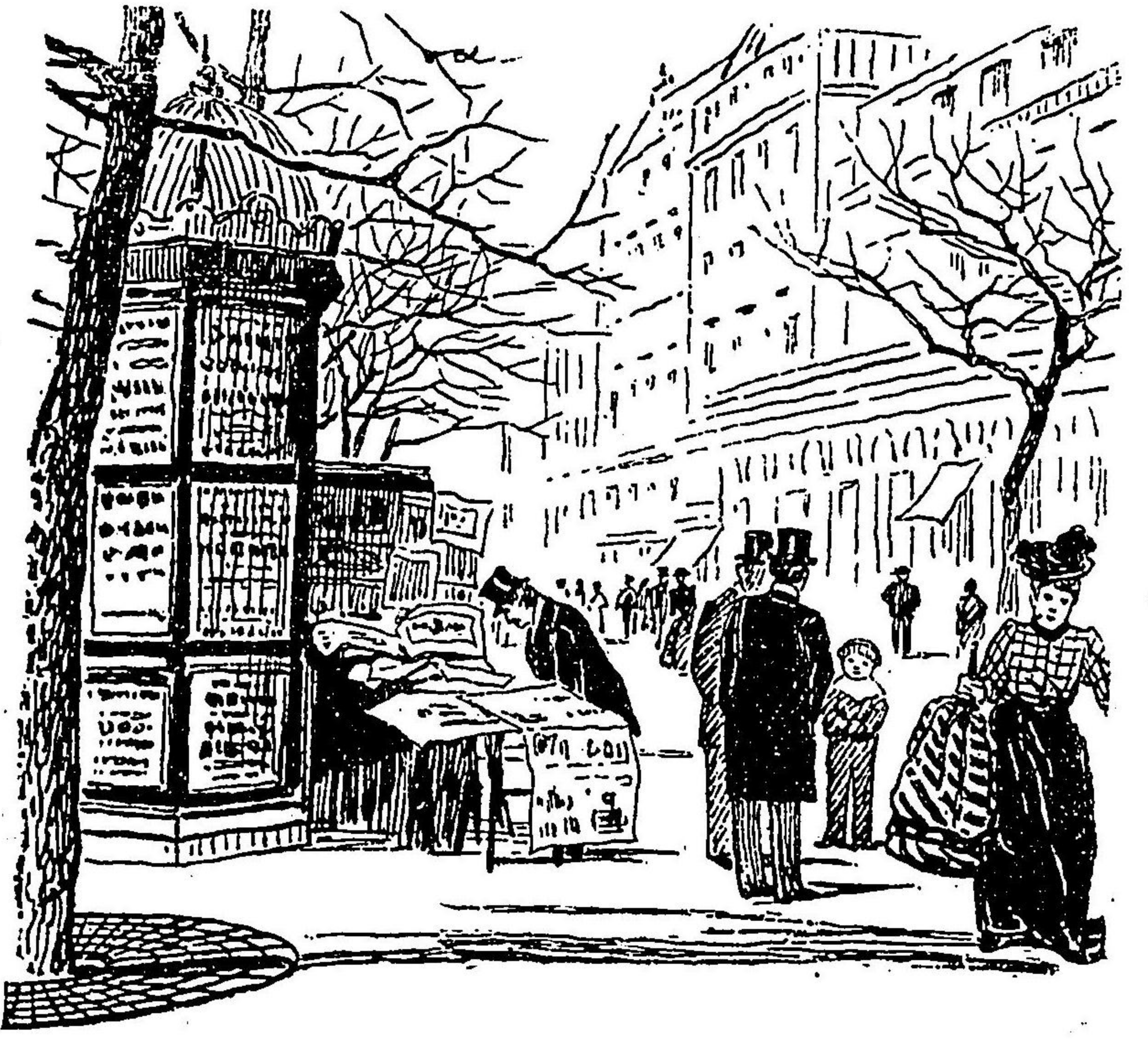
併し殆ど土地の動いてゆくやうな大勢の通行人だから、かやうに注意はして居つても衝き當ることは屢々ある。そんな場合には、互に御免失禮の言ひすて、それが爲に振りかへつて、息巻くやうな野暮も無いば、そんな事にぐずぐず言ひてる暇も無い。だから非常な混雑だけれども、その割合に喧嘩する人は少い。或人が日本本の巡查は、喧嘩の成敗が重なる役で、西洋の巡查は、通行人を甘く通すのが役だといつたが、まあそんなものだ。

汽車や馬車は数が多い丈に、その昇降は随分混雑であるが、先着の面々より徐に乘つたり降りたりするのが、チャーンと規則立つて、互に先を争ふやうなことは決して無い。それらの停車場には多い時は五六十間も、二三百間も、緩の行列のやうに、人が長う聯なつて居る。その乗合馬車は、番號の順に載するから、車掌が一番二番と叫ぶと、ハイと答へながら、その番號札を示しつゝ上りゆく。そんなわけだから、いかに雑沓の時でも、札さへ先に取つておけば、腰がまがつた婆さんでも、半人前の小供でも、堂々と乗込むに少しも差支は無い。

車室には何人詰といふ定員があつて、その上には乗らうともせず載せもせぬが、客も自分の権利のみを守つて、すこしも外に對して妨害を與へぬ。例へば三人容るべき處に、二人乗つたらば、必ずそ

の一人分をあけておく。足を出して見たり、下におくべきカバンなどを上に載せたり、臂を張つたり、芋虫のやうに寝たりして、他人に迷惑をかけるやうな事は大に慎んでをる。殊に老人や小供や婦人などのかわいものを見たら、成るべく助けて、くつろがせるやうに務める。こんな譯だから、そのせられた方でも、最も丁寧にあごやかに坐して、ありがたうの二三度も云うて、その厚意を謝すといふ風で、互々の間に、言ふべからざる和氣が生じて、柔らかなる春風に小蝶でも舞つてるやうな長閑な氣がする。飲食もすべき時にし、烟草も吸ふべき室では吸ふが、不規則に飲んだり食ふたりして、人の迷惑になるやうなことは、御互に避けて居る。大小の勸工場や新聞雜誌屋などは、至る處毎にいくつもあり、その賣品は山のごく積み重ね、新聞や雜誌、書端書などは、何百種も何

千枚も行儀能く並べ下げ
 てあるが大抵出し放して、
 監督人などは遠方でなく
 ては居らぬ。巴里のセー
 ヌ川の岸などには、何町も
 つゞいて古本が並べてあ
 った、その賣主は呼んでも
 聞えぬやうな時もあるが、
 一人として錢を拂はずに
 持遁げするものは無い。
 新聞や小切位は勝手に持
 つてゆけといふやうな風



に並べばなしたが、誰も盗根性をおこす奴はない。
 料理店や休息店には、何時見ても客は蛆のやうにたかつて居る。
 そこにもこゝにも飲食して居る。素より給仕人が暗に監督して
 居るだらうが、なかく、そう行届くもので無い。さあ會計となる
 と、大抵客の方から、私は何と何を食つた、かういふ酒と烟草とを
 取つたといふやうに、自白すると、給仕人が、一々その目前で書きこ
 める。そうして、目前で決算して、錢を請求する。この間には客の
 方には寸分のうそも云はぬ。若しわるい心をおこさうものなら、
 随分三品を二品といふ位は、譯は無い、又混雑中遁げてもゆかれる
 だらうが、そんな不徳義をやる奴はない。
 各公園には水がふいたり、木が繁つたり、芝が榮えたり、花が咲いた
 りして居るが、入つて成らぬ處と、勝手に歩いていゝ處とがある。

これは自然と定まつてをつて一々札も立てないが、決して入るべからざる處に入つたり上るべからざる山に上つたりはせぬ。見事に咲きみだれてをる花は、小供などは欲しからうと思ふが、その一ふさたりともむしり取るやうな事はせぬ。また池に石を投げ入れたり、木の枝を折つたりするやうな事もない。

所謂口ハ臺即ち無錢腰掛が、處々に並べてあるのには、いつもく人が大尻小尻を打かけて居るが、これも互に譲り合うて、我が利のみは主張せぬ。もごより泥足で上つたり、無暗に杖でなぐつたりすることはない。寄り来る人々は春の花に於る蝶か蜂かのやうで、數限も無いから、是等の腰掛ばかりでは足る筈もない。そこで某々の會社請負人があつて、公園ごとに數十萬の椅子を並べてある。これは一人について、一錢か二錢か出さねばならぬが、黙つて

好きな椅子に腰かけてをるご、若い女か年老か、ごごからかやつて来て、自分の前にニユーツご立つ。これは小さいカパンを提げ来て、この椅子の腰掛料を請求するものである。この時にはその定額の錢をやるご、請取の小札をくれる。これを持つてをれば、その日だけは、その公園内のごこの椅子にでも腰かけ得る権利がある。この錢請求人は數多配つてはあるが、廣き園内の事ではあるし、殊に夜などは御互に見えないごもある。さる時には客は外にゆきたくても、成るべくこらへて請求人が来るまで待つて、錢を與へて立ち去る。それさへ既に殊勝だが、ごうしても請求人が来らず見つかからぬ時には、その定額の錢を、その椅子の上において立去るごいふ美風は敢て珍らしくない。

御祭事などがあつて争ひ騒ぐ時でも、成るべく人の自由を妨げぬ

やうに、人の愉快を消さぬやうに互に注意するから、自然と不愉快な顔するものも少なく、和氣霽々の中にすむのである。新婚者が公園散歩にでも出逢ふと、知る知らぬ人まで、眞に愛をたゞへて迎へ喜んでやる。やきもあらしい、いたづらもせねば、遠くから笑つたり悪評したりなごして、人の快樂の邪魔するやうな事は遠慮する。

墓所に入りては、殊に靜肅で、高聲で話もせねば、烟草をさへ吸はぬ、花や何か、手向けてあつても、取るものも无ければ、まして石塔をたゞきながら歩くやうな事は決して无い。靜に歩いて靜に禮して、出入してをるありさまは、一しほ感ぜられる。途中で葬禮にあへば、知るも知らぬも帽子を取りて禮するのみならず、その行列を横ぎるやうなことはせぬ。素より會葬人は歩行で、中には帽子も

脱いでゆくものも見ゆる。笑つたり大聲出したたり烟草吸うたりせぬのはあたりまで、その式場の出入香奠の時なども肅々として容をさゝのへ、争ひさわぐやうな事はすこしもない。

芝居寄こいへば、陽氣な方だが、見物中に馬鹿聲を出して、その藝を批評したり、グリーンと鼻をかんだり、烟草を吸うたり、兩手を伸して大きな欠伸したりするところは互に慎んでをる。こんな場處には席ごとに必ず備へつけの双眼鏡があつて、僅かな小錢を投げ入るれば、ピーンと音して自然と箱の蓋があく。するところからニユーツと出るこいふ仕掛けであるから、入用の人は、この方法をこるのです。幕が終り、劇がすむと、必ず本の箱に入れて、サツサと歸る。その手あつかひの柔らかで、誰一人この眼鏡を盗んでゆく奴も無いから、座でも安心して、かゝる備へを爲しておく。

必竟西洋各國は共同生活、共同遊戯、共同運動といふ風に、何もかも共同的に社會が出来てをるから、共同道徳がかくのごとく進歩してをる。若しも彼等の國人に、この道徳がなかつたならば、直に禽獸世界になるだらう。

我が國の社會は長い間割據的生活であつたから、道徳の進歩しかたが、西洋とは赴が違つて居るので、これも矢張自然の結果である。依て思ふに、個人的道徳、家族的道徳の最も發達して居る、我が國風に、西洋のいはゆる共同的道徳を十分に加へたならば、實に申分の無い、世界無類の黄金社會を造り出すことは、そんなにむづかしくはあるまい。

臂おし張り眼光らせて議論がまへで、物言ふのが豪傑でも无ければ、おこなしい一方、引込思案なのが紳士でもない。進むべき處は、進み、退くべき處は退き、正義と平和を目的として、社會を形造るやうに志たいことである。

西洋の畫端書

世中には用が足りて間に合へば濟むものごと、そうで無いものごとがある。例へば臺所道具の摺鉢や摺子木や、又は水瓶、水桶、味噌こし、醬油樽、油樽、火吹竹のやうなものは、見えのよしあしなどはなくて、もいゝが、やゝ御座敷向になると、さうはゆかぬ。火鉢でも、火箸でも、坐蒲團でも、烟草盆でも、間に合ひさへすればいゝごはいはれぬ。奇麗ごか趣味があるごかいふまでに至らずとも、汚くない否でないごいふ位にはゆかねばならぬ。住む家ご道具ごに依つて、その家人の心が推しはかられるごいふ

ここもあれば、身分相應に嗜みといふことの必要がある。贅澤は無用であるが、人間として心持のいゝだけの事は、したいものである。それから先は、その人々の考へて、風流に取りなすものもあらうし、洒落に取装ふものもあらうし、活潑に豪宕に、これは人々の性質である。

郵便端書といふは、實用専門のもので、互の用が便ずれば、格好や何かはごうでもいゝやうなものゝ、人々の好みといふはふしぎなもので、いつの頃よりか、何人の考へ出したのか、西洋各國に畫端書といふものが顯はれて來た。普通の端書は、切手ごとに印刷せられて、殊に何の遠慮もなく書き下されて、この上もない便利なのに、畫端書は、書く時にも、その畫のある爲に遠慮せねばならぬ處もあり、又一枚ごとに別に切手を張るといふ面倒もあり、時間の上から考

へても、經濟の上から考へても、不便で不都合で、馬鹿らしいやうなものだから、誰も用ひまいごおもふに、實際はその想像に反して、はやるごも、はやるごも、滅法矢鱈にはやつてをるといふのは、實に疑はしいやうな事である。

併しこれが人間といふものゝ嗜みと見えて、味噌こしや、摺子木のやうにては、おもしろくない、いかに用事をかくにもたゝの端書でやるのは、御座敷の灰皿に、臺所の猫の鉢か、ビール瓶のかけでも持出すやうで、用は足らうが、興味も無ければ、雅致も無いといふので、畫端書といふものが、はやり出したと見える。いへば贅澤であるけれども、それが人間としておもしろい處で、贅澤のうらには無言的、教育が、この畫端書に依つて行はれをることを知らねばならぬ。第一は各國の地理歴史風俗を知るここである。一都府を成した

る處は言ふまでもないが、市街を爲したる處にては、必ずこの畫端書を發行してをるが、それにはその地の有名なる建物、市街のありさま、男女の服装、有名なる人の肖像、名所、古蹟等を摺り出してないものはない。だから之を見れば、その國の地理、歴史、風俗のあらましが、ちよつと分る。旅行者などには殊に必要で、その端書に、一筆かいて、家にも、朋友にもおくれれば、貰つた人は、その本人が過ぎた處を、文章以外に想像し、餘程興味が添ひ、また知らず知らず、その地理の一般を悟ることになる。古蹟があれば、何人の何の古蹟かといふことを考へ、又風俗畫があれば、自分の國と比べて、すぐにその批評にかゝりたくなるのは、當り前で、用事の外に、その利益効能を與へることが多い。

例へば倫敦から、トラハアルガール廣場の畫端書を貰つたとする

と、それには、ネルソン將軍が突立つて居る紀念碑がある。ネルソンといへば、英國の海戰史上に、ごれだけの大名譽を遺してをるかといふは、日本の小供も知つて居るに、その畫のついてをるものを見たらば、幾層その敬慕の念がますますか知れぬ。まして倫敦の眞中に、こんなに盛んにせられて居るかとおもふと、英國人の今日の氣象さへ推し測られるといふ譯になる。又聖彼得堡市の中央に、彼得大帝が馬に跨つて居る圖のはがきを見たらば、彼の人の意氣のはげしかつたを想像するのみでない、彼の國が今日ある事さへも粗わかるやうな心ちがするだらうとおもふ。

巴里の大通りや、紐育の市街や、伯林の公園などを書いたのを見たれば、その繁華の狀が、目に見るやうで、歐米の公園や町といふもの一端が分つて、自然海外壯遊の壮志をおこす種にも、又ふかくそ

の原因を研究して見たいといふ念慮をおこす事にならんともいへない。

又印度人や支那人やなどの事をかいたるものを見たなら、何故にかくまで西洋人と懸隔してをるかといふことも考へ出すだらう。殊に黒ん坊の容態などは、その意氣地なさ加減も分つて、何かの奮發の種にならぬことも限らない。こんな諸の點から考へて見るに一枚の畫端書でも、その用文の外の効能は随分廣き區域まで及ぶといはねばならぬ。

第二は美術の獎勵意匠の鍛鍊といふ効能を爲す。花鳥人物風景の別なく、思ひくの意匠より、さるかたに畫き成した端書は、地理歴史風俗などのより、變化がさまざまで、遊びものとしては頗る面白い。これらは有名な畫師が筆を下したのが多いから、随分畫手

本の一部に數へてもいゝ程のがある。殊に新奇々々競ひゆく中より生れ出づる事だから、その意匠圖案また色の配合筆づかひの緩急など、珍らしくめでたきものが多い。

是等の端書にむかうと、同じく用事を書く人も、ペン先の心づかひおのづから注意することになつて、なぐり書きの書きはなしをつゝしむことになる。だから文章の用意もふかくなるし、自然美術の嗜みもおこる。たゞそのみの効能でない、世界各国の美術の進歩の一端及びその方針をも窺ひ知ることが出来る。故に書きにくくても、究屈でも、この種の端書は日を逐うて盛んで、新奇々々、畫師の競争することも烈しく、寫眞板木屋など、そのかたの技師の心入れも、一日過ぐれば一日新らしくなるといふ形勢である。我が國でも大分畫端書を見るが、これは西洋が發明物だけに、今の

處では、到底比較にならぬほど、先方が進歩して居る。随つて彼等の殖民地である新嘉坡、香港などまでは、その畫端書といふものが、随分見られるものがある。併し博く行はれてをるのは、前に云つた第一に屬する地理、風俗、歴史などにかゝはるので、今いふ美術畫端書の類は、歐羅巴大陸の外は、割合に少ない。倫敦市でさへ美術として見るべき畫端書は、まことに少なくて、大方は疎雑である、散漫である。まして東洋各國にては、そんなはがきは、曉の星を見るやうな心持がする。

この美術畫端書の中心ともいふべきは、第一維納及び伯林で、次が巴里であらう。それから延いて全大陸に及んでをるが、到底獨逸、奧太利、佛蘭西の三國にかなふ處はない。美術といふ上からは、巴里が世界一だといふが、畫端書、美術は、奧都獨都が功一級であらう。

ごおもふ。殊に近年歐洲に流行するアールヌーボーと自漫するニヨロく、こした線の長い、なめくじの匂ひまはつたやうな畫は、それ等の國が最も盛んで、畫端書にも、この式を用ひたのが頗る行はれてをる。花鳥などの珍らしいものは、云ふまでもない、人間動物などを、勝手次第に長くしたり、短くしたり、丸めたり、角めたり、自由自在に、畫きなしてある手際は、非常なものである。是等の技術の妙を競ふところが盛であるため、近頃は畫端書全面悉く繪で、すこしも名の書く處もないやうなものもあらはれて來た。そうなつては、畫端書といふ名義も立たず、第一用が辨じない贅澤物、いはゞ小さい額見たやうなものになつて、買ふ人もなからうごおもふが、なか／＼そうでない。成るべくそんな風なのが評判がよく、普通の地理や何かの畫端書は、この道の通人は、あまり玩ばぬやうなありさ

まである。これらは公平に考へたら、少々弊に陥つてをるやうであるが、おもしろいといふものは變なもので、いよくその弊端書が跋扈してをるやうな始末。

裸躰畫の端書など、いつたら、我が國人などは、不埒なものとして手にも取るまいし、取らせもしまいが、西洋では花や鳥と同じやうな心持でかいてをる。そうなたつて見るこゝ、一般が馴れてままつて、すこしも弊もないと見えて、白晝大手をふつて大足をあげて、彼の裸躰畫先生が市街を飛び歩いてをる。これは我が國の僧さんたちが戀の歌よんで平氣でをるやうなわけで、習慣となれば脇からおもふほどのものではない。併し中には新奇を競ふ處から、随分いかゞしい猥りがはしいものもあるが、さすがの巴里でも、先年その二三種の發賣を禁じたことがあつた。

畫端書の通人は、世界中の名所古蹟、名畫及び名人の肖像などを、端書ばかりで、集めてをるものがある。是等は天然に待つてをつたこゝて悉くおちかゝつて來る譯ではないから、新聞や雜誌に廣告してあつめるのである。余が巴里で見た一新聞は、その畫端書及び世界各國の郵便切手、證券印紙、電信切手、また諸の役所や、大きな商館、學校その他俱樂部、劇場、製造場等、一つの組合を成してをる處で用ふる封印紙類にかゝる事はかりを書いたものであつたが、その廣告欄といふものは、十中の九分九厘までは、世界各國の人に向つて、畫端書の交換をしたいといふ人々の申し出であつた。物ずきの多い西洋人だから、知るも知らぬも、之を見ては、珍らしそうながきをえりて、その本人におくれば、貰つた人も、その禮に一層新しい趣工のものを求めて、返禮するといふ樂みややつてをる。是

等は素より委しい事はかゝぬ、たゞ挨拶位であり、甚しきは年月日のみをかいてやる。

こんな風だから、ごこの家にも、書端書帖の五六冊や七八冊を持たぬ處は無。殊に小供の中は、男も女も之を好むと見えて、小供勢の多い家には、最もその数が多い。元來歐羅巴人は、新奇を逐うと共に古物保存心が非常に深い。一枚の名刺でも、端書でも、人から貰つたものは、大切にしまひおいて、一人つれづれの時、または客などのある時に、さしつかへない分は、展覽せさせて、互に誇るこいふやうな處がある。書端書の蒐集に、熱心であるのも、一つは、かゝる點から來てをるごおもはれる。

千九百年の巴里の萬國大博覽會にも、書端書といふものは、あまたあらはれて來たが、殊に獨逸は自分で最もよいごおもふものを大きな額にあつめ張り合せたのを十枚ばかりも陳列した。それは地理は地理、歴史は歴史、美術は美術といふ風に、部類分をして、大に縦覧人の注意をひきおこした。

かしこでは二度目の用事からは、必ず書端書にするといふ事を聞いてをるが、いかにもその盛大さ加減、その町なごに、この店の繁盛を極めてをる上から考ふるご、うそでもあるまいごおもはれる。巴里は盛んではあるが、ごてもその熱心なる製造ご、無限なる流行ごには、獨逸、奧太利には及ばぬ。

この書端書に類したクリスマスカルトご稱する一種の風流な書簡用紙が、また歐米各國に行はれてをる。これはその名のごごとくクリスマスの時に互におくるを主とし、延いて新年狀にも用ふるもので、端書ではない。その形はさまざまで、素より大も小も

あるが、孰れも折紙にて、いろく／＼な趣工から、畫も文も書いてある。年の暮になるに、このカルト店が軒ごとに聯り並んで、そのうつくしさ、目ざましさといふものは、丁度花屋でも見るやうな心持、またこの時には、知人同志は必ず之をおくり合ふ習はしであるから、曆でも買うやうな工合で、誰でも必ず買ふものになつてをる。だからその店の繁盛といつたら、それは／＼大騒ぎで、賣子などは、可愛い顔の目をまはし、聲をからして奔走してをる。

これは素よりある文の下に、我が姓名を書きかへて、状袋に入れておくるので、むき出しではない。その畫の種類は決して神様に關係のあるのばかりではない、景色でも花でも鳥でも、獸でも、やろい。ろで、その間に必ず一行二行の文章が入つてをる。

このカルトは、宗教の盛んな國ほど最も盛で、佛國などは割合に數

が少ない。丁度余は歳暮に英國にゆつたが、その盛んな事は想像にも及ばぬほどであつて、歳暮の店の半分は、これで持ち切るといふほどの勢ひであつた。

我が國でも基督教家の間には、この贈答は行はれてをるかも知れぬが、一般の人は殆ど知らぬほどの事であらう。これなども實用からばかり論じたら、愚なものかも知れぬが、矢張一つの嗜みが本で、今は止むべからざる習慣となり、その習慣から、さまざまの點に利益を生ずるまでになつてをるのは、丁度畫端書と同じ譯である。西洋各國に於て、文學美術の、一般に押しわたつて楽しみもてなされるのは、この畫端書と、クリストマスカルトとの二つであらう。

露西亞の風俗

諸君も知つて居らるゝ、こゝろ露西亞は世界中の大國で、亞細亞歐羅巴に跨つてをる。その亞細亞露西亞の面積ばかりでも、百十萬方里あるといひます。歐羅巴露西亞がその本部で、面積は三十五萬方里に涉つてをります。丁度歐羅巴の六割で、我が日本の十二倍あるわけです。

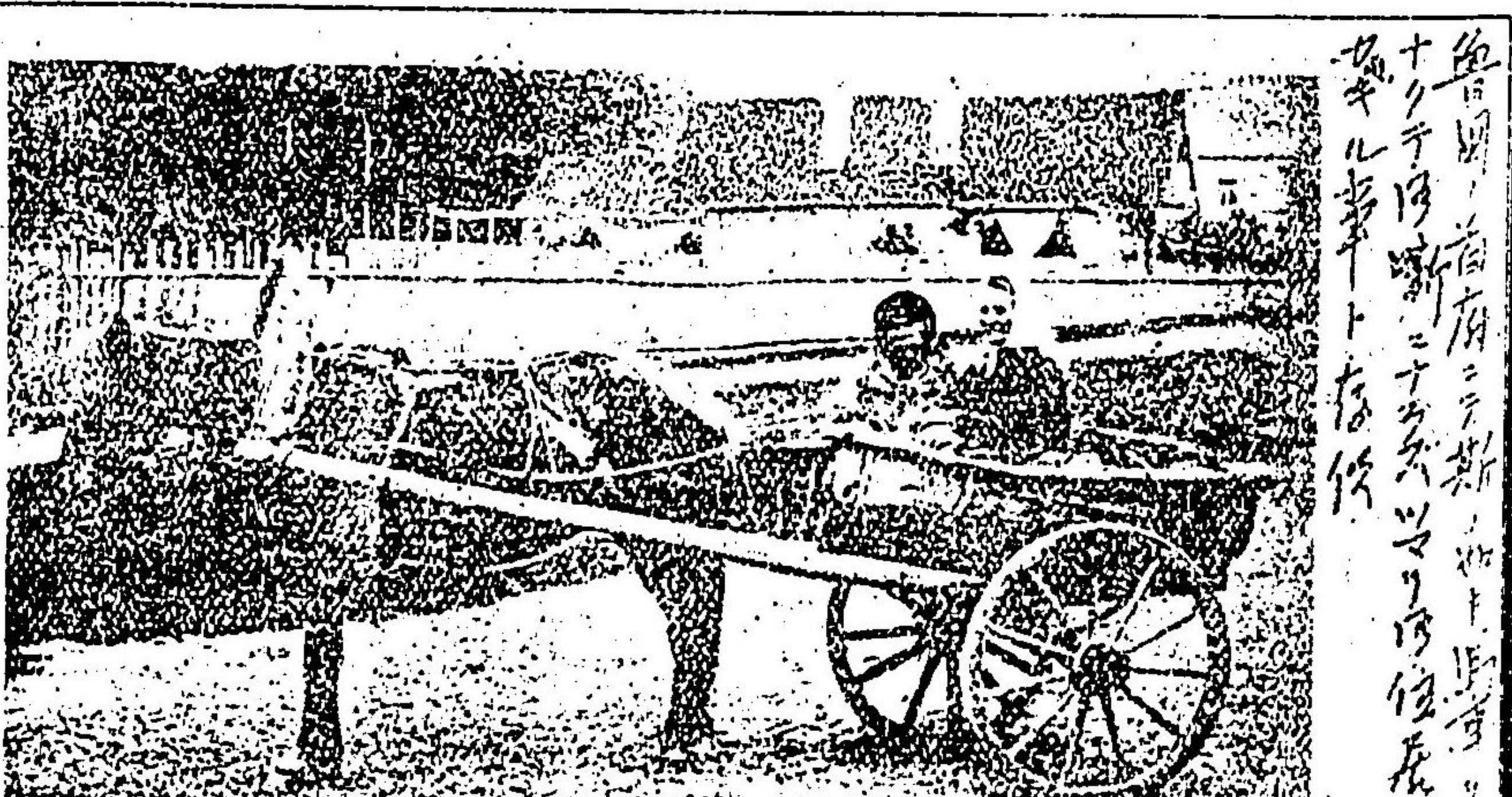
實に大なるものでありますが、併しながら、大男軀に智慧がまはりかねと云ふこゝろ、こゝからごこまで何事も行届いて居るといふわけではない、そんな動物の住んでをるかこへ分らぬ處の方が多いのです。

この國の都府は、即ち聖彼得堡といふ處で、こゝはフィンランド灣

此ノ書端ノ余カ露國ヨリ日本ノ家ノ許ニシテモナリ



此ノ書端ハ余カ巴里在留中友人某露京ヨリモナリ



12 octobre / 90' a la sante de mon petit
co-co
Camille

頭に位して、北緯五十九度五十六分、東經三十九度十分の處にあり
 ます。こゝが露西亞の政治の中心であります。この府は開けて
 から未だ新らしいから、眞の露西亞の風俗は莫斯科といふもこの
 都府の邊にゆかねばわからぬといひますが、自分はこの邊を僅か
 ばかり歩いたから、その見聞したことを、ごりませで書いて見やう。
 佛蘭西や英吉利など、違つて、この國は全躰が大きく廣いから、何
 事も大やうで、氣のきかぬといふ風です。第一聖彼得堡の道路で
 すが、その幅の廣いこと、いつたらえらいものですが、一向に志ま
 りが付いてをらぬ。素より木道も石道もあるが、中には砂利など
 を振り捲いたまゝの所もあつて、一躰に奇麗さつぱりごしてをら
 ぬ。公園などでも、伯林風を眞似たやうに見える處もあるが、何だ
 か庭作りなどが落つかぬ。是等はまた若いせいでもあらう。家

はなか／＼立派で大きい。ごても巴里などでは輒く見られぬほ
 ぞ、宏大であるが、あかしその風致に乏しく、室内裝飾などに構はぬ
 事は随分甚しいものである。見つきも頗る妙でない。彫刻など
 も大分に多く、紀念塔や高樓などもあるが、優美な點は至つて少な
 い。
 最も穢ないのは馬車で、僅に一人ほか乗られない。その製作法も
 鳥渡いは、人力車のや、大きいと云ふやうな躰裁で、瘦せた馬を
 取りつけてあるが、その轆などが甚田舎じみて、丸で他の歐羅巴諸
 國では夢にも見ぬものである。その上に馭者といつたら、それは
 く奇異な風をしてをる。悉く左り襟で赤帶をしめてをるが、最も
 厚くごて／＼した服に、大黒様のやうに、ふくれてまごはれてをる。
 寒いせいか、手には撃劍の手袋見たやうなのをはめてをる。帽子

もあるが、頭巾風のいかゝしいもので、そのきたなくて、氣のきかぬ
 工合は、ボンナ畫の題には、請合つて及第するであらう。
 自分は丁度十月の初にいつたから、まだそんなに寒くはなかつた
 が、常に雪げの空であつた。毛外套を被つてをるものばかりだが、
 婦人は悉く大風呂敷のやうなもので、頬つゝみしてをる。そうし
 て手鼻かみあがら、歩いて居るが、色の白く美しい人も多いやうだ
 が、その風躰には恐入らざるを得ないのである。
 汽車は歐羅巴中でも、最いゝ部分になつてをるが、荷車などゝ來た
 ら、我が大八車より餘程愚なもので、その車夫などの風躰は、色は黒
 く、服はきたなく、眞に土百姓づらの標本である。ある英人の紀行
 に、英斯科を旅する時は、一々橋をたゝいてわたれといふ事があつ
 たやうだが、随分難義千萬な危い橋が多い。この邊の道の悪い點

から、いつたら、東京も負けないだらう。
 一体に露西亞人は、頗る懦弱で、朝から晩まで、錢のある丈酒をのむ、
 その酒はオーツカといふもので、丁度焼酎のやうなものだ。小
 いコップについて、はげしくのむのである。料理の風も、よほど他
 の歐羅巴ごちがつて、こてついで居るやうだが、その代りに、本食に
 取かゝる前にくふものは、頗る澹泊である。たごへば潮肴瓜もみ
 湯出海老とでもいふやうな工合で、日本流に近い。これで十分に
 酒をのんで、夫から本料理にかゝる。そのソップなどの中には、我
 が鯛の潮煮見たやうなものもある。全体に食ふことも飲むこと
 も甚盛んで、とても獨乙人や佛蘭西人などが、おつゝく處でない。
 やゝ上等の種族は、シヤンパンを、がぶぐゝのんで徹夜の宴を張る
 ものもあるさうだ。

茶を飲む事といつたら、又世界第一であらうが、それも日本流の煎茶ではない。いはゆる紅茶で、中に橙を切りて入れ、砂糖を和して、ガブ／＼のむのだ。これは食事々々の間にもやれば、夜もやる。大体夜ふかし人が多いので、そんな時には、この茶で二時までも三時までも起きて居る。麵麩といつたら、黒色の一種の匂ひあるもので、それを食ふこと食ふこと實に夥しい。下等の人民に至りては、素より自分の名も、ろくに書けぬ奴が多く、自分の國が、これほど廣さがあるか、隣國には何といふ國があるか、世界といふものが露西亞の外にあるかないかといふ事さへ知らぬが多いこの事だ。だから大臣が何だか政治が何だかもしらぬ。國祭日などに國旗をたて、をりをりながら、その何の意たるを知るものは少いこの事で、巡查が立てよといつたから立てる位が言ひ譯だといふ事である。

宗教は彼の希臘教で、即ち皇帝はその管長である。人民がその熱心な事は、實にすごいほど、到る處々に祭壇のない處はない。町の中にも、處々にあり、又橋のたもと、人よせの處など、悉く祭壇のあること、丁度我が國で處々に石地藏堂などがあるやうな工合、さうして高きも卑しきも、その祭壇の前を、ごほれば、一々跪きて拜禮してゆく。

ネバア河といふは、聖彼得堡の町を流れてをる大河であるが、そのわきに彼得大帝が創業時代の小宮殿が大切に保存せられて居る。その殿の一隅に彼得大帝が戦争中でも、身を放さなかつたといふ一尺四方ばかりの絹地に、基督の像を畫がいたのが額になつてかかけてある。これを土地の人が、毎日々々拜みに來る。自分がいつた時は、雨天の夕であつたが、二三十人來てをつた。それは大方

中等以下のものであつたが、勢揃ひして、この前に跪つき、立上つてその畫像に接吻して退くのである。あまり烈しくて嘗め盡さうとするからこいつて、今は玻璃をかけてあるのです。國の政治は、無論貴族が專有して居るが、その内部の腐敗は全歐羅巴中第一こいふ事である。併し處々に大豪傑を据ゑてあるから、あまりそのぼろが世にあらはれないので、随分思ひきつた事もやるのです。國民の氣風に「何だ構ふものか」といふ一つの有爲な精神が貫いてをつて、これが仕事をする本になつてをるこいふ人がある。

や、田舎にゆくこ、その家作りなごが或は赤煉瓦の鹿末なものもあり、又茅ぶきの家も少くない。この邊のありさまは、丁度日本の百姓家のやうなあんばい。

我が國の百姓が家づくり

こゝにて見んこおもひかけきや

ご自分は歌をよんだが、歌はよくないが、實景はこんなものです。莫斯科の町は、古い丈に聖彼得堡より狭く穢いが、家は頗る亞細亞風を帯びてをる。宮殿の一部分などは悉く支那風に出來て居る處もある。こゝは長く韃靼人が占領してをつた事もあつたから、よほご亞細亞的文化が残つて居るやうだ。葱花のやうな頭してをる寺々も、この市が最も多い。

莫斯科から南西の方に、キーエフといふ處があるが、こゝは莫斯科よりも昔の都府であつたさうな。この邊の土人は顔色なごも、よほご亞細亞的で、林檎だの葡萄だのを、かこに入れて天秤棒で肩にしよつて賣り歩く風は、全く我が俗に均しい。素よりこんなもの

に履なごを穿いてをるのは少い。大方素足で、婦人は髪をぐるぐ
 と巻き上げたり、又は背後に垂らしたりしてをる。非常な田舎に
 ゆくご、殆ど穴居せぬばかりのさまだと聞いた。
 一たび寒風が吹いて來るご、草も木も海も川も、ここへく、氷つて
 天上天下銀世界となる。そんな時には、馬車も无れば、舟もかよは
 ぬ。聖彼得堡でも莫斯科でも、交通機關といつたら、櫓の外には何
 にもなくなる。この乗物は非常な迅速で非常な面白いものださ
 うだが、自分はその期にゆかなかつたから實際は知らぬ。
 ごこの國でも、おのづから遊ぶ季節がある。東京などは春が人々
 の最も楽しむ處だが、露西亞はこの嚴冬白雪の頃が、遊び楽しむ季
 節となつてをる。寒い處だから、夏がよさうなものだが、さうで
 ない。銀世界の中を、この櫓で乗廻はし、煖爐温かき室に相集まり

て、音楽し、演劇し、舞蹈し、飲食し、夜晝通して遊び合ふさうだ。
 最も彼國の建築は壁の厚さが、二三尺あまりもあり、悉く二重戸で、
 その間々には綿を詰めおき、また透間の風を防ぐ爲めには、悉く密
 封してある、入口などは至つて狭く、いは、我が國の土藏のやうな
 のが多い。これは寒を防ぐ爲めであるが、その中に温かくして居
 つたら、いかに寒さはわすれるであらう。外出の時には、最も贅
 澤な毛織の外套を用ふる。これはこの國より外には要らぬから、
 旅客なごのためには、損料にて貸す家があるさうだ。かうきいて
 見ると、寒中が遊戯の季節といふも、最もものやうに感ぜられる。
 まあ氣候も十分でなく、人民も不揃で、懦弱放蕩で、土地も廣すぎて
 手が届かぬといふご、素よりよき國ではない。さりながら、彼等の
 氣炎は、大分世界にもえ立つて、西伯利亞鐵道を敷いたり、ごうかす

るご東方の經營を、一人で擔はうといふやうな考へをもつてをる、佛蘭西などを妻妾のやうにおもつて、威張つてをるのは、ごここにか侮るべからず自ら頼む所があるご見える。彼の聖彼得堡の老まりの無いやうに廣く造られてあるのも、大に將來の經畫かもしられぬ。何にしても彼得大帝は、えらいもので、その餘風が今に存して、すこしも衰へぬのである。

ナポレオン一世といへば、世界の英雄であつたが、露西亞人は、一向に何とも思つてをらぬやうだ。あの男か、あれは莫斯科から遁げたのだごは、彼の國人の能くいふ事である。それに反して彼得大帝といふご、それはく大したもので、日本の太閤様を信ずるよりえらいやうである。だから自然それに見習ふごいふ氣風が一般に行きわたつてをつて、例の何だ構ふもんか、やつ、けるごいふ

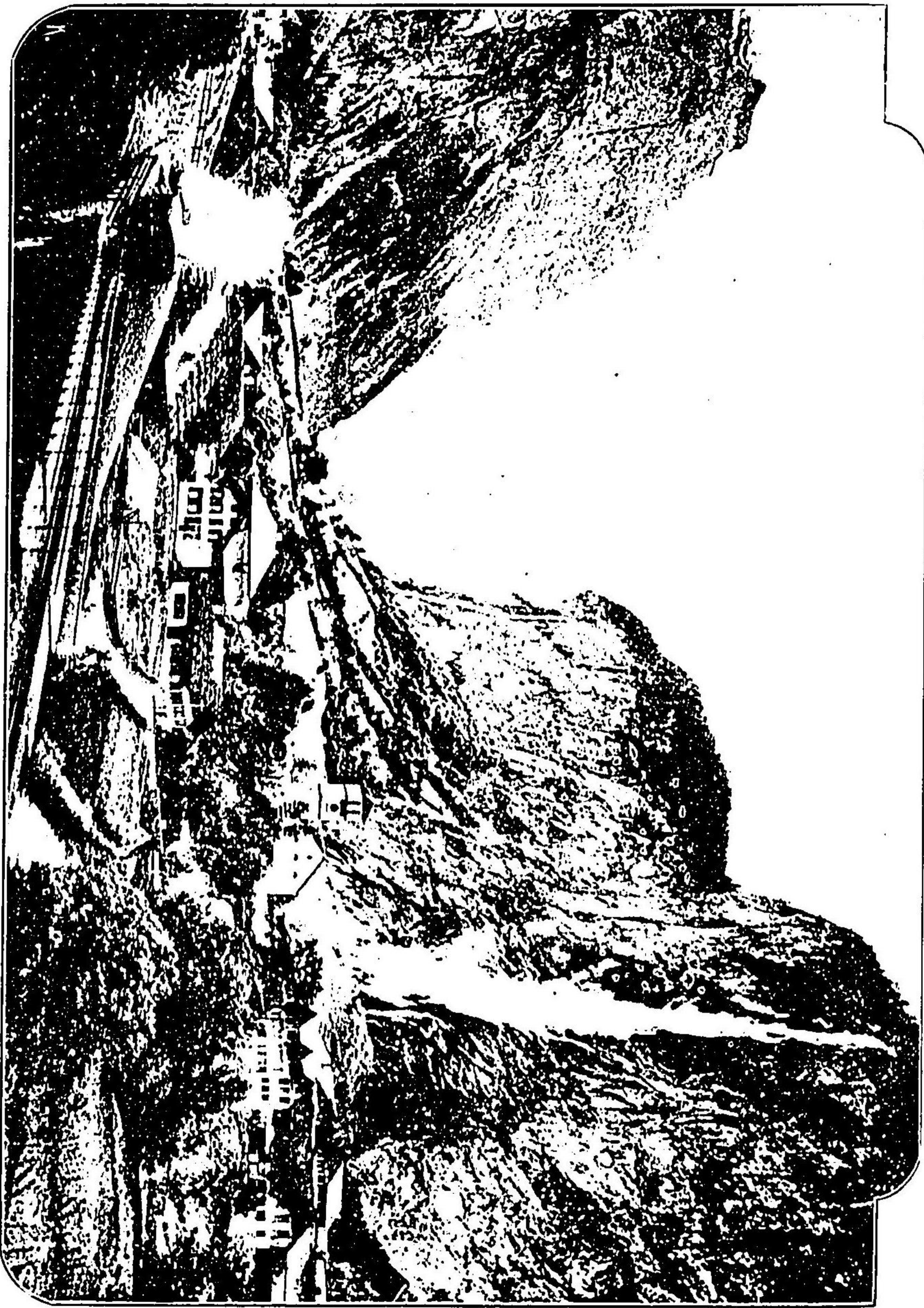
やうな氣象は、愈々露西亞を大にせしむる一原因かごおもふ。人民全体が、小利巧でなくて、おほやうである處なごは、反つて彼れが強いごころかもしらぬ。あかしあまり政府の干涉がはげしくて、外國の文書の輸入を禁ずるなご云ふ點から、反つて密かに共和論なごを主張するも、たまにはあるやうすである。この外虚無黨なごいふ厄介なものも蔓つて居るさうだが、いつて實際を見るご、帝ご民ごの間がらなごは、随分親しいやうにおもふ。これは無論宗教上の崇敬もあるであらう。

瑞西の山水

人は心に樂みがあくては持ちきれぬものである。だから花を見て樂しまうご思ひ、月を見て樂しまうごおもひ、景色のいゝ處をた

づねて樂しまうとするのである。こんな事から考へると世界の處々にいゝ景色のいゝ國を作つて置れるのは、神様が人間を樂しましめやうとせられる爲であらう。我々の日本國のごとき、いづこにいつても、景色のいゝ處ばかり多いのは、即ちその籤に當つたので、景色のわるい國人ごもは、さぞ羨んで居るのだらう。

瑞西といふは歐羅巴中の最も景色のいゝ國で、神様がよほご念を入れて造られたものに見える。それは春は花、秋は紅葉といふ見えてなくて、一國全体の構造が人を樂しましむるに最もかなつて、面白く風雅に愉快に出來てをる。いはゞこの國は西洋諸國の共同庭園見たやうなもので、盆栽もあり、池もあり、橋もあり、飛石もあり、燈籠もあるといふ鹽梅。まここに心持のいゝ、樂しい國である。その位置はごうかといふに、北は獨逸に接し、西は佛蘭西に隣りし、



瑞西山水泉景

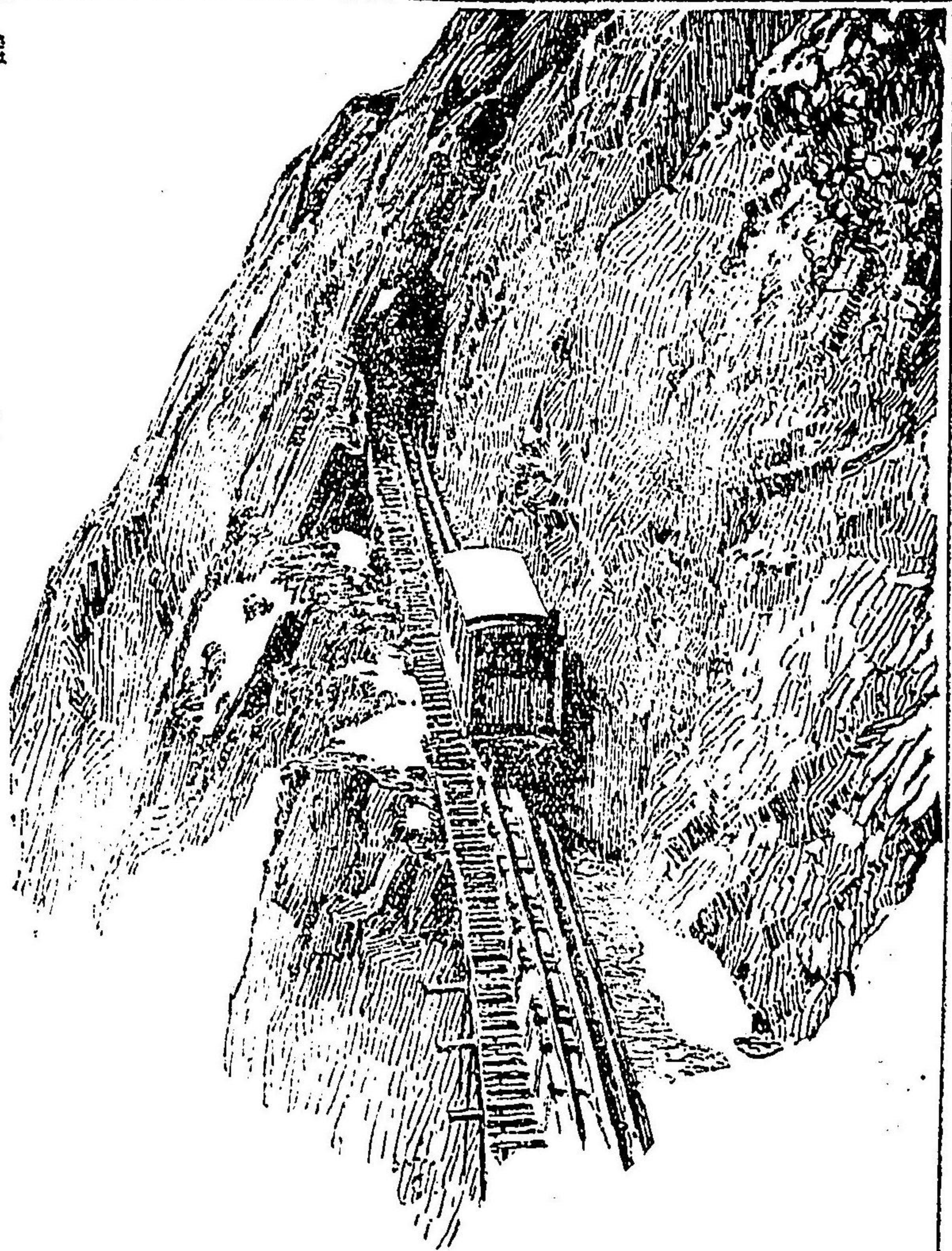
東は獨逸及び奧太利、匈牙利に聯なり、南は伊太利につゞいて居る。その國の面積は日本の九州位であるが、政治上の區劃は二十二州に分れてをる。そうして名に高いアルプス山、またジュラ山が、殆どこの國を會ひまはつて居る。

こんな譯だから、國の三分の二は高山で、三分の一は高原で、平地としては至つて少ない。そのアルプス山の最も高い處は、ユングフラウ、モントローザといつて一萬五千一百五十呎あり、又モンブランといふは一萬五千七百三十二呎あるといふことだ。我が國の富士山は一萬二千四百六十尺といふから、これは今すこし高いのだ。又歐羅巴で名高いライン河だの、ローヌ河だの、ポー河だのといふものは、この國から流れ出して居る。即ちアルプス山のセント、ユータードといふ峯は、是等諸大河の分水點になつてをる。湖の類

も澤山あるが中には三十方里を超ゆるものもあつて、小國に比へては大なりといはねばならぬ。殊にシエネヴァ、ユンスタンスの二つの湖は最も名高く奇麗である。一体に地勢が高い故に寒さも烈しい。アルプス山中には氷河もあるといふ程である。けれども國土の高低が非常だから暖い處もある。いは、歐羅巴中の總ての氣候を一國で分け持つて居るやうな工合。従つて動植物などには異類のものが多いと云ふことである。

重なる都府は、ベルン、ヂューリツヒ、バーゼル、シエネヴァ、ローザンヌなど云ふ處で、政躰は共和政治で、大統領が、かはる／＼選ばれて立つのである。人民は勤勉で最も工業に力を用ひてをる。その國勢がらごして水力電氣などいふものは、殆ど全世界を凌ぐといふ程である。絹布綿布などの製造は年を逐うて進んで、千九百年の佛國の萬國博覽會でも大變に評判がよかつた。時計の製造には最も妙を得て、これは我が國にも常に輸入せられてをる。景色を愛する人情から、全世界殊に歐羅巴人は、をり／＼この國に遊びに出かける。夏のあつき頃になるに、我が東京人が箱根、日光などにゆくやうに、申合せたごこく、この國に集まるのである。それは美しい景色を見ながら暑を避けやうといふのであつて、我も／＼と出で向く。

こんな事からして、交通機關が能く備はり、道路が完全であるのは、おごろく程である。彼のアルプス山はその峠が四十餘もあるといふが、中に最も名高いのはセント、ゴータードである。この國から伊太利にゆくには、この大隧道を通るので、その長さは九哩四分



騒ぎであつたが今は寝ながらく、りぬけるやうになつた。

百三十二
 の一ある。
 これは世界
 第一の隧道
 で殆ど十年
 かゝつて出
 來上つたこ
 いふこと。
 奈破翁の大
 豪傑も、アル
 プス山を超
 ゆるには大

山の上は夏でも雪を頂いて、その景色といつたら富士の山をいくつもく並べたやうで、かしの峯からは大瀑がおちる、この麓には水が逆まく處々の湖は鏡のやうにてりわたつて、諸の峯や樹木をうつして居る。鴻雁魚鼈が遊んで居る。外人の來遊を目的として金を儲けやうといふ仕かけだから、旅館の壯大に美麗なところはすばらしい。是等は都府の地にはいふまでもなく、どんな僻村にでもある。またおごろくのはどんな高い峯の上にもある。わが箱根や日光にゆくは随分嚴めしい旅館が山の上なごに立つてをるが、あんなものではない。そうしてまたいかなる高い峯でも峻はしい坂でも汽車がかゝつてをる。所謂ケーブルカーでギリギリ高い山の上へ引上げたり、引下げたりするのである。最も我が國の草鞋がけ金剛杖といふ風な出立

で、山高く谷深く分け入るのもあるが。大方はこの汽車を利用して景色を賞するのである。

余はシエネヴァに泊つて是等の景色を見巡つたが、丁度天長節の日、このアルプスの第一の高い峯に上り立つた。こゝで同行の人と君が代を諮つたが實に愉快で、世界中を玩ぶやうな心持がした。その時。

アルプスの高峯にたちて君か代を

うたはん時のまたいつかあらむ

と思はず歌をよんだ。

湖には丁度蝶の翼をひろげたやうな小舟が、あちらこちらに浮んで、数多の客の愉快を積んで居る。花火があるやら、音楽がはじまるやら、假聲の船がまはつて来るやら、それはく賑やかである。

湖邊には珈琲店がざらりと聯なりて、おもしろをかしい趣向がある。椅子に打かけて遙々水ごしに山を望むと、高峯々々にて雪の白う積りたるが、空の色の青きと映じて、配合の宜きを得てをるのは、上手な油畫を見るやうで、その心持のよさといふは、この上も無い。

や、山ふかき村落に入つてゆく、山の間々に牧場があつて、そこには牛や羊などが勝手に寝たり起きたりしてをる。谷川の流れるには、日本の田舎で見る水車がかつて、ギィイバターと音して水をはこんでをる。巖石は處々に聳えて、根草の赤く黄色に染め成されてをるのも、飽くこと知らぬ眺めであるのに、老いかまをつた、爺さまなごが、面白い石の上に陣取つて、釣を垂らして居るなどは、歐羅巴の奥にも、文人畫の模範があること思はるゝばかり。

百三十六
こんな處にゆく、男女ともに服装も都は違つてをる。その中にも女はよつほど妙で、ユルセットを表衣の上からかけて、大變立派に飾つてをる様子は、まるではでな腹當でもかけてをるやうである。その帽子といへば、丁度我が中古に行はれた武官の老懸といふ風で、今一しほ大きなのを鬢より兩方に張り出し、更に頭髮よりは白い切を二筋ばかりにして垂らして居る。これは頗る活潑に見えて、古代からの瑞西の服とおもはれる。中には麥葉帽子の大きなものをかぶつてるものもあれば、立烏帽子のやうなるを戴いてるものもある。物賣などは背に荷を負ひてゆくが見ゆるは、常に山坂を上り下りする故であらう。
巴里や伯林や倫敦から見ると、空氣は清し、暑さはうすし、山水の美は天下第一ともいふ上に、こんなかはつた風俗に逢ふのは、實にこの

上も無い愉快で、得難い楽しみであるから、そこらの連中が續々入りこんで来るのは無理はない。食物も獸肉の外に湖で取れるめづらしい肴などもあつて、ちよつとおつである。
故にこの國の建物の美といつたら、恐くは旅館が多分を占めて居らうが、その客の數も非常で、上り高といふも、一ヶ年に四五千萬圓位は收獲があるといふことである。譯はない、わが夏の箱根や日光と同じ事で、その規模の一層大きなものご考ふれば、間違は無いだから、言語などは獨逸言でも、佛蘭西語でも、伊太利語でも、差支は無。夫のみでない、この國人は殆ど是等の詞を自分の詞としてをる。是を外國語は成るべく遠けてをる、英獨佛の大國に比べて見たら、意氣地無しには違ひはないが、かういふ國がらごしては、至極適當してをる。

自分の子の頭の上に林檎を載せて射させられた名高い話の維廉
テルといふは即ちこの瑞西の人で、佛蘭西革命の大根元とも指さ
さるゝ民約論の著者、ルーソーといふ人も、この國で生れたのであ
る。こんな風に歴史を調べると、この國にも昔から英雄豪傑は隨
分出て居る。

巴里の萬國大博覽會の時、この國では瑞西の村落の景をあらはし
た大きな見世物をこしらへた。それには山もあり、瀧もあり、牧場
には牛も遊んでをるし、あまたの村落は例の雪ふせぎの丸太をあ
げた板葺きで例の風せる男女等が絹物だの時計だの又は木彫細
工だのといふものを賣捌き、別に一大料理店を開きて、瑞西音樂瑞
西躍り、瑞西料理といふので大當てしたが、今その國に入つて見る
と、いかにもそれが思ひ出されて、大喝采を受けたのもあたりまへ

だとおもはれた。
實に「ガヤ／＼ガタ／＼」、我利々々の中に生活して居る歐米人の目
をよるこぼしめ、心を樂しましめるものは、この瑞西の景色である。
瑞西はこの點から見ても、世界の人種に快樂を與へる爲に出來て
居る國で、神様が人々をくつろがせる爲に、こんな風景のよい國を
つくり出されたのであらう。だから歐羅巴では避暑の遊びとい
へば必ず瑞西をおもひ出し、瑞西といへば大きな巖石や青々とし
たる樹木や、すが／＼しい水流や、なんか、直に目にちらつく。こ
の點については、いかに獨逸人が逆立して考へても、佛蘭西人が頭
をあつめて心配しても、英吉利人が世界を千遍めぐつて探しても、
外に見出すことも、造り出すことも出來まい。實に壯快到優美で、
歐羅巴の中央にありながら、浮世の塵のすこしもかゝらない、山水

はこの國をおきて外にはない。さればその面積こそ小なれ世界の平和の爲に、こんな國があるといつても差支はないとおもふ。

博物館及び動物園

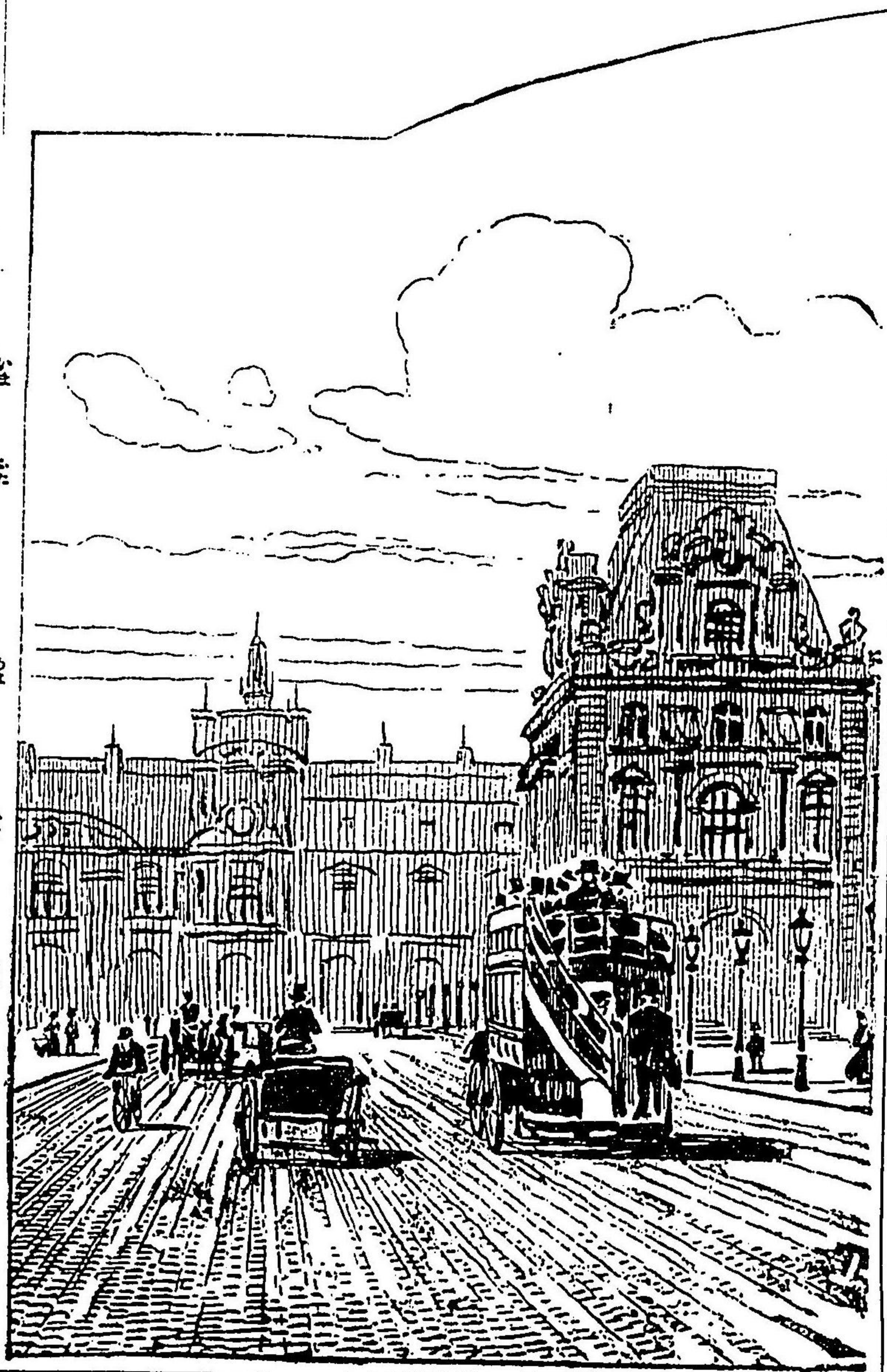
人間は成るべく物を廣く見て、深く考へるのが、智識を養ひ成す本で、たゞ狭い一局部にのみかたよつてを、十分の發育は出来ぬものである。だから天子様の五條の御誓文の中にも、廣く智識を世界に求めよと仰せられてある。だといつて人は各々職業もあるから、朝から晩まで、駈け廻つて物を見たり聞いたりして、わけにもゆかず、たゞ旅行ばかり、若てをる事も出来ない。そこで博物館だの動物園だのといふものゝ必要がおこつて来る。これらは即ち天下諸國の古今にわたりて、いろ／＼な物を集めて、そこに入

れば、僅の間に、何でも見て智識を得られるやうに工夫したものである。東京を初として、各府縣にもこんなものが開いてあるのは、即ちこの爲であつて、殆ど學校や圖書館と相並んで、世人に効用を與ふるものである。

西洋各國は、その本場だけあつて博物館や動物園は、到る處ここに設けられて、その盛大な事といつたら、なか／＼我が國などではまだおつゝかぬ。それは一々書きたてるのも、仰山だから、まづ佛蘭西と英吉利との事をこゝには言はう。こんなものは大方この國でもこの仕掛に大したかはりはないから、その二、三で澤山だらうとおもふからだ。

佛蘭西の巴里で、一番大きい博物館はルーブル館である。これは王政時代の宮殿であつたのを、後に博物館としたので、之を舊ルー

ルーブルといふが今は二つとも併せて一つの大博物館となつて



ブルといふ。又それにつゞいて奈破翁三世が増築した部分を新



をる。そういふ譯だからその建築の壯嚴で、若かも彫刻等の美に富んで居ることは、殆ど無類で、そのみでも十分に考究する價がある。

この陳列品の重なるものは彫刻及び繪畫である。船舶室東南洋風俗室などもあるが、それはまづ附屬のやうなものだ。

彫刻といへば我が國では、まづ奈良の古社寺などにあるのが、一番いゝのだが、これも木彫だから、今残つてをるのは割合に少い。我が帝室の博物館に、これらの陳列品がすくないのも、この故だらう。然るに西洋では、彫刻は昔から大變に盛んで、従つてその技術も進歩して居る。又それらは多く大理石であるから上代のものも割合に残つてをる。即ちこの館にあるのも、埃及、小亞細亞等の古代墳墓に用ひた彫刻物より、希臘羅馬の名刻は云ふまでもなく、佛國十

六七世紀より十八九世紀に至るまで、その良きものは大方網羅してある。中にはその實物でなく模造もあるけれども、ごもかくも歴史を逐うていつ時代のも見られるのは、この館の上に出づる所は無いかとおもふ。最も伊太利は本場だから、羅馬の博物館にいつて見るに、ルーブルも頭が上らぬものが澤山だが、それは仕方が無い。

小亞細亞地方から取寄せたものには、半獸半人の餘程奇跡な物が多く、埃及の墳墓の石などには、想像も及ばぬほど、えらい大きいものがある。孰れもその時代の開化の程をおしはかるに窟強の材料であり、また現今彫刻家の容易に得がたい参考品である。

希臘や羅馬に至りては、目のさめるほど、手際なものが多くて、今日歐羅巴の美術の淵源、根本と認められるも、いかにも道理あること

ごおもふにつけても、現今の技術がいつになれば昔の人だけの腕になるだらうか、疑はれるほどである。最も十七八世紀の物に至つては眞に逼れるものが多くあつて、頭を下げられぬことも限らぬ。

これらの彫刻は、神様の像、帝王將相名士の像、又は神話、遊戯等の題が多い。いづれも例の裸躰、若くは半裸躰から成立つてをる。こんな古代からの習慣だから、今日の歐羅巴に裸躰彫刻、繪畫等の多いわけである。

繪畫は、伊太利派、和蘭派、フランマン派、西班牙派、獨逸派、英國派、佛國派など、昔から今に至るまでの名品を集めたれば、一たびこゝに入れば、ごんなめでたい物でも見られる。

これ等の額は大きなのは二十間四方ばかりのものもあり、二三間

位のものは數限りも無い。歴史の畫だの、風俗の畫だの、宗教の畫だの、景色の畫だの、肖像だの、さまざまだが、いづれも天下有數の品だから、見れば見るほど感心するものばかりである。

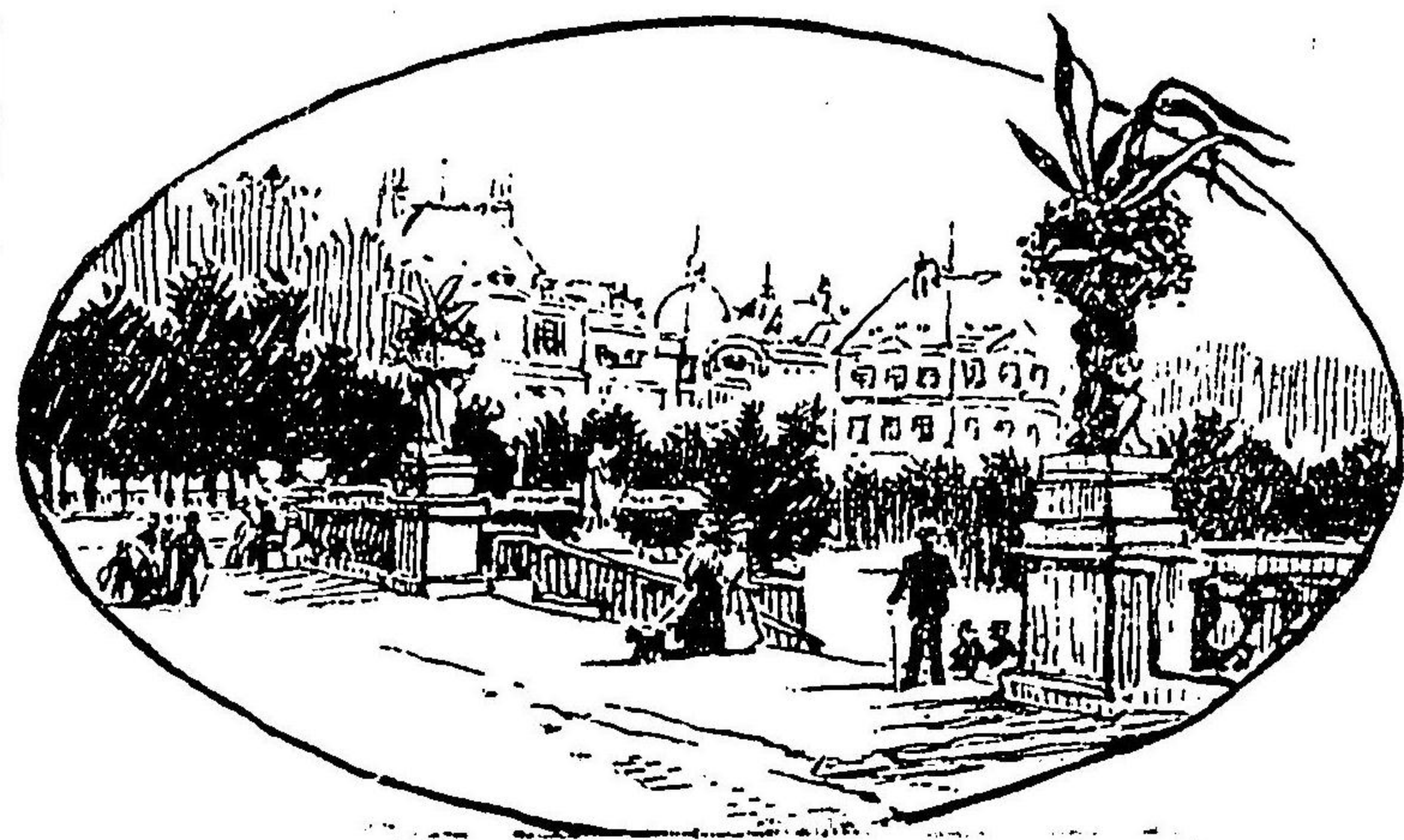
又この館内には、奈破翁一世が即位の時の玉冠があり、太刀があり、時計及び小道具類、飲食器等も飾つてあるが、歐洲を一統した勢ひの時のだから、その費澤さ加減實に驚く外はない。

必竟この館に集めてあるものは、路易家以來のもの、奈破翁一世が諸方を征伐して分捕つて來たものが多い。だから諺に「佛蘭西一國よりも、このルーブル博物館の方が貴い」と云ふ位で、金につもつたら、どれ程か分らぬ。世界中の美術品は悉くこゝにあるといつても、差支はない。

又リユクサンブル博物館といふがある。これは美術専門の館

て繪畫と彫刻とばかりである。ルーブルに比へては、小供と大人とのやうなものであるが、決して侮るべきものでない。こゝには佛國現今の美術家の手に成れる名品のみを集めてあるので、こゝに列ねられるは、この仲間の譽れとしてある。

歴史博物館としては、ヴェルサイユ館が第一等である。これは路易十四世が驕りに驕つた時の宮殿であつたのを、後に博物館としたのである。十四世はみづから太陽王と稱へて居つたといふが、その贅澤であつたありさまは、こゝに入つ



て見れば能く分る。さういふ縁故もあるから歴史博物館として、佛國の國初から今日までの歴史を大なる額に畫がいて順を追うて掲げてある。だから之を一々見てゆくに佛國の盛衰興敗、英雄豪傑の事跡各時代の風俗まで瞭然と分る。且つその人物は悉く似顔であり、またその肖像を畫の外に彫刻にても、あらはしてあれば、古の人にも親しく逢ふやうな心持がする。その額の大きなのは四十間餘もある。素より畫師も上手ばかりだから、美術としてもまた貴いものである。この館には場所がらだけに、路易十四世の寢臺及び調度類が並べてある。殊に寢臺は王が死なれた時のまゝで、その脇に時計があるが、これもその時に針が止つたまゝだといふことである。

又この館には彫刻類も随分澤山ある。併しこれは主でない。繪



の爲にはサンゼルマン博物館があり、古建築及び世界の風俗を見

書しよの参考かんこうに止とまる位くらゐだ。歴史れきし博物館はくぶくわんとしては、實じつに世界せかい無比むひといはねばならぬ。

巴里市パリの歴史博物館はくぶくわんとしては、カルナヴァレ館カルナヴァレといふがあつて、市の沿革えんげつ市しに關係けんけいあつた事ことがらの歴史物れきしものを集あつめてある。

又また古物こぶつを見みるためには、クリュニ―博物館クリュニがあり、東洋とうようの古代こくだいの宗教しゆじゆ工藝こうぎ等らを見みるためには

ギユメ―博物館ギユメがあり、考古かうこ學がく

るためには、トロカデロー博物館トロカデローがあり、又また動植物博物館どうじゆつぶつ工藝博物こうぎはくぶつ館くわんなど、備そなはらぬものはない。

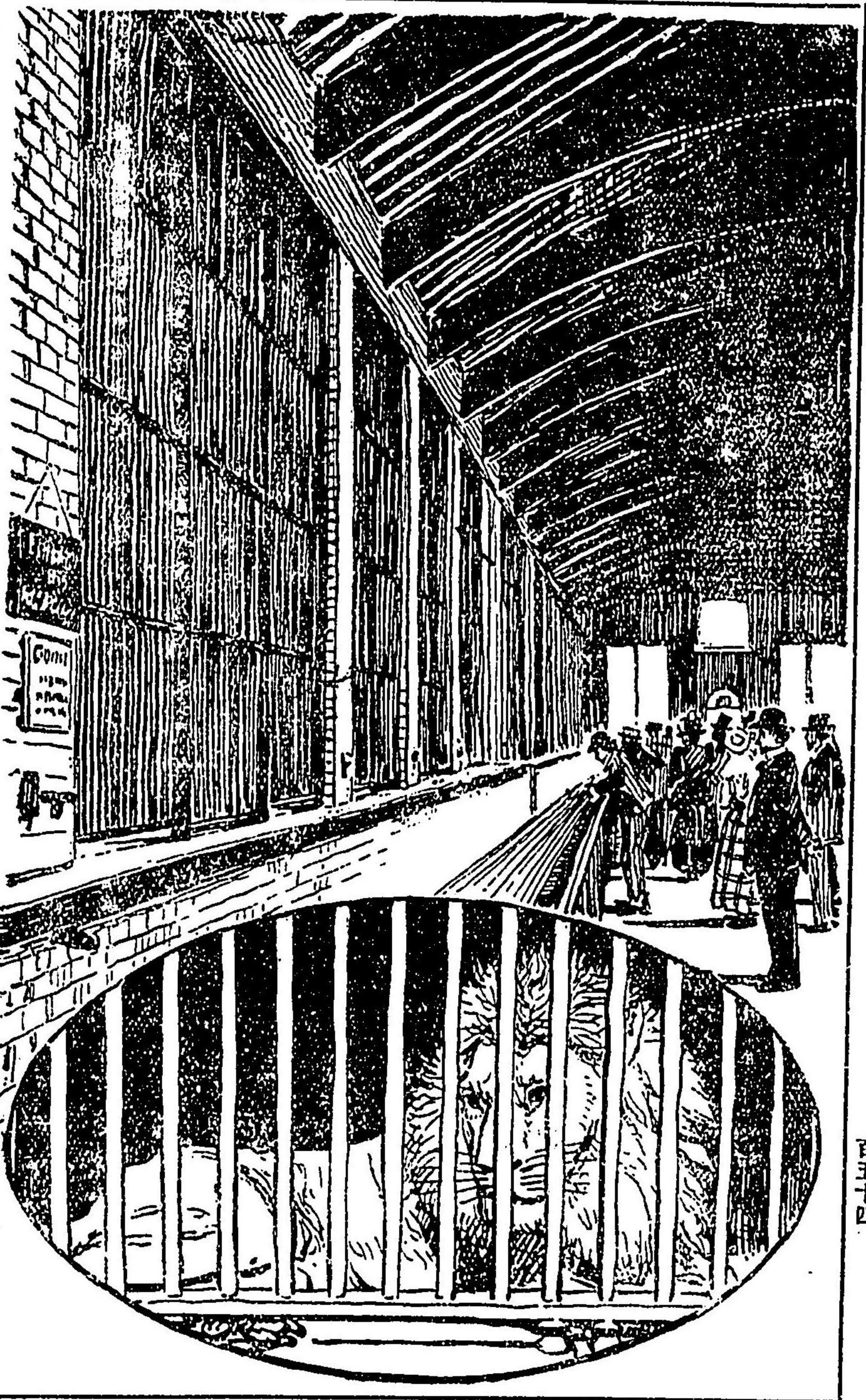
英國えいこくの博物館はくぶくわんは大英國博物館だいえいこくはくぶくわんといふのが第一だいいちで、これは今いまより二百五十年にひゃくごじゅうねんばかり前にハンス、スロアーヌといふ醫師いしが澤山たまたまの物を集あつめて居ゐつたのを、政府せいふに獻上けんじやうしたのが本もとになつて、その後のち政府せいふの力ちからで買かひ集あつめたから、今いまではその所藏しよざうの博ひろく大おほきい事ことは、恐おそくは世界せかい一いちだらうとおもふ。この館くわんには印刷しんぷつ謄本たうほん、彫刻てうこくの摸型もけい、圖案たんあん、古代こくだい東洋とうよう、古代こくだい及び中古ちゆうこ英國えいこく人種學じんしゆがく、古代こくだい希臘せつ及び羅馬ろま通貨つうか及び紀念貨きねんかやうのもの、それそれ類るいを分わつて陳列ちんれつしてあるが、我われが國くにの物品ぶつひんなごも、素もとより澤山たまたまに並ならべてある。又また館内くわんないには、別べつに圖書館としよくわんの設しやけもあつて、世界せかい各國かくこくの書籍しよじやくが大方たうほう備そなへてある。總すべてに通つうじて孰たつれも珍品ちんぴんで委あづしく見みやうとするには、二に三さんヶ月げつはかゝる。

又サウスケンシントン博物館といふがある。これは建築その物が餘程美術的で、かつ實際に適して見事である。こゝには繪畫彫刻工藝品及び動物なごもある。又建築模型、東洋技術、印度室なごもあつて、容易に見盡される譯のものではない。世界に有名な動物園は、この館の傍にあつて常に人足の絶える隙はない。美術博物館としては、ナシヨナルガルリーといふのが第一等だが、これは一千八百二十四年英國議會の決議に由つて出來たので、こゝには本國のは云ふまでもない、伊太利和蘭、フラン西、その他諸國の古へより今に至るまでの、名人の手に成れる繪畫を年代を逐ひ系統に由つて陳列してある。巴里のルーブルのやうに數は多くないが、小奇麗に能く並べてあるから、一たび此に入れば世界の繪の歴史を見通すやうになつてゐて、その道の人に便なるは

云ふまでもない、素人でもその研究が出来る。

歴史博物館としては、古今英雄豪傑の肖像のみを集めた、肖像博物館がある。英國史中の人物は、この館に集つてをるから、一たび入れば誰にでも逢ふことが出来る。その他倫敦古城博物館には、東西古今の武器を集めてあるし、又ローヤルアカデミー博物館カールータートには、近世及び現今の美術品がそろつてをる。海事及び諸工藝に關した陳列所なごは、數へも盡されぬ。動物園は倫敦のゾーロジカルガーデンが世界一であらう、次は伯林及びアムステルダムなごのは大したものだ。巴里にもあるが、それ等に比べると數が少ない。これは巴里籠城の時分に食つきて喰うたからこの事だ。この動物園の仕組はごこでも同じく鐵柵や石造の家に生物を入れてあるので、多くは種類分にしてある。

獨逸でも露西亞でも白耳義でも和蘭でも太西洋をへだてた阿米

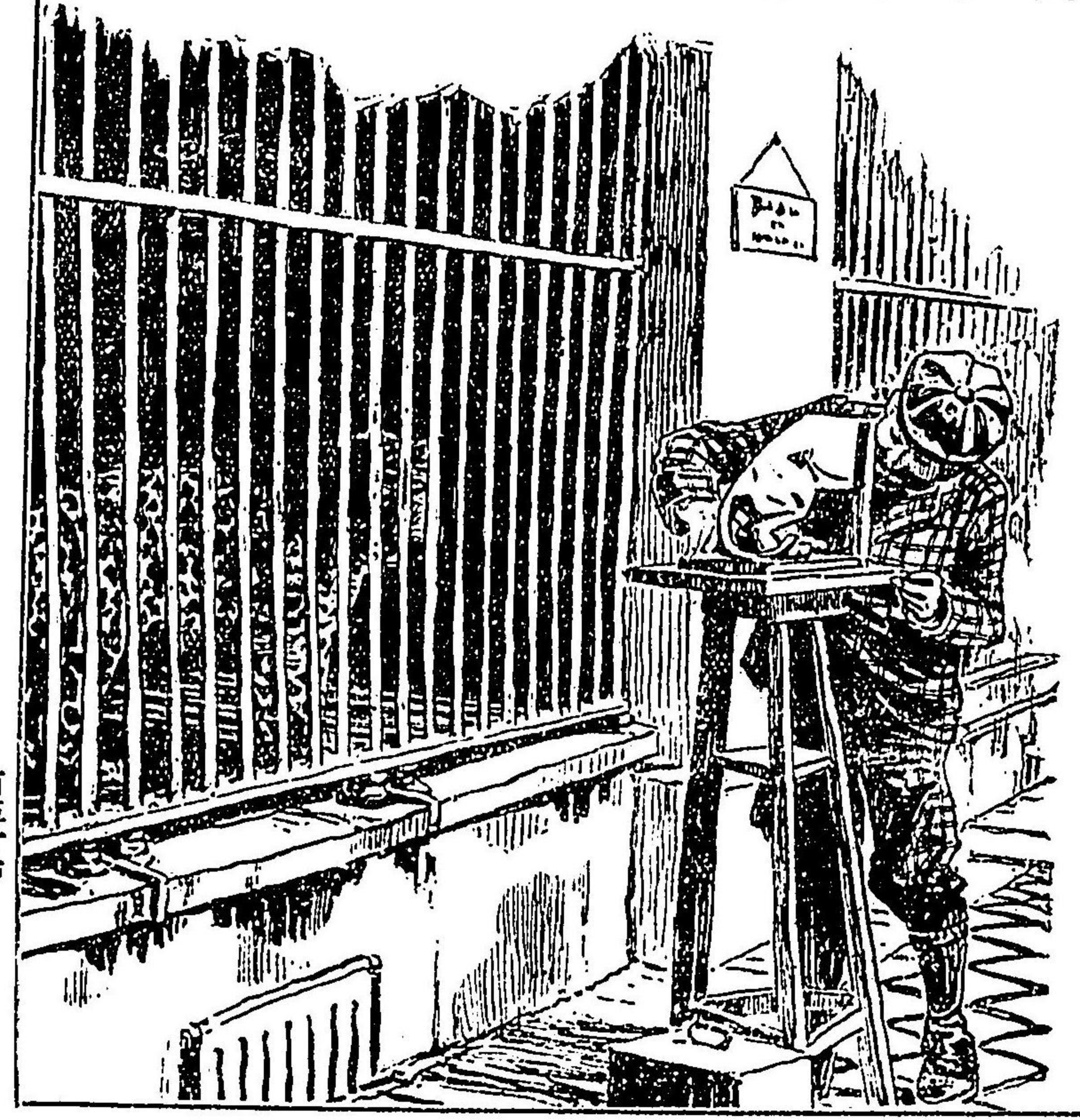


博物館及び動物園

利加でも凡そ一都府を成して居る處に博物館や動物園の四ツや五ツ位持たぬ處は無い。それらはいづれも非常な金力と年月とを費して出来てをるので、ごもにその根本が堅く深い。何が故に歐米人がかくの如く熱心に博物館や動物園をやつてをるかといふに、これは殆ど學校又は圖書館と同じ効用或はその以上をなすことがあるため、決してたゞの物ずきや何かの譯では無い。

例へば繪畫とか彫刻とかを研究しやうとおもふと、その人は一通りその知識を得てからは、直にこの館や園に入つて見る、いろいろの工本がざらりと並んでをる。獅子の眠てをる處も、虎が嘯いてをる工合も、生きうつしが出来る。だから能く見て能く考へて、之を我が物としやうといふ意氣込で研究すること、いかばかりの効用利益を興へるか知らぬ。故に各國では、その館や園に在るものは、どれも勝手に摸寫することを禁ぜぬのみでない、或る場合にはそれを寫眞する事をもゆるす。ごこの博物館でも見物人の外に多くの男女の學生が、それらの物に向つて、摸寫したり考へたりしてをるのは、即ちこの故で、これらは朝から晩まで詰り切りにやつてをる。又一つの新しい物品を製造しやうとするにつけても、例へば陶

器業者は陶器の博物館に入つて、世界中の古今の参考品を研究し、織物業者は織物館に入つて見る、こいふ風であるから、その考案を助け、かつは世界の大勢に通じられるから、造り出したものが、自然良きものも多く、賣れ口もいゝこと云ふ事になる。製木屋は、そのあまたの雛形を見る、こいふ出来、建築家は同じく古今の建築を

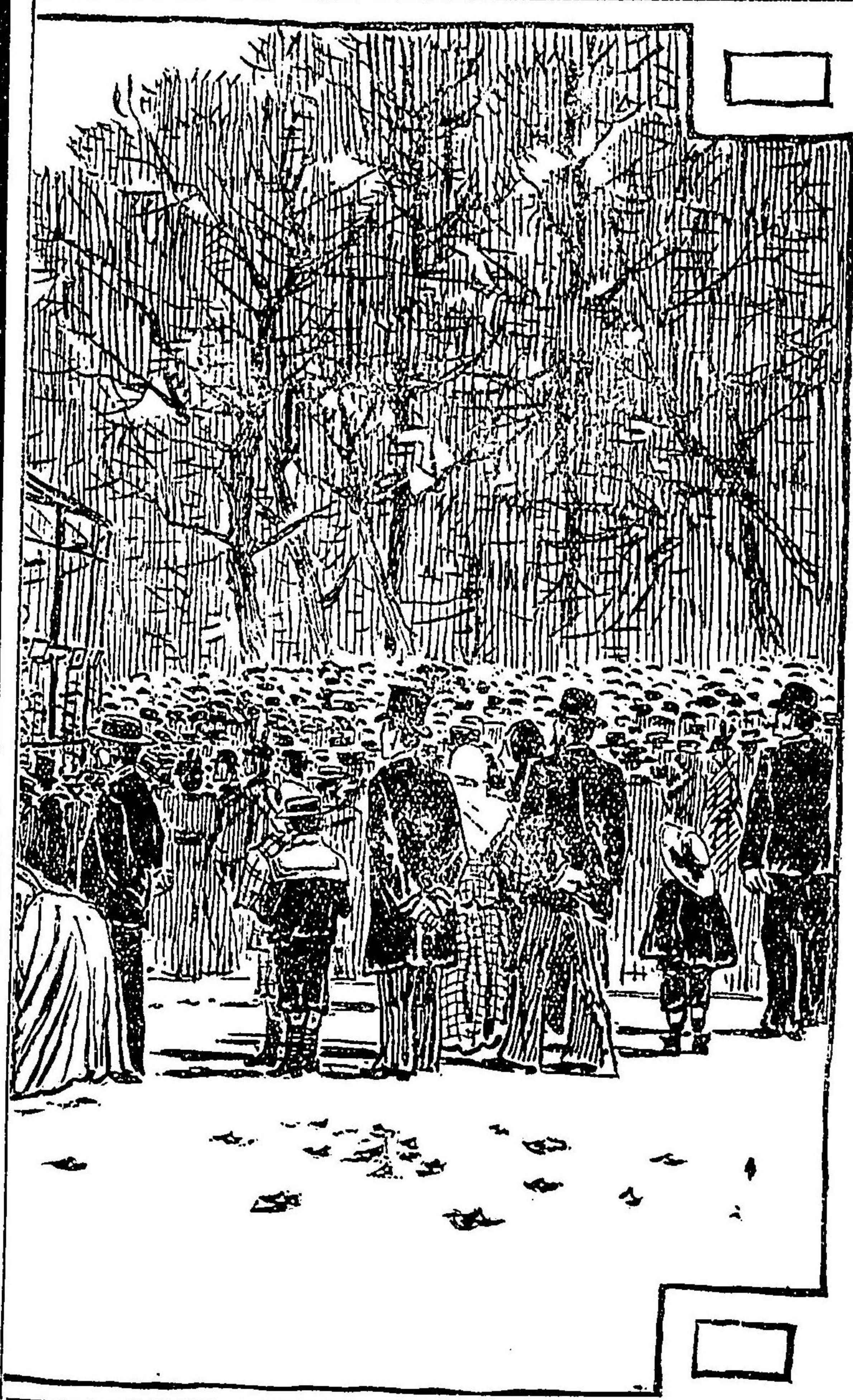


爲すことは莫大なものである。



博物館及び動物園

一館にて見るここが出来る。こんな鹽梅だからその社會に益を



かういふ理由によつて、各國ともに博物館といふものは、大金をかけて設立するので、決して骨董店と同一視すべきものでない。併しなから、物品は物いはぬから、之を監理する人が注意の如何によつては折角の物品も、それ丈の効用を爲さぬ事に陥る。だからそれ専門のものが預つて、一々その説明を附け、目錄を整へ、陳列の方法も成るべく分り安く、見安くして、誰にでも直に解し得られるやうに仕組んである。又かやうに一國の富源ともなり、教育の贊助ともなるべきものであるから、國立のものとはどこにいつても無難縦覧勝手に、誰でも自在に出入することにゑてある。又その見物人、研究人の便利を興ふる爲には、英國などには、館中に料理店さへ設けてある。又専門の學者を頼んで時々、それらの物品について講話を開き、洽ねく有志のものに聴かせることなどは珍ら

しいことでない。右のやうな譯だからその陳列といふものは、頗る注意に注意を加へて、おかぬご人もやかましくいふし、又効用も見えぬから、陳列方には、非常に金をかけて骨折つてをる。例へば動物のやうなものは、獅子でも虎でも蝶でも蛇でも、彼等が平生住んでをるありさまから、子を産んで生長する處まで、陳列工合によつて見知られるやうにしてある。歴史畫の如きは、一々その畫中の人物を別に圖取して説明をつけたものを、本額の下に附け加へてある。無論各部署々の畧目録も精目録も備へてあれば、陳列品の重なるものは、寫眞に取つて、有志の人に興ふるやうにしてをる。だからその國の文明の程度は、諸の博物館や動物園を見、その設備の如何を考へても、粗分るやうな心地がする。

たゞ物品の集まり次第に順序もなく並べたて、或は我が好きなる道にのみ重きをおいて、他をかへり見ず、手當り次第物好次第に積み重ねるやうな博物館は、不規則極まる学校のやうなもので、社會に効用を與へる事が少い。まして商品の陳列などは、萬國日新の勢におくれず、能く世界の趨勢の分るやうにせなければ、何の用もなさぬ。二十年も三十年も昔には、やつた品などを今でも世



に翫ぶやうに心得てその標本を示しおくやうでは、寧ろ博物館なごはなくてもいゝ。要するに歴史として見るものご、實用として見るものご、研究の標本として見るものご、いろいろ陳列かたにも、區別をたて、それの専門學者の説明を附けておかねば、思つたほどの効用なく、國家が費用を出して立て、おく必要も無いご云ふものである。初に云ふ通り博物館動物園は、成るべく廣く物を見せて、成るべく深く研究せしめる爲のものだから、その局にあつてるものは、最も深切に最も鄭寧に考へねばならぬ。決して世に用の無い隠居様が、翫弄物を並べてをるのことは違ふ、猫や犬のすきなお嬢さまが自分のすきな毛色のばかり飼つておくのことは違ふ。

西洋の宿屋

百六十四

草枕を結んで、旅を憂きもの、第一に數へたのは、過去の夢であつて、今では日本でも西洋でも、旅行は一つの慰みものとなつて來た。だから新婚旅行なんご云ふこともあつて、夫婦家を爲す初めには、まづ二人ですきな處を旅するといふやうな氣樂な事も、世界一般の習はしのやうなわけになつて來た。

こんな世中だから交通機關もますます發達し、隨つて宿屋といふものが、大變立派なものになりかはつたのです。昔は旅といへば、夜具蒲團から、飲食物、日用の道具まで、自分で持歩いたものであつたが、今は支那内地旅行位に、そんな事が残つてをるのみで、全体の世中は、身軀一つでびんくく飛んで歩かれるやうに簡易に便利

になつて來た。

そこで宿屋といふものであるが、同じ世中でも日本と西洋と少々趣が違つて居る。最も日本の宿屋も、來客の共同生活所のやうなものではあるが、猶各々割據的に出來て居る。西洋のは悉く反對で、どこまでも共同的である。これは各社會の習慣だから、いつれをいゝごもわるいごも評することは出來かねるが、西洋のやうに往來の客が多く、社會が頻繁になつて來たら、いつか我が國も彼の風になるかしらぬ。

その時はその時として、まづ今日の處はどんな風かと云に、一夜泊を主とする宿屋といはゆる月極め週極めの下宿屋と二通りあるは、我が國と同じ譯だけれども、その模様が頗る替つてをる。歐米では、旅人が先づ宿を求めやうといふ時には、その旅店に入り

受付に面接してその由をいふと、受付は惠比須顔で之をむかへ直ちに何階め位がよきか、又その價などの事を問ひ、家によつてはその圖をさへに示す處もある。客の方では、二階ならば二階三階ならば三階さだむれば、大きな家では、さあこちらへ給仕人が案内して昇降機の室に誘ふ。それにすまして入つてをるご、瞬く中に、その室がブーツを持ち上つて、望む處の階にとゞまる。そこで戸を開いて、ニューと出るご、やがて他の給仕人がをつて、長い廊下を案内して、其あいてをる室を見する。さうしてこの室は一夜いくら、かの室はいくらご、くはしくいふ。そこで自分の考へを充分いつて、氣に入つた室を取りきめると、やがて帳面をもちきて、どうぞこれに、いつて姓名をかゝせられる。必ず自筆でなくてはならぬ。夫から食事つきか、室ばかりかの約束をさだめる。是等が

我が日本と違ふ點で、室ばかりならば一日何圓、食事つきならば一日何圓と、それ／＼價が違ふのである。最も是は初め受付に向つて、相談をするとも勝手である。食事つきとすれば、向ふのあてがひぶちで、少しはさらひな物でも喫はねばならぬし、酒などは必ず飲むべきものごしてついでをる。また例ひ宿で食事せぬでも、それ丈は支拂ふ義務がある。室ばかりならば、食事ごに別に錢を拂ふから、何でも好きなものを喫ふごが出来、その代り價は比較的、に食事つきよりも高い。あかほ他店にいつて、三度々々食うても、宿屋の方では、濫柿づらなどは決してせぬ。是等の事の約束が濟むご、その室の鍵をわたして、給仕人はいつてゐまう。跡は寢臺ご、卓子椅子、さては簞笥などのさし向ひで、日本のやうに、下女が茶菓を持つて來るごか、衣服をたゝむごか、或は餘計なお老やへりし

て御機嫌を取るごかいふやうなもてなしは、普通な處ではせぬ。用があつてよへば、いつでも下女でも下男でも來るけれど、その時丈の事で、いは、甚心さびしいやうな工合。若し御伽にそんな者をよびつけて置かうと思ふなら、それ丈の報酬費を拂はねばならぬ。湯は日本の宿屋では、必ずつきものになつてをるが、向ふのは、そうて無い。わざ／＼あつらへねば、御湯めし遊ばせなご、いうては來ぬ。あつらへれば、必ず壹圓や貳圓は取られる覺悟でなくてはならぬ。かういふやうな譯だから、黙つてをれば、茶ものませられず、獨りで衣服をきかへ、獨りで寢臺にいね、獨りで起きるまでの事だ。日本では、すこし上等の宿屋では、寢てから下女が來て衣服をたゝむやら、烟草盆をもて來るやら、湯水を備へておくやら、大もてなしするが、そんな事は更に無い。

その代り室が極まつてしまへば、誠に安心なもので、他人などは容易に這入つて來ぬ。チャーンご内から鍵をおろしておくので、殆ど城内にでも居るやうだ。用があつて來る人は、外から戸を、ごんたゝく。その時自分が入れてよいと思へば、お入りなさいといつて、戸をあければ、人がニユーツご入つて來る。今はいかぬ、こいへば、たゝき損して、ソーツごかへつてゆく。西洋では人の室に入るには、戸をたゝいて、その承諾を得なければ、たゝひ鍵がおろしてなくても、入ることはならぬ。だまつて音させずに入るやうなところは、無禮の極ごしてある。

食事時に至ると、鐘が鳴つたり、鈴がひゞいたりする。するご泊り客は一同に食堂に集まる。この時は必ず手あらひ、口そゝぎして、襟を正し、服を正し、香水の蒸りを放つてゆくのです。素より各國

人入交ぜで、卓子に向ひ坐するから、さまざまな人がある。婦人もをれば小供もをる。白ん坊もをれば、黒ん坊も居るこいふわけで、知らぬ同志互に話して、食事を一同に了る。それからは自由自在で、喫烟室にゆく人もあれば、談話室に集まるものもある。或は音楽をやつて互に遊ぶこもすれば、共に庭の運動場で、テニスや何かの遊技するこもあるこいふわけで、銘々勝手に好きな事をやるのです。その食料は前にいつたやうに、若し食事ごめの投宿でなければ、その度こに食堂の會計係(これは大方入口にある)のこにいつて拂つて来る。又或は姓名を自書しおいて、跡で拂つても自由である。喫烟談話室などには、世界中の重なる新聞や雑誌は、山のやうにおいてあるから、勝手次第に見てい。又讀書及び書記室もあつて、そこには、いろ／＼の書籍や、又は筆紙墨が供へて

あつて、自由につかつて差支ない。差支無いのみでない、宿屋では成るべくその紙をつかつて貰ひたがつてをるやうだ。これはその紙及び状態には、大抵はその宿屋の名が摺り出されてをるから、一つの廣告になるわけでもあらう。いはゆる繪端書などに、その宿の繪をかいたのも、澤山おいてあるのです。すこし大きな宿屋では、郵便も電信も取扱ひ、散髪店もあつて、眞に便利である。洗濯物や何かも、無論こりあつかつてくれる。こんな譯で、大都會の大宿屋になるこ、一家に五六千人は宿するこは平氣で、その食堂など、いつたら、いくつもあるが、その大きいのは、實にはても見えぬやうなのがある。そんな處になるこ、庭などの奇麗なこは、公園にでも入つたやうで、常々音楽隊が奏樂したり、さまざま躍りや藝などが絶えぬ。球突室などは、殆ど夜中